

諫早市文化財調査報告書 第6集

はじのえ
土師野尾古窯跡群

1985.3

諫早市教育委員会

発刊のことば

諫早市土師野尾町に古い窯跡が発見されてからかなりの年月がたち、いろんな論議がなされてまいりました。また土師野尾焼については陶片も多数出ており、肥前古陶のなかでどのように位置づけるかということも研究されていたようです。しかしこれらの解明は浅く、学問的に深く研究されるということはありませんでした。從って土師野尾焼について窯跡を中心に調査を実施することは教育委員会にとりましても当面の課題であったわけです。

こうしたなかに、文化庁、県教育委員会のご指導とご援助により、また一方地権者の方々のご理解を得て昭和59年7月窯跡の発掘にあたりました。

経過につきましては本論の中に述べていますが、土師野尾焼は私達諫早の先人たちの偉大な文化遺産であったと思っております。近世の始め諫早にも立派な陶工達がいたという確信も得ました。恐らく土師野尾の地名と共に、ずっとそれ以前から焼物を取り組んでいた先人たちがいたのではないかという思いも強くなつて参りました。

文化遺産について解明を行い、それを後世に残すことは、現在を生きている私達に課せられた務めでもあります。このような意味で風評と憶測の土師野尾焼に少しでも科学的メスを加え得たことは、良かったという評価しております。

終わりにこの調査にあたり、種々のご指導と御助言をいただきました文化庁、県教育委員会、調査員、土師野尾焼検討会委員並びに地権者の方や作業に従事していただきました皆さん方に、心から感謝申し上げ発刊のことばといたします。

昭和60年3月31日

諫早市教育長 西原 英輔

例　　言

1. 本書は、昭和59年度、国・県の補助金を受けて実施した土師野尾古窯跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は諫早市教育委員会が実施した。なお、調査に対して、長崎県文化課、長崎県立美術博物館の指導・協力を賜わった。
3. 残留磁気測定に関しては、島根大学理学部の全面的な協力を得、またその測定結果については伊藤晴明教授、時枝克安助教授に玉稿を賜わった。
4. 出土遺物等については、諫早市教育委員会が諫早市郷土館において、公開・保存している。
5. 本書の執筆者は次のとおりである。

I ~IV・VI・VII-3 ……秀島貞康

V……………伊藤晴明・時枝克安

VII……………下川遠彌

6. 遺構の実測・写真撮影は下川・秀島・古賀佐徳が行い、副島邦弘・村川逸朗両氏の協力を得た。また、本書掲載の図面、図版等の作成は秀島が行った。
7. 本書に使用した高度値は海拔高であり、方位は磁北を示している。
8. 本書の編集は秀島が行った。

本文目次

発刊のことば

例言

| | |
|--------------------------|----|
| I 調査にいたる経緯 | 1 |
| II 遺跡の立地と環境 | 3 |
| III ハラタラ古窯跡の調査 | 7 |
| 1. 調査の経過 | 7 |
| 2. 遺構 | 9 |
| 3. 出土遺物 | 10 |
| 4. 小結 | 19 |
| IV 中道古窯跡の調査 | 20 |
| 1. 調査の経過 | 20 |
| 2. 遺構 | 21 |
| 3. 出土遺物 | 26 |
| 4. 小結 | 42 |
| V 土師野尾古窯跡の残留磁気測定 | 43 |
| VI 結論 | 47 |
| VII 唐津系陶器の中における土師野尾窯について | 51 |
| 1. 唐津系陶器の流れ | 51 |
| 2. 唐津系陶器における土師野尾窯の位置 | 52 |
| 3. 土師野尾窯の伝世品について | 54 |

挿 図 目 次

| | |
|--|----|
| 第1図 諸早市位置図 (1/1,600,000) | 3 |
| 第2図 遺跡分布図 (1/40,000) | 4 |
| 第3図 ハラカラ古窯跡地形図 (1/300) | 8 |
| 第4図 ハラカラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 13 |
| 第5図 ハラカラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 14 |
| 第6図 ハラカラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 15 |
| 第7図 ハラカラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 16 |
| 第8図 ハラカラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 17 |
| 第9図 ハラカラ古窯跡出土遺物及び表採資料実測図 (1/2) | 18 |
| 第10図 中道古窯跡地形図 (1/300) | 21 |
| 第11図 各室計測図 | 24 |
| 第12図 物原土原断面図 (1/30) | 25 |
| 第13図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 33 |
| 第14図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 34 |
| 第15図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 35 |
| 第16図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 36 |
| 第17図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 37 |
| 第18図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 38 |
| 第19図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 39 |
| 第20図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 40 |
| 第21図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2) | 41 |
| 第22図 中道古窯跡試料採取場所 | 43 |
| 第23図 中道古窯跡残留磁気方向 | 44 |
| 第24図 ハラカラ古窯跡残留磁気方向 | 45 |
| 第25図 地磁気永年変化図 (広岡, 1977) と中道古窯跡の測定値 (+印) | 46 |
| 第26図 土師野尾焼伝世品 (1/3) | 57 |
| 第27図 土師野尾焼伝世品 (1/3) | 58 |

表 目 次

| | |
|------------------|----|
| 第1表 遺跡地名表..... | 5 |
| 第2表 各室計測表..... | 24 |
| 第3表 出土遺物一覧表..... | 30 |
| 第4表 出土遺物一覧表..... | 31 |
| 第5表 出土遺物一覧表..... | 32 |

別 図 目 次

別図第1 ハラタラ古窯跡実測図 (1/30)

別図第2 中道古窯跡実測図 (1/30)

図 版 目 次

| | |
|--|---|
| 図版1 ハラタラ古窯跡全景 (西より) 窯跡全景 (西より) | 図版10 第2室左隅の状況 第2室全景 |
| 図版2 第3室の状況 第3室遺物出土状況 第3室遺物出土状況 | 図版11 第3室奥壁状況 第3室左隅の状況 |
| 図版3 第1室から煙出し 第1室から煙出し 第1室東壁残存状況 | 図版12 第3室火床状況 第3室火床状況 |
| 図版4 第1室焚口状況 調査風景 調査風景 | 図版13 第3室火床状況 第4室・第5室全景 |
| 図版5 出土遺物 | 図版14 遺物出土状況 (第3室) |
| 図版6 出土遺物 | 図版15 遺物出土状況 (物原) 土層断面 (側溝) |
| 図版7 中道古窯跡全景 (西より) 窯跡全景 落ち込み部全景 | 図版15 土層断面 (物原) 調査風景 |
| 図版8 煙出し状況 煙出し状況 煙出し細部 | 図版16 残留磁気測定試料採取風景 出土遺物 |
| 図版9 第1室から第2室の状況 第1室奥壁状況 第1室焚口部状況 | 図版17 出土遺物 図版18 出土遺物 図版19 土師野尾窯伝世品 |

I 調査にいたる経緯

土師野尾古窯跡は、昭和2年陶芸研究家金原陶片（京…）氏によって発見され、諫早系の焼き物窯として昭和10年、水町和三郎氏と共に編纂を行った『肥前古窯址めぐり』^{型1}の中で紹介され世人の目の触れるところとなった。同書によれば、土師野尾窯としては、中道古窯跡1ヶ所を挙げているのみである。

この土師野尾焼について地元には、諫早家始祖・龍造寺家晴公が文禄・慶長の役の折に、帶同された朝鮮陶工が窯煙を昇らせた、という伝えがある。又、帶同された朝鮮陶工がその後唐津に移り、唐津焼を焼造したとも伝え聞いているとのことであった。この帶同された朝鮮陶工はその名を道珍（どうちん）と言い、その焼き物を道珍焼きと言ったそうである。また、中道古窯跡の立地する南側の深い谷を道珍谷と呼称するとのことであった。いずれにしても、土師野尾焼は、豊臣秀吉の文禄・慶長の役以降に開窯されたという伝えであるところは、他の窯跡の場合と同様である。

この土師野尾古窯跡に関する文献史料は現在のところ皆無であり、多くの疑問点を内包している。そこで、この疑問点を少しでも解決する手掛かりは存在しないのか、ということが今回の発掘調査の端緒であった。事業計画に先立っての疑問点と問題点は

1. 窯跡がどのような構造を示しているのか、またその規模はどの程度のものか。
 2. 烧造された製品にはどのような物があるのか。
 3. 2の製品はどのような系統に属するのか。
 4. 烧造年代は何時頃か。
 5. 窯跡の基数は何基位か。
- という学術的な観点と
6. 現在、窯跡の立地点が植林地となっていること、また古く道路敷設の折窯体の一部が破壊されそのまま放置されており、遠からず消滅する可能性が高いため、その保存策の勘案。
 7. 現時点での唐津焼系統の窯跡として最南に位置しており、調査結果を踏まえた上で、保護・顕彰のための指定の措置ができるいか。

という行政的な観点の二相が存在したのである。

そこで、昭和59年1月に事業計画を作製し、国庫・県費補助事業として実施したい旨の計画書を提出したのである。

その結果、同年4月、国庫・県費補助事業として発掘調査を実施することが決定した。

発掘調査は、7月下旬より実施し、その後事務の都合により調査を一時中断し、10月中旬に終了した。

調査終了後、土師野尾焼に関する検討会を実施し、意見交換を行った。

土師野尾古窯跡発掘調査関係者は次の通りである。

| | |
|-------|--------------------|
| 西原 英蔵 | 諫早市教育委員会教育長 |
| 山口 隆昭 | 教育次長 |
| 松尾 誠 | 社会教育課長 |
| 鶴田 熊 | 課長補佐兼指導係長 |
| 山口 勝実 | 課長補佐 (昭和59年7月1日移動) |
| 芦塚 信正 | 庶務係長 |
| 木原 保夫 | 事務職員 |
| 平古場 直 | // |
| 草野マスエ | // |
| 秀島 貞康 | // 調査担当 |

調査に際し、ご指導頂いた調査員は次の通りである。

| | |
|-------|----------------|
| 古賀 佐徳 | |
| 下川 達彌 | 長崎県立美術博物館主任学芸員 |
| 伊藤 晴明 | 島根大学理学部教授 |
| 時枝 克安 | // 助教授 |

土師野尾焼検討会委員

| | |
|-------|---------------|
| 植村富士男 | 諫早市文化財保護審議会委員 |
| 山部 淳 | // |
| 古賀 力 | // |
| 古賀 佐徳 | |
| 下川 達彌 | 前出 |
| 西川 武則 | 陶芸家 |
| 松本 春雄 | 諫早市経済部商工観光課長 |

調査外業・内業に從事して頂いた方々は次の通りである。

今里ショ、田中クサエ、中路正之、中路フミエ、百武玲子、山口トシエ、山本やす子、
平古場久美子

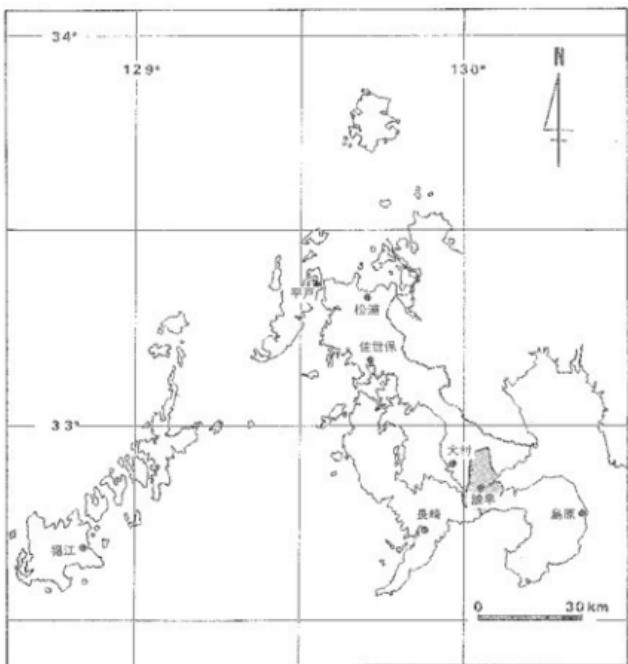
発掘調査及び整理作業に際して、下記の方々、関係機関にご指導とご助言を賜わった。ご芳名を記し深甚の謝意を表するものである。(敬称略、五十音順)

青木龍山、麻生優、有田町教育委員会、諫早市郷土館(野中栄、吉田頑男、山口玲子)、福田三千年、稻富裕和、江口勝美、大橋康二、鐵田武人、唐津市教育委員会、川内知子、北波多村教育委員会、九州陶磁文化館、副島邦弘、立平進、田中重秋、田中時雄、田中豊喜、田中幸男、沈寿官、塚原優季、土井正吉、富永忠久、長崎県文化課、長崎県立美術博物館、中野章子、永松実、夏秋隆一、西有田町教育委員会、波佐見町教育委員会、久村貞男、福田良之、村川逸朗、森内敏和、山崎猛夫

II 遺跡の立地と環境

土師野尾古窯跡群は、北緯 $32^{\circ}49'$ 、東経 $130^{\circ}02'$ の諫早市土師野尾町に所在する。国鉄諫早駅より南へ約6km、県道江ノ浦諫早線の西側に位置する。この県道より分枝する市道を大島居を潜つて西行すると約500m程で左に折れる道がある。この道を地元では中道と呼んでいる。この道を進むと左手にハラタラ古窯跡、右手に中道古窯跡があり、再び県道と繋っている。

さて、本書では從来土師野尾窯と呼称されていたものを土師野尾古窯跡群と改めた。それは窯跡が2基或いはそれ以上存在する可能性があることによる。古窯跡名については、字地名を取って付した。今回の調査ではハラタラ古窯跡と中道古窯跡の2地点2基を発掘調査している。また分布調査を実施したが、時期が夏季であったことと、雑木が繁茂していることにより他の窯跡の確認はなし得なかった。



第1図 謞早市位置図 (1/1,600,000)



第2図 遺跡分布図 (1/40,000)

第1表 遺跡地名表

| 遺跡名 | 所在地 | 立地 | 出土遺物等 | 時代 |
|------------|-------------|----------|-----------------------------|-------|
| 1 ハラカラ古墳跡 | 土師野尾町2118 | 標高55m丘陵 | 瓦・陶器 | 近世 |
| 2 中道古墳跡 | 土師野尾町 | 65m丘陵下部 | | 近世 |
| 3 猫藏石遺跡 | 土師野尾町 | 90m丘陵 | | 不明 |
| 4 下後古場遺跡 | 上師野尾町 | 55m丘陵 | | 縄文 |
| 5 上師野尾遺跡 | 上師野尾町1596 | 10m丘陵先端 | 黒曜石削片・石器 | 縄文 |
| 6 草森横石塚 | 栗山町駄森 | 40m丘陵 | | 不明 |
| 7 久山古墳 | 久山町 | 14m平野 | | 古墳 |
| 8 笹原遺跡 | 久山町1609他 | 43m丘陵 | 黒曜石削片・碎片 | 縄文 |
| 9 長牟田遺跡 | 津久紫町長牟田 | 35m丘陵 | 石器・剣片・碎片 | 縄・中世 |
| 10 西浦久道遺跡 | 津久紫町 | 20m丘陵 | 縄文式土器 | 先・縄 |
| 11 久山城 | 久山町 | 85m丘陵 | | 中世 |
| 12 赤島遺跡 | 久山町 | 10m丘陵 | 黒曜石削片・碎片・削器・他多量 | 縄文 |
| 13 斎川遺跡 | 久山町活川 | 2~7m独立丘陵 | 土器片・石器・箱式石棺・須恵器・土器蓋 | 縄・弥・古 |
| 14 貝津横島A遺跡 | 貝津町横島 | 10m丘陵先端 | | 弥・古 |
| 15 東大久保遺跡 | 貝津町東大久保881他 | 5m丘陵先端 | マイクロコア・剣片・石器 | 先・縄 |
| 16 沖崎遺跡 | 貝津町大久保 | 15m丘陵 | ナイフ・剣片 | 先・縄 |
| 17 平山A遺跡 | 平山町 | 20m丘陵上先端 | 黒曜石削片 | 縄文 |
| 18 貝津横島B遺跡 | 貝津町横島 | 2~6m丘陵 | | 不明 |
| 19 西佐竹遺跡 | 貝津町西佐竹 | 11m丘陵 | 石斧 | 縄文 |
| 20 高城址 | 高城町 | 30m丘陵 | | 中世 |
| 21 真崎西遺跡 | 真崎町102 | 10m丘陵 | ナイフ・黒曜石削片 | 先土器 |
| 22 真崎城 | 真崎町城山 | 65m丘陵 | | 中世 |
| 23 永昌遺跡 | 永昌町 | 40m丘陵尾根 | 黒曜石削片 | 縄文 |
| 24 上打越遺跡 | 栗田町上打越 | 52m丘陵斜面 | ナイフ・黒曜石削片 | 先・縄 |
| 25 八天下遺跡 | 栗田町八天下 | 55m丘陵上斜面 | ナイフ・石器・スクレーパー・土器片(弥生)・土器質土器 | 先・縄・弥 |
| 26 折山源遺跡 | 日の出町折山源 | 55m丘陵 | 黒曜石削片 | 縄文? |
| 27 上廣延遺跡 | 日の出町 | 85m丘陵 | | 縄文? |

註 先……先土器時代

縄……縄文時代

弥……弥生時代

古……古墳時代

ハラタラ古窯跡は、諫早市土師野尾町2119-1番地に所在し、現況は植林地である。八天岳(標高296.7m)から北東方へ延びる丘陵の裾部に立地しており、窯尻部で標高62.3mほどを測る。窯跡は黄白色を呈する地山を掘り下げて等高線に直交するように築造されている。胴木間と2~3室は造成によって既に消滅している。現在、3室が残存しており、窯尻部と第3室床面との比高は3.8m、残存長7.6mを測る。よって窯本体は約26.5°の勾配で登っていることとなる。これは現地表面にほぼ沿っており、往古も地表を僅かに掘り下げて築窯されていたことを窺せる。

中道古窯跡は諫早市土師野尾町1998-1番地に所在する。八天岳山麓に立地しており、ハラタラ古窯跡同様胴木間を含めて4~5室が消滅している。八天岳は標高100mあたりから、その傾斜を弛め裾野を形成している。その末端は標高50m位で、狹少な水田を形成する。中道古窯跡は、この水田面に入る僅かに高い様高より作られている。窯尻部の標高で約62mほどを測る。窯跡は等高線に直交するように構築され、地表面にほぼ沿っており、床面の勾配で約10°~15°を測る。

中道古窯跡の床面の勾配はハラタラ古窯跡に比較して約1/2をとり、また窯の構造についても大きな違いが指摘される。窯の形態差、床面勾配の違いは、立地に大きく影響を及ぼし、また窯構築の進歩をも窺わせている。

水系はハラタラ古窯跡北側と中道古窯跡東側に各々東大川及びその支流が地形を縫うように北走し、大村湾へと注いでいる。両水系とも水量は豊富で、両岸に狹少な水田面を形成させるにいたっている。

さて、土師野尾の地名については判然としていない。例えば『地名用語語源辞典』の「はじ」の項には「②古代において製陶に従事した部民・土師部、およびそれを率いた土師氏にちなむ地名」とある。またその解説には「②のハジ(土師)とはハニ(上、粘土)・シ(師)の転」としている。いずれにしても、製陶或いは製陶のための粘土の取れる地ということであろう。何時頃より土師野尾(ハジノオ)と呼称するようになったかは不明であるが、榮窯・魔窯後付けられた地名であろうと考えられる。

また、市内には高麗小路(コウラシユエジ)、唐人廟(トウジンビヨウ)などの地名・字名が残っていることも共に興味のあるところである。

III ハラタラ古窯跡の調査

1. 調査の経過

ハラタラ古窯跡の調査の経過を日誌を基にその概略を記す。

・7月30日

本日より発掘調査に着手。休憩用のテントを設営し、器材の搬入を行う。その後調査地及びテント周辺の除草を行う。

・7月31日～8月1日

現状での遺跡写真撮影を行う。その後トレンチを等高線に平行して上・下2本設定し、窯の規模、物原の有無を調査する。上段のトレンチによって標高62.5mの位置までは窯が延びていないうことが判明する。また下段のトレンチより焼土塊、窯檻片、陶器片が僅かに出土し、窯本体部に当っていることが分かる。8月1日から県立美術博物館の下川氏が調査に参加される。

・8月2日～8月3日

下段のトレンチにより、ほぼ窯本体部分が捉えられたため、上・下位の調査に移る。この結果、窯室は僅か3室しか残存していないこと、またその遺存度も極めて低いことが判る。また床面の勾配が急であり、そのため窯壁の残存も殆んど認められない。この残存率の低さは、後世の営力も十分に考えられる。物原及び排水溝の確認を行うが、物原存在せず。窯の内部から陶器片が僅かに検出されるのみで、遺物量も極めて少ない。最下室の床面上に瓦や陶器片を含む一段高い部分が認められる。この部分は窯崩壊時のものと思われ、掘るとザクザクとした感じである。これを取り除くと容易に床面は確認されたが、砂床という感じには程遠い。

・8月4日～8月6日

窯本体及び周辺部の清掃を行い、写真撮影を実施。実測用の割り付けを行い、平面図の作製に取り掛かる。6日に古高取焼の古窯跡を調査された福岡県文化課の副島邦弘氏来訪。種々のご指導を頂く。

・8月12日～9月5日

事務事業の都合により作業を中止する。この間、8月21日、台風10号の影響により国指定の天然記念物「女夫木の大スギ」(諫早市小川町所在)の第一枝が枝折れする。その前後より、風雨が一段と激しさを増したため、ハラタラ・中道両古窯跡のテント張りを再度行う。この不測の事態により、その事後処理のため中止を延長せざるを得なくなる。

・9月17日

窯尻部の補足調査を行い、断面図及び見通し図を作製する。

・9月29日

島根大学理学部の伊藤晴明教授、時枝克安助教授、残留磁気測定のサンプル採取のため来諭される。雨の中での試料採取を夜の7時頃まで実施される。

・10月8日～10月13日

地形測量を行うが、レベル差があることと、雑木繁茂によりなかなか進捗せず。

・10月17日

埋め戻しを行う。急傾斜であるため、2～4段の土のうを6列ほど積んで終了する。本日をもってハラタラ古窯跡の調査を終了する。



第3図 ハラタラ古窯跡地形図 (1/300)

2. 遺構（別図第1、第3図、図版1～4）

検出された遺構は窯本体のみで、物原、柱穴等は確認されなかった。

窯体は煙出しと焼成室3室がある。胴木間から数室にかけて、造成によって既に存在しないため、窯尻方から室番号を付している。窯体は胴木間方を北側に、煙出しを南側に向けており、主軸はN-27°-Eである。現存長7.6m、比高3.8mを測り、約26.5°前後の勾配で築造されている。このように窯が急傾斜地に築かれているため、その保存度が極めて悪く、その形態等を僅かに看取し得たにすぎなかった。

しかし、窯の形態は従来の管見に明らかにされたものとは異なり、新知見を与えるものであった。床面はその斜度を変化させながら漸次高さを増し、更に急角度或いは段を付けて奥壁とし、次の焼成室へ繋がることを示し、また焼成室前面には明確な温座の巣が存在しない。これは従来呼称された階段状連房式とは大いに異なるところである。半地下式の割竹型登窯と称すべき形態を示している。

(1) 第3室

本窯跡最下位に位置するもので、奥行210cm、幅80～130cmを測り、窯室自体が僅かに「ノ」の字状に曲がっている。

床面は3ヶ所でその傾斜を変化させており、最上位の急傾斜で立ち上がる部分が次室とを繋ぐ奥壁である。しかし、側壁のような熱で溶解した窯壁は存在していない。これは急傾斜で登つていることにより、後世何らかの營力で避離したと考えられる。ただ、奥壁部分であるということは被熱によって地山の土が固化していることによって窯われた。

窯室内には、崩壊土がブロックで残っていた。この層はガラガラとした瓦礫の層で、地山の小土塊が固化したもの（径5mm程度）と瓦の小片及び窯壁の小塊が混在しており、窯廃絶期の所産である。このブロックを取り除くと、明確な床面が検出された。この床面に続くべき火床及び火床境の検出はなされなかった。床面は約30°の勾配で登り、左側に傾いている。窯壁は両側壁に僅かに存在するのみで、その多くは崩落・遊離してしまっていた。

(2) 第2室

奥行240cm、幅100cm前後とみられるが、窯壁及び焼成面が把握できなかった。確認し得たのは、第1室に繋がる奥壁部の上位のみであった。この奥壁にひっかかるようにして陶器（第4図3）が出土した。また崩壊土中より陶器片等の出土が見られた。

(3) 第1室

奥行約180cm、幅90～100cmを測る。床面の形状は煙出しに向って漸次登っていくのではなく、火床境から約100cmの所でゆるい段を有し、更に30cmの所で段を持つという具合に、段をつけながら床面を少しずつ上げている。床面は川砂を敷いた形跡は全く無く、築窯時の掘り下げた地山面をそのまま床面として利用している。

火床は奥行25cm、幅100cmを測る。焼成室床面との比高は10cmほどである。焚口は右側に位置しており、粘土塊（窯道具と推される）を利用して一段高く作っている。また火床境には窯壁片の利用が認められ、この部位は後補されたのであろうと思われる。焚口右側は検査樹の際破損しており不分明である。

側壁部の残存は僅かで、右側壁で約20cm、左側壁で約100cm程度であった。窯壁は地山面に粘土を塗り込めて構築しており、斜位の塗りバケの様子が看取された。室内からは瓦、擂鉢などが僅かに出土した。

(4) 煙出し

第1室より約15cmほど上って連続する。窯尻との比高約15cmを測る。奥行105cm、最大幅100cmで、左・右2本の煙出孔を持つ構造である。右側の煙出孔は幅20～25cm、左側の煙出孔が30～35cm程度である。孔の断面は現状で半円形を呈しており、左側の孔底が右側の孔より約5cm下がっている。右側の煙出孔の直右には、小振りの長方形の石材を横位に据えて壁としている。元来は数個を4列ほど並べて煙道を形成したものであろうと推定される。煙出孔中央部の高まりは煙出しの天井部を支えるもので、赤変している。奥行95cm、幅40cmほどを測る。

この煙出しから第1室にかけての周縁は約30cmほどの幅で赤変しており、高温での焼成を如実に物語っている。この部位からの遺物の出土は瓦片が数片出土したに過ぎない。

3. 出土遺物（第4～9図、図版5・6）

・壺（1・2・4～6・10・11）

1は復元胴径183mmほどの胴部片である。胴上位に2本のヘラ描き沈線を有す。体部は薄く水挽きされており、胎土は緻密で精良である。焼成は良好である。肩部には焼成時の火ぶくれが認められ、器表は剥落している。灰釉を掛けており、酸化炎焼成により淡黒色に発色している。2は肩部から口縁部にかけての資料である。若干焼け歪みが認められる。口縁部は外方に突出させ、端面に段を有す。頸部には3本のヘラ描き沈線と、上位に僅かに段を付けるようにヘラで調整している。また肩部には貼付の把手が付いていたもので、その剥落痕が認められる。元来3～4個貼付されたものであろう。口唇部には重ね焼き、或いは伏せて焼いたと見られる痕跡が認められる。胎土は緻密で精良。焼成は良好である。色調は黄白～茶色を呈している。4は復元口径170mm、器高116mm、底径105mmを測る小形の広口壺である。葵苞底の底部からほぼ均

一の器壁を保ちながら内溝気味に胴部を作出し、頸部で垂直に近く立ち上がらせて外側に折り返して口縁部を作っている。口唇上面には浅い沈線が入る。また肩部にも浅い1本のヘラ描き沈線を入れている。胴部には左上がりの叩き痕かと思われる形跡がある。しかし内面には当て板の痕跡は認められない。この資料は全体的に火ぶくれが認められる。釉薬は灰釉が内・外面に掛けられ、内面灰白～淡黒色、外面淡黒色を呈している。また内外面に灰被りがあり、風化が進んでいる。胎土は灰白色を呈する緻密で精良な粘土を使用しており、焼成も良好である。しかし焼成時に破損しており、断面に自然釉が截っている。5は復元胴径320mmを測る。胴中位に2本のヘラ描き沈線を有つもので、胴径に比して器壁は薄い。胎土は灰色を呈する緻密で精良な粘土を使用しており、焼成も良好である。器表には鉄分の多い灰釉を施釉しており、淡緑～茶色に発色している。また内面には床面の土が固着している。6は復元胴径372mmを測る資料で、1条の貼付突帯を有している。この貼付突帯の上には指頭による割み目を3cm間隔で付けている。焼成時に破損したもので、灰釉の発色にムラがある。濃緑色を呈する所や、発色不良の所が見受けられ、不良部分は風化が著しい。10は肩部の破片と見られるものであるが、傾きが分からぬいため直立にしている。須恵器様の肌合いを有つ資料である。上位はヨコナデ、中・下位は左上がりの叩き痕のような形跡が認められる。しかし、叩き(?)の後、ナデ消しているためその多くは器表面に現われていない。内面の調整はナデと思われる。胎土は灰色を呈する緻密・精良な粘土を使用しており、堅密に焼き締められている。11も肩部資料と見做されるもので、1本のヘラ描き沈線を有つ。ほぼ全面に左上がりの10と同様の痕跡が見受けられる。この痕跡はナデ消され、かつヘラ描き沈線によって切られていることから成形時の叩き痕跡と考えられる。しかし、内面はロクロ目が残っており、当て板の痕跡をヨコナデして消去したものと思われる。胎土・色調・焼成は10と同様で、この破片に関する限り施釉されていない。

・水差（3）

底部から丸く急に立ち上がる胴部は厚く、口縁部に近づくに従い漸く仕上げ、端部は丸く作り出し内面に突出するクセをもつ。小破片であるため口径は不明。器高は90mm前後と思われ、高台の有無も不明。胎土は灰色を呈し、胎土は緻密で精良。焼成良好。灰釉を掛けていると見られるが発色していない。全体的に釉薬の風化が見受けられる。

・不明陶片（7・9）

7、9共に相似した色調、胎土、焼成を示している。7は口縁部片と思われるもので、復元口径318mmを測る。内溝気味に立ち上がり、口唇部は平坦におきめている。外面ヨコナデで、口唇部及び内面はナデ調整を施す。9は蓋状のものか、或いは鰐状のものかどのような形態を示すものか不明である。上面はナデ、端面はヨコナデ、下面には同心円状のナデ痕を残す。7と共に灰色を呈し、胎土は砂質っぽい。焼成は良好である。7と9は同一個体か、と思われる。無施釉である。

・灯明皿（8）

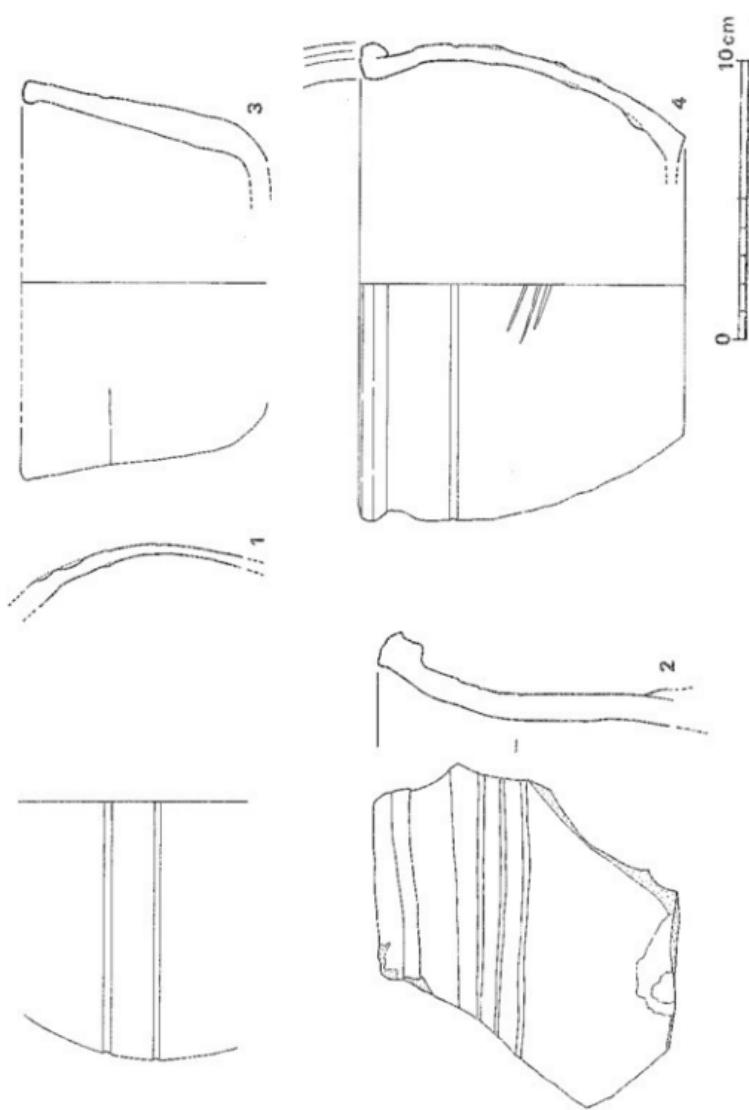
手捏ねによるもので口径70～74mm、底径66mm、器高14mmを測る。焼け歪みにより若干イビツになっている。油芯を受ける部分は舌状に粘土を貼付して作出する。灰被りが認められる。胎土は灰色で緻密・精良であり、鉄分が多く、外面に沁み出て茶色の光沢が見られる。焼成も良好であるが、温度が上がりすぎて1ヶ所亀裂が走っている。

・擂鉢（12～14）

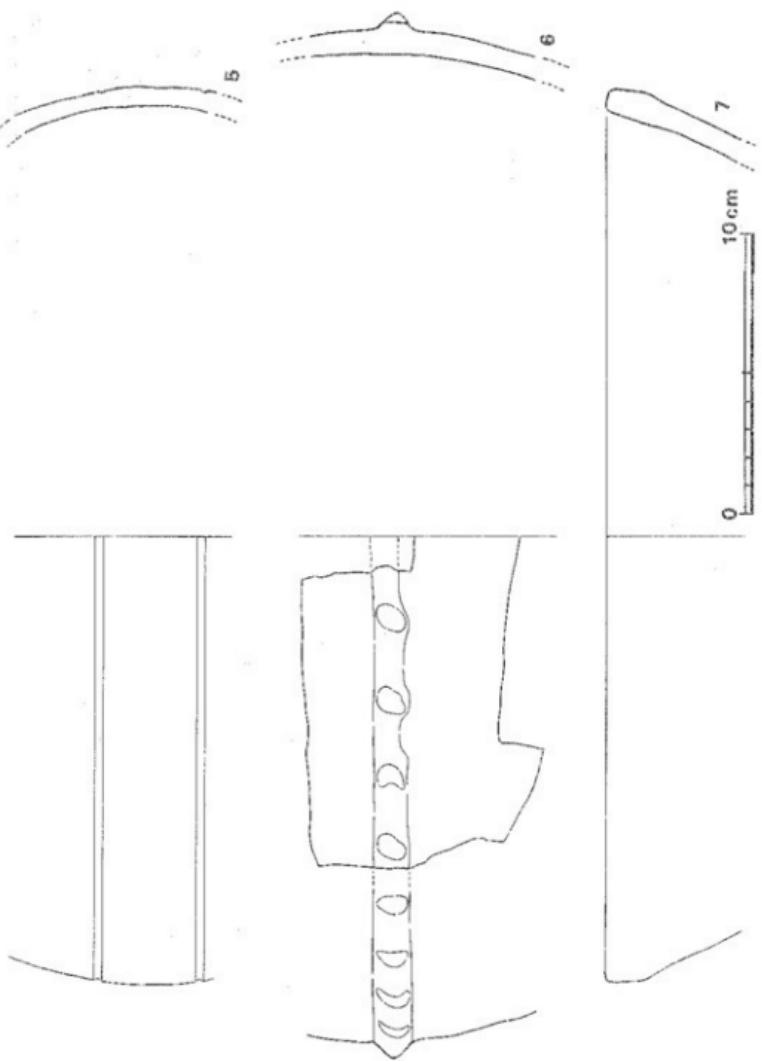
12は身の深い形態を示す。外面はクテの細い叩き又はハケを施し、のち上部はナデ消し、下半はヨコナデで消している。内面はヨコナデのち4条一単位のクシによって擂鉢目を立てている。胎土は灰色を呈し、精良である。焼成良好。内面に灰被りが看取される。13も12と相似した形態を示すが、外面は叩き又はハケによって鋸歯的な文様効果（？）を出している。下端部はナデ消しを施す。内面は12より浅い4条一単位の擂鉢目を立てている。14は復元口径300mm、器高151mm、底径162mmを測る。底部より直角に近く内湾しながら胴部が立ち上がり、T字状の口縁部を作出する。片口部は角張るように作出される。鉄分の多い胎土は緻密で精良であるが、いたる所に火ぶくれが認められる。内外面共にヨコナデ後、内面に4条一単位の擂鉢目を施す。施釉は内面擂鉢目上まで、外面体部上半までを浸し掛けしている。釉薬は灰釉を掛けしており、焼成時破損のため部位によって異なるが、黄緑～緑茶～黒と変色している。

・瓦（15～17）

すべて破片で出土し、約50点ほどを数える。その中で玉縁が付く丸瓦が主体で、平瓦は僅かである。破片の大きさは一定していないが、幅5～10cm前後で割れたものが多い。これらの破片は、その接合がなかなか難しく完形に復するものは一点もない。さて、これらの使用目的については、不明な点も多いが、窯場での二次的使用を考えた場合、窯壁と溶着した例があることや、床面から出土することを堪案すると、窯体の補修に使用したり、或いは製品を安定させかつ床面と離して焼造することを目的とした窯道具の両様の機能を持つ可能性が極めて高い。このことは、トチンやハマなどの窯道具が皆無或いは極めて少ないとこからも窺われるようだ。15は粘土板巻きつけによって成形し、凸面は格子叩きの後ナデ及びヘラナデを施し、凹面には布目が残る。側端部はケズリ後ナデで仕上げる。現存長140mm、玉縁長33mmを測る。胎土は精良であり、酸化炎によって赤変している。16は粘土板を巻きつけて成形し、凸面は格子叩きの後、ナデ調整を施す。凹面は布目が残り成形台から分割するための細い繩目が2ヶ所に残っている。側端部はケズリ後ナデ仕上げ。胎土は精良で、酸化炎のため赤変。現存長179mm、玉縁長36mmを測る。17は粘土板巻きつけによる成形と思われるもので、丸瓦先端部である。各々7～9cmの3つの破片が接合している。凸面は格子叩きを施すがナデ及びヘラナデにより殆んど消去されている。凹面は細かい布目圧痕が残り、細い繩目が認められる。側端部及び端面はケズリの後ナデ仕上げ。胎土は肌目細かく、酸化炎により赤変している。現存長257mm、柄部長48mmを測る。



第4図 ハラカラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第5図 ハラカラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)

・窯道具 (18)

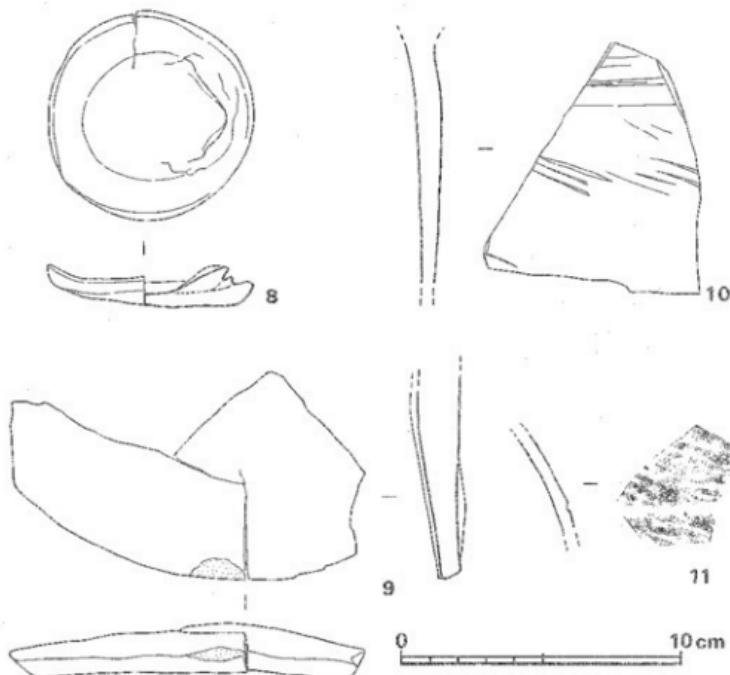
瓦と同様の胎土を使用して半円球状に作出したもので、上面は被熱により赤～茶色に変色し硬く締っている。また内部や下面は酸化して明橙色を呈す。ハマと同様の機能をもつものと考えられる。

・その他の表採資料 (19～21)

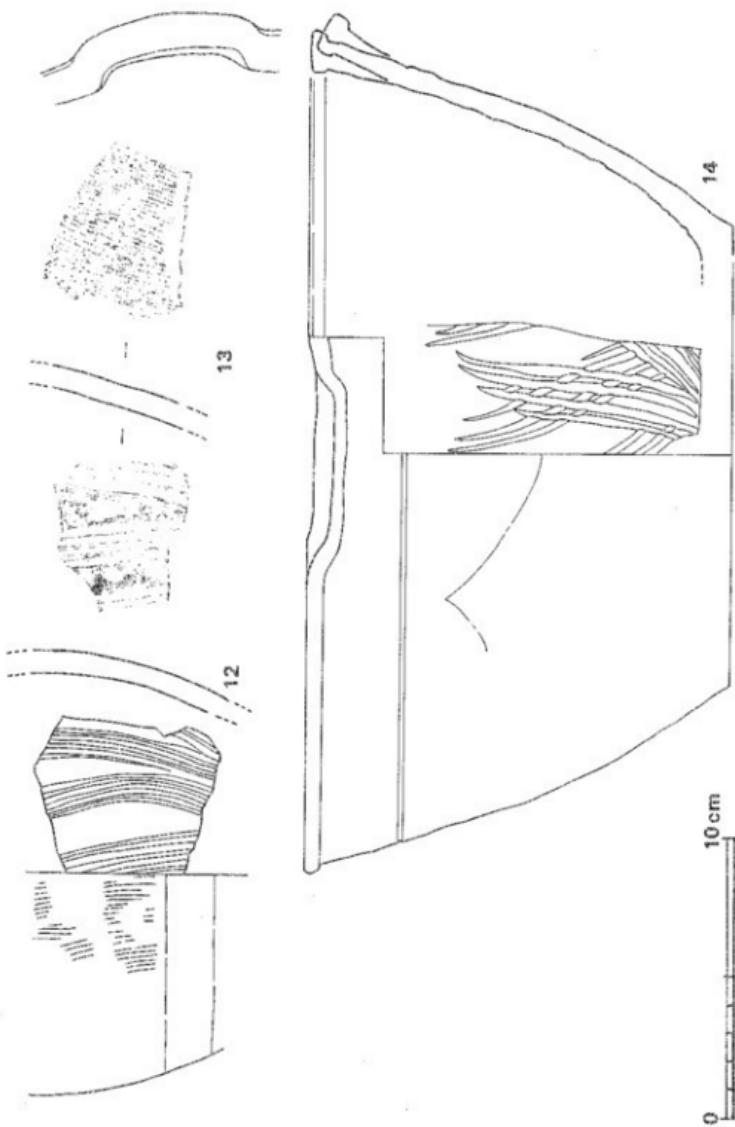
19は扁球形の小壺である。復元口径72mm、最大径116mm、器高80mm、底径74mmを測る。非常に薄作りで蓋筒底である。施釉は合わせ口部分と内面下半、外面底部付近から見込み部を除いて掛けしており、黒色に窯変している。現川焼か。

20は輪花形の染付皿である。見込みに二重の界線を引き竈唐草を描く。外面は繋ぎ唐草文。復元口径189mm、器高30.5mm、底径124mmを測る。18世紀の所産である。

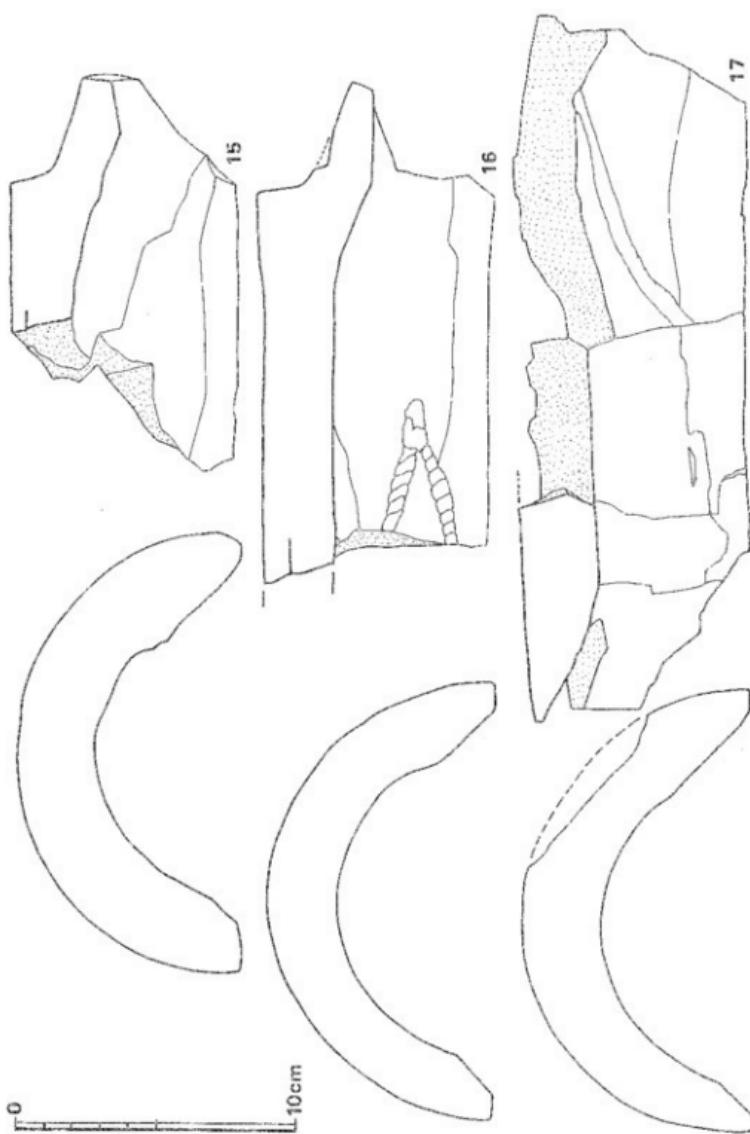
21は青磁で鉢形を呈す。黄緑色の釉薬が口唇部のみ剥き取り、掛けられている。胎上は少しザラつきのあるもので、焼成は良好である。体部はヘラによって穂がつくように削られている。復元口径344mmを測る。



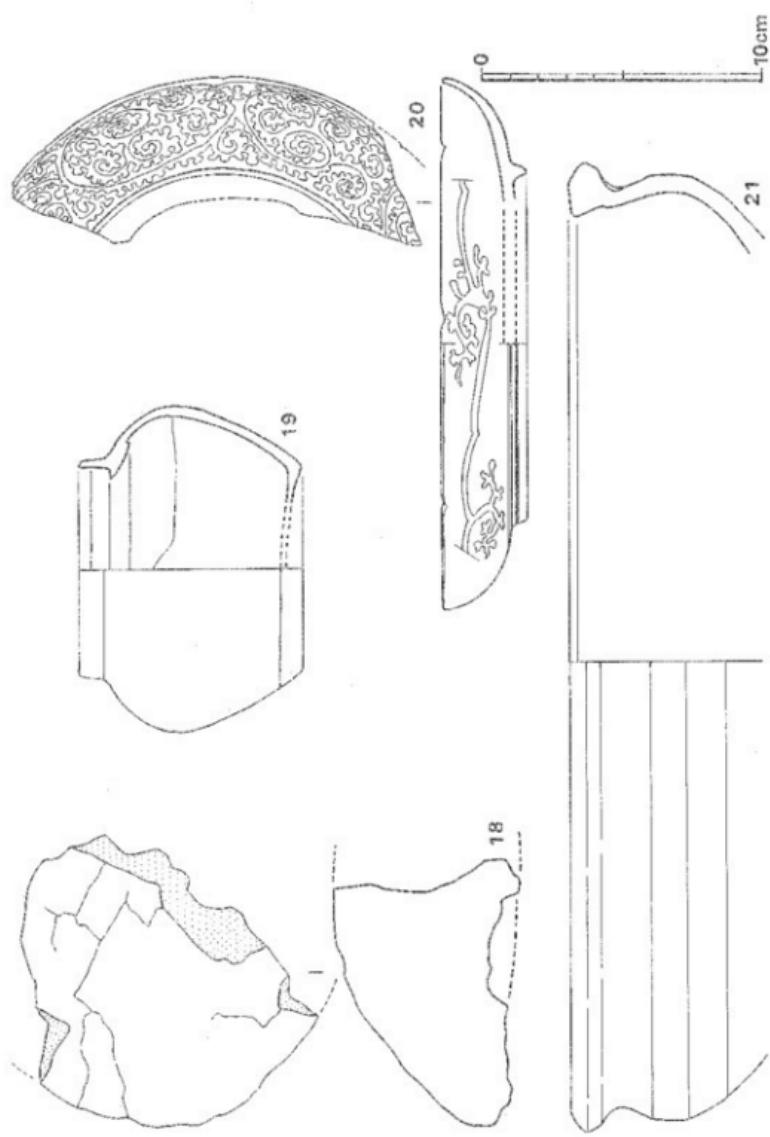
第6図 ハラクラ古窯跡出土物実測図 (1/2)



第7図 ハラカラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第8図 ハラクラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第9図 ハラタラ古窯跡出土遺物及び表掲資料実測図 (1/2)

4. 小 結

ハラタラ古窯跡で検出・確認された遺構及び遺物の詳細については、前節において述べたので、ここではその纏めを行いたい。

遺構は窯体自体が急傾斜地に構築されているためその残存率が極めて悪く、かつ物原等の付属造納に関しても残っていなかった。また同様に遺物の存在も僅少であった。

まず、遺構について

- 1 窯体が平均斜度26.5°の斜面に架かれている。
 - 2 窯体は縦長の窯室が連接するものである。
 - 3 窯室は湯座が明確でなく、また焼成室床面が傾斜角を変えて登っている。
 - 4 奥壁が明確な立ち上がりを有しない。
 - 5 烧成室床面は川砂等を敷設するのではなく、地山面をそのまま利用したと考えられる。
 - 6 築窯に際し、トンパイ等を利用せず、粘土を塗り込めて行っている。
- 等が挙げられる。また遺物に関して
- 7 日常器の中、皿・碗等通常多量に検出されるべき遺物の出土が見られない。これに対し壺類が多く焼造されている。
 - 8 遺物の中に火ぶくれした資料が多く認められる。
 - 9 窯道具と見られるものは第9図18の資料を除いて他になく、代用品として瓦類を使用したと考えられる。

以上が本窯跡について特記される点である。

さて、仮りに迷房式登窯を急傾斜地に築くと、奥壁が高くかつ天井も高くなる。奥壁が高くなると湯座の巢も高所に位置することとなり、炎の引きが強いため暖められた空気は窯室を回ることなく次室へ抜けると考えられる。つまり直炎式に近い状態となり、床面近くの器物の焼成が不良となる。これを解消するため奥壁を切り立たせることなく傾斜をつけて次室へ炎を送る必要があったのではないかと考えられる。このことが床面の傾斜角を変え、かつ奥壁を切り立たせない築窯の方法であったと推される。また、皿・碗類の出上りが見られないのは、床面が急傾斜を保っているため多量焼成の詰詰めが不可能であったことによると思われる。このことはトチン・ハマ・胎土目が積取されないことからも首肯されよう。

以上を要約すると、本窯は壺類の焼成窯として敢て急傾斜地に築窯され、火の回りを良くし、引きを強くするため床面及び奥壁に傾斜をもたせたものと考えられる。

なお、その他の表採資料(19~21)は廻窯後に窑場が屢々として開かれて近年までに及んだ折に使用されたものであり、窯の焼成品とは直接関係がない。

IV 中道古窯跡の調査

1. 調査の経過

中道古窯跡は、前章において述べたように、その発見年が昭和12年と古く、先年の道路開設の折や昭和32年の水害などに遺物の出土があり、よって広く周知され、盃・乱掘をかなりの程度蒙っていた。窯跡は主軸を南北にとっていることが僅かに看取される程度で、その規模は現状では判断し難かった。ただ、乱掘の跡が窯体の存在を示しているようであった。

以下、日誌を基に経過の概略を記す。

・8月6日～8月8日

雑木の一部伐採を行い、表土の剥除作業に入る。盃・乱掘の跡が小径の如くなってしまっており、窯室であろうことを想像させる。表土の剥除から瓦礫層の除去を行うに従って1室目の火床境が現われる。これにより大方の窯の規模が判明する。砂床は長さ2m、幅1.2m、火床30cm位で、長方形のプランを呈している。従来の知見からするとハラタラ古窯跡同様趣きを異にしている。焚口は右勝手となっており、閉塞石がそのまま残っている。

・8月9日～8月11日

本窯の脇に別の窯があつて二本並列していた、との伝えにより、西側に幅1mほどのトレンチを設定して調査するが当たらず。このトレンチに直行する南北の小トレンチを設定して、物原の確認を行う。このトレンチからは胎土目が多く出土する。又、物原と思われる部分から陶片や印刻文を持つ火舎片などが僅かに出土する。1～4室目の様相が大分明確になる。

・8月12日～9月5日

事務事業のため発掘調査を中断。

・9月6日～9月20日

1～4室及び壁道部の各種図面取りを行う。4室目に引っ掛かるようにして5室目の奥壁が現われる。3室目東側に側溝を確認するための小トレンチを設定。窯壁より約30cmほどに極浅の幅70cm程度の側溝を確認する。ハラタラ古窯跡よりレベル移動。

・9月21日～9月28日

窯体の清掃を行い、写真撮影をする。また地形測量を開始する。

・9月29日

鳥根大学の伊藤教授、時枝助教授、残留磁気測定の試料採取。

・10月17日

各窯室に土留めと崩壊防止の土のうを積んで埋め戻しを行う。

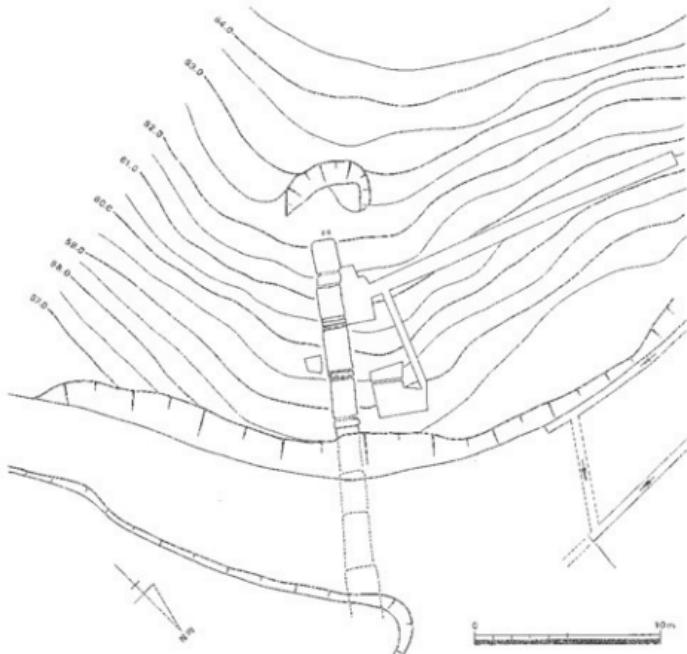
2. 遺構（別図第2、第10、第12図、図版7～15）

遺構は植林地内に立地しているが、植林が窯体を避けるようにしてあったことは誠に幸いであった。また、遺構内に入っていても根張りによる擾乱が極めて少なかったことは遺構の保存上好ましい結果となった。

検出された遺構は、半地下式割竹型階段状連房式登窯で焼成室5室、煙道部、落ち込み、側溝、物原であり、各室の前面右側には薪を入れる焚口がある。焼成室は胴木間が破損しており不明なため、窯尻から順次窯室の番号を付している。

焼成室及び煙道部の現存長は主軸線上で11.4m、比高4.1mで、傾斜角20°を測る。また落ち込み部まで含めると14.3m、比高5.1mとなる。

窯体は、第5室の大半及び胴木間迄の教室が破壊されている。第5室の奥壁付近の標高が約58m、煙道部で62m、落ち込み部で63mを測り、等高線に直交し、なだらかな地形に沿うよう構築されている。窯体の主軸はN-37°Eである。



第10図 中遺古窯跡地形図 (1/300)

以下、各遺構ごとに説明を加える。

(1) 第5室

道路開設の折、窯室の大半は削られている。従来は、他室同様長方形プランを示していたと思われる。残存部分もその多くは地山が露出しており、壁面は僅かに看取されるにすぎない。奥壁右側に裏込めの石が確認され、また右側壁部にも同様の石が確認されている。横出されたのは奥壁部、側壁部と砂床の一部分である。残存部は砂床で長さ13~35cm、右側壁高8cm、奥壁部で高さ25~29cmほどである。

(2) 第4室

長方形プランを示し、長さ、幅共に一定しており、窯室長246cm、幅123cmほどである。火床部分は破壊され、温座の巣も残存していない。焚口部分は未掘であるが、閉塞石の残存が認められる。また火床境は基底の部分が僅かに看取され、中央部分は残存していない。砂床は14°の勾配で登っており、床面は平らである。砂は赤変している。側壁は半分強残っており、塗りバケが看取される位しか溶けていない。また立ち上がりは内側にやや倒れ込むように延びて天井部を形成するものであろう。奥壁の残存は良好である。

(3) 第3室

窯室長217cmとこの窯の中で一番大きな室であり、最良の残り具合を見せていている。温座の残りもよく、火床部分より高く構築し、幅13cm前後を測る。また、トンパイをタテに4個使って5か所の通焰孔をしている。中、最右のものは半割されて第4室に倒れ掛けている。通焰口の部分は良く焼けている。通焰孔の幅は左から21, 11, 14, 12, 27cmと側壁寄りが広くなっている。火力の調整の工夫が見られる。火床部分は砂床より約17cm程下がっており、周縁は良く被熱している。この火床部分に閉塞石と思われる石材や、トンパイ片が何個か集積していた。また火床境に碗が溶着しているのが見られた。砂床の残りは良好で約13°の勾配で登り、床面は平らである。砂床の砂は細かく、赤変している。側壁は20cmほど残り、右側は急な角度で天井部を形成するらしい。また焚口上方の残りが良く（後に破損）第4室奥との関係で勘定すれば約50~60cm位の焚口の穴が火床右側に存在していたと思われる。奥壁も中央部とほぼ変わらない数値を示し、壁面には塗りバケが横位に明確に見て取れる。

(4) 第2室

窯室長238cmを測り、室幅も一定している。温座の巣は最右のトンパイを残し、他の3個は欠失している。よって4か所の通焰孔が存在している。この温座は火床底より4~9cmほど高く作られている。幅は14~20cmほどである。通焰孔の幅は左から19, 13, 12, 13, 19+αcmと両側が広くなる。火床は長さ25cm前後、幅130cmほどを測り、右勝手となっている。下面及び周辺の粘土は被熱により、よく焼けている。この焚口上方には20cmほどの自然石の角材を横に据えて使用しており、この短面が側壁となっている。この石材と第3室目の奥壁を勘案すれば約50~60cmの焚口の穴があったと考えられる。火床境は部分的に破損しているものの全体としては保存良好である。

ある。砂床は約11°の勾配で登り、床面は上下差なく均一である。砂は細かく均一なものを使用しており、熱変で赤くなっている。側壁は粘土を塗り付け、ハケでヨコ方向に調整している。約20cmほどが残っており上部は崩壊している。奥壁は右半分から床面近くまで破壊されているが、ほぼ垂直に近く立ち上がって行く様子は観察される。

(5) 第1室

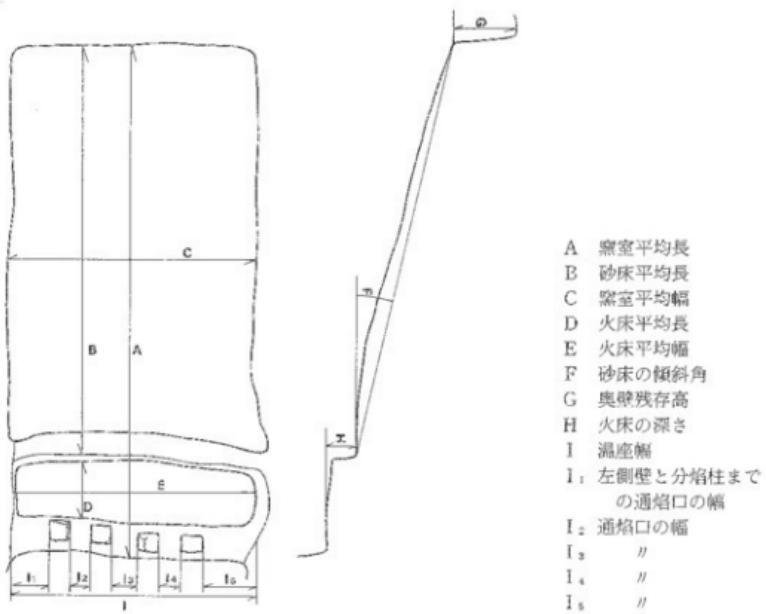
窯室長235cmと最短である。温座から火床境及び右側壁にかけて乱盜、植林によって攢乱されている。温座は全壊に近い状況であったが、幸いにも最左のトンパイの痕跡が僅かに残っていた。これによれば、通焰孔は22cmを測り、他室同様やや広い傾向を見せている。火床境は中央部が欠失し、左右に分かれ残っている。右の切端面を見ると側壁と同様の粘土を塗り付けており、この部分はよく被熟してセメントのように固化している。砂床も攢乱をかなりの程度受けているが他室同様、上下差なく均一にならしてある。勾配は8.5°と最も緩やかである。側壁は右側が根の砕力によって内側へ押し出されている。奥壁は裏込めに石材を横位に使用しており、その表面に粘土を塗り付けて窯壁面としている。この横に据えた石材の上にトンパイをタテに立てて煙出しの通焰孔としている。奥壁の残存高45cmを測る。

(6) 煙出し

煙出しは第1室より立ち上がった奥壁が高さ約45cmの所から水平位になり狭小な室をなす。奥行き約50cm、幅62cmを測るが、復元すれば110cm前後となろう。この室の手前には現在1本のトンパイが僅かに残り、他の1本は抜かれている。左側が破壊されているが、本来はもう1本立っていたと推され、4か所の通焰孔が存在したと思われる。この通焰孔の下面及び後方の床面はドロドロに溶けており、火力の強さを物語っている。後方には1か所の石組みと、石材が2本立っている。石組みの部分は最下の石に側壁が覆うように載っており、竈尻はこの石材を包み込むように構築されたものと考えられる。その左側の2本の石材も原位置で残っていたもので竈尻を支え、かつ分焰する機能を果たしていたものと考えられる。この石組み及び2個の石材の中半位まで、つまり第1室奥壁から測ると約50cm位まで被熟で粘土が溶けて固化した範囲である。床面の勾配は最も急で18°を測る。その後方70cm位の所まで石材が散乱し、被熟で赤変した部分が認められた。

(7) 落ち込み

1室目奥壁から約3.2m程離れてC字状の地山を掘り込んだ部分がある。幅5m強と大きい。比高は1m前後あり、右手つまり西側には凹みを持っている。レベルでは西側の凹みの底が煙出しより下位にあり、また上端も若干下がる位置にある。東側は全体的に西側よりレベルが高くなっている。この状況から考えると雨水を溜め、西側へ流し出す機能を有していたようである。このことは、煙出し後方が全体的に盛り上がっている点からも考えられる。



第11図 各室計測図

第2表 各室計測表 (単位: cm, m²)

| | A | B | C | D | E | F | G | H | I | | | | 砂 床 面 積 |
|-----|------|------|-----|------|-------|------|-----|-----|----------------|----------------|----------------|----------------|------------------|
| | | | | | | | | | I ₁ | I ₂ | I ₃ | I ₄ | |
| 第5室 | 34+α | 34+α | 112 | | | | 25 | | | | | | |
| 第4室 | 246 | 204 | 123 | 46 | 123+α | 14° | 29 | | | | | | 2.509 |
| 第3室 | 271 | 211 | 133 | 32 | 130 | 13° | 28 | 17 | 130 | 21 | 11 | 14 | 12 27 2.806 |
| 第2室 | 238 | 184 | 122 | 25 | 130 | 11° | 22 | 13 | 117+α | 19 | 13 | 12 | 13 19+α 2.245 |
| 第1室 | 235 | 163 | 125 | 34+α | 112+α | 8.5° | 45 | 7+α | 131+α | 22 | | | 2.037 |
| 煙出し | 59 | | | 62+α | | | 18° | | 85+α | | 20 | 18 | |
| | | | | | | | | | 57+α | | 13 | 15 | |

(8) 側溝

第3室東側に設定した小トレンチによって確認した。溝の西端は主軸より約90cm、東側壁より約25cm東にある。幅73cm、深さ10cm弱の浅い溝である。溝底は砂床面より約15cm上位にある。黄茶色の地山の土を掘っており、覆土は焼土小塊を混じえる淡茶色土である。

(9) 物原 (第12図)

第4室西側に設定したトレンチにより確認した。第12図は土層断面図である。地山が掘られその上に僅かに載っている程度である。3・4層共に焼土塊を含む程度であり、また遺物の量も多くない。小片化したものの中、完形に近い皿が重なって出土した。

第1室から第4室の東側から胎生目や陶器の小片の出土が見られたが、物原と呼ぶ土層の堆積も見られない。このような事から推すると、第3室東側以北にかけて物原が形成されたものと考えられる。以下、土層の説明を記す。

1層 表土

2層 黄茶色土で地山の再堆積土である。

3層 焼土混りの茶色土

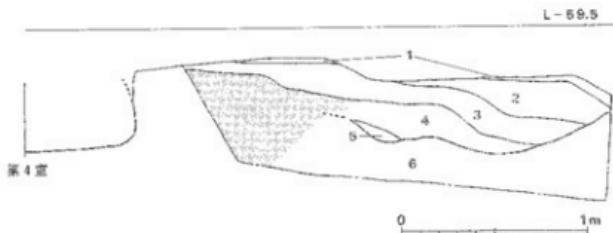
4層 焼土塊を僅かに含む黄色土で、下位の層が人為的な營力で再堆積したものと思われる。

この下面が往時の地表面と考えられる。

5層 焼土を僅かに含む暗黄茶色土

6層 黄茶色を呈する地山の層で、粘性に富んでいる。

また、アミ目の部分は焼成による間接的な熱変のためか、非常に硬く締っている。



第12図 物原土層断面図 (1/30)

3. 出土遺物 (第13~21図、図版16~18)

本窯跡出土の遺物は量的には少なく、62点を図示した。器種は、皿、碗、片口、擂鉢、火舟、不明陶器、窯道具などがある。壺、徳利などは検出されていないが、本来はセットをなすものと思われる。

・皿 (1~24)

皿として分類したものは、その大きさにより小形品(I)、中形品(II)、大形品(III)に区別することができ、更に体部の作りや、口縁部の形状によって次のように分類可能である。

a ……体部に段を有していて明確に口縁部と区別されるもの。口縁部は内湾気味に外反させている。(1~4)

b ……体部の段が無くなり、内湾気味に延びた体部に外反する口縁部が付くもの。(5~13)

c ……やや身が深くなり、口縁部を内湾気味に外反させて内面に稜を有たせるようにしたものの。縁なぶりの皿もこの類に一応含めておく。(14~17)

d ……c と形状が似通っているが、口縁部の外反が見られないもの。(18)

e ……体部に内湾する口縁部が付くもの。(19)

f ……体部にほぼ直角に近く立ち上がる口縁部が付くもの。(20)

g ……溝縁を有するもの。(22)

h ……内面に段を有し、上方から外反して平縁をなすもの。(24)

以上、a~h まで分類したが、本窯跡では物原による分層発掘が不可能であった。しかも、窯壁の焼け具合から長い操業とは考え難いことにより、セットをなすものと考えておきたい。

I-a (1~4)

1は素焼きのもので、水挽き痕が明確に残る。体部から反転してつまみ上げた口唇をもつ口縁部となるが、壺にはヘラによって明確な段がつけられている。ヘラによる削り出し高台で、高台内に兜巾が認められる。内面に胎土目跡4か所あり。2もほぼ相似た作りで、口唇部を僅かにつまみ上げるようにしている。内面に胎土目が残り重ね焼きの状況を示している。三日月高台である。3は器壁やや厚く、ヘラによって2段をつけている。4もやや厚いもので高台部を欠損している。

I-b (5~13)

5~7は器壁がやや厚く、口唇部を丸くおさめる傾向にある。11~13は非常に薄く引き上げられている。口縁部がやや上位に移るという特徴をもつ。

I-c (14~17)

底部を除くと、薄くやや深く挽き上げられた一群である。口縁部は上位に位置し、外面を丸くしている。16は指頭により縁なぶりを作出している。3~4か所つくのか。17は削り出し高台であるが、高台内のケズリが薄く、一見基窓底のような観を呈している。

I-d (18)

18は口唇部の下で薄くなっている。底部を欠損。

I-e (19)

19は平縁形態を示しており、釉薬も厚く掛っている。

I-f (20)

立縁の皿で口縁内面にかすかな稜をもっている。底部は欠損。

II (21・23)

21は中形の皿であるが、口造りの形状は不明である。また、23も中形の皿であり、胎土目を用いて重ね焼きをしている。共に口縁部の形状は不明である。

II-g (22)

中形の皿で、底部から挽き上げられた体部に鋭く外反する口縁部が付いて溝縁をなしている。端部はつまみ上げるようにして口唇は面をなす。底部は欠損。

III-h (24)

大形品で焼け歪みが大きい。底部はヘラによる削り出しで実に鋭く仕上げている。体部の途中でヘラによって段を設け見込みとするが、その上方から外反して口縁部をなしている。

・碗

碗は全容を呈するものが極めて少なく、資料的に貧弱である。口縁部の作りは、天目形をなすもの(I)、単純に丸くおさめるもの(III)，その中间の形態を示すもので口唇からやや下方で外側に張り出して稜がつくもの(II)がある。高台は有高台と無高台があり、有高台には竹節形、撥形がある。釉薬は灰釉を掛けおり、緑色～緑茶色に発色している。

I類 (25・26・33)

25は直線的に立ち上がる形態を示し、口萼下1cmの所で稜をなして垂直に立ち上がり尖り気味におさめる。復元口径150mmと大振りのものである。内外面に細かい石ハゼが看取される。

26は、非常に薄く挽き上げられており稜の上位は25と同様のおさめ方をしている。33は大きく焼け歪んでいるが、口縁の作りが26と同様でありこの類に含めた。ロクロ目が明瞭である。高台は撥形をなし高く強く踏ん張っている。直置とみられ、高台部に砂床の砂が付着している。釉薬は淡緑色に発色している。

II類 (27～29・32)

27は復元口径106mmの小碗というべきもので、ロクロ目が明瞭であり、外面に凹凸が顯著に認められる。28も作行きは27と相似ている。釉薬は茶色から僅かに黒茶色を示し、所々に緑茶色が斑状に入る。削り出し高台で竹節状をなし、高台内に低い兜巾を認める。疊付にモミ殻付着。底部には砂床の砂が付着。また内面には黒壁片が付着している。29は高温のため焼け歪みが大きい。よって口径、器高は不明である。底部はヘラによって鋭く削られ、高台内の抉りも深い。疊付に糸切り痕がかすかに残る。釉調は28に似る。32もほぼ相似した特徴を有し、釉薬は黄緑色

に鮮やかに発色している。細かい貫入を認める。

III類 (30・31・34)

30は猪口とも言うべきもので、口径88mmを測る。底部は糸切りで無高台はこの1点のみである。体部は中位で屈曲しており、尖がり気味におさめる。クロ目が明瞭で、凹みに釉が溜り縁～緑茶に発色している。31は内湾気味に立ち上がって丸くおさめている。34は若干焼け歪んでいる。全体的に厚く挽き上げている。口径に対しやや高台径が大きい。もう少し外方に傾くものと思われる。削り出し高台で竹節状をなす。

・高台 (35~40)

35~38は竹節状に削り出されており、35・36は強く踏ん張っている。36は高台内が三日月形に削り込まれる。40も僅かに竹節状をなすもので、厚くて大きい。高台内は深く抉り込まれており、29を一回り大きくしたものである。

・片口 (41~44)

43は注口部分で手捏ねによって作出。41・42・44は口縁部から胸部にかけての資料で各々異なる形態を示している。41は器壁が分厚く、如意形の口縁をなす。42は薄く挽き上げた体部に少しづつ折り込んだ口縁を付しておらず、中空となっている。44は釉薬を生掛けした資料と見られるが、全く発色していないため不明である。口縁下5cmの所で最大径193mmを測り、内傾して外反する口縁をなす。いずれも水挽きで、胴下半から底部を欠損しているため高台の有無は判らない。44は壺か。

・紅皿 (45)

手捏ねで、8稜をなす。稜部は指頭で軽くつまんでいる。径約45mm、器高13mmを測る小形のものである。鉄分の多い胎土を使い、全体に浸み出て茶色を呈す。灰釉を掛けたと思われるが釉が飛び散って斑になっている。

・擂鉢 (46~48)

各々口縁部の作りに差異が認められる。46は復元口径230mmを測るもので、口縁下に段を有している。擂鉢目は8条一単位のクシで粗につける。片口部不明。47は復元口径246mmを測り体部下半は欠損。体部から直線的に立ち上がる口縁部を有し、一方に片口を付ける。7条一単位の荒い擂鉢目を全体につけている。48は片口部を欠失している。皿I-a類と相似た形状の口縁部を作っている。8条一単位のクシによって擂鉢目を粗につける。底部は基筒底となる。内面底部付近に重ね焼きの痕跡が残っている。

・火舎 (50~52)

瓦質で、50は復元口径272mmを測る。底部を欠失しており脚が付くものか不明。体部は内湾気味に延びて口縁部を内側に折り込む。口縁下2cmに断面カマボコ形の貼付突帯を一条巡し、上位に菊花と蝶様のスタンプを押す。外面僅かに叩き痕かミガキ痕が認められ、同様の痕跡は内側にも残る。のちササラ状のものでナデて両面とも消去する。酸化炎で一部赤変した個所も見

受けられる。また焼成時破損しており、断面に釉が載っている。51は50・52に相似た破片で底面と思われる部分に木の葉の痕跡を残す。52は脚部の資料であるが50とは接合しない。脚部外面、内面、底部内面はササラ状工具によるナデ仕上げ、底面はハケ調整。脚端部に条線が認められ焼成時の圧痕である。この耳様の脚が3～4個付いて脚台をなすものである。脚台の復元径は208mmを測る。また脚の高さは38mmを測る。

・壺 (57)

復元口径320mmを測る大形品である。器壁は分厚く口縁部は単純に外反している。同類の破片が十数片存在するが接合しない。無施釉の焼締陶器で自然釉が掛っている。焼成時に破損しており、断面に自然釉が載っている。また体部上半に叩きは認められず、不規則なナデが残っている。

・器種不明なもの (49・54・56)

共に生焼けでもろい。49は復元口径304mmと大形である。直立気味の胸部に内面稜をなして外傾する口縁部が付く。内面にはハケ状工具による横位の条線が付けられている。56も49と相似た形態をなすが条線の無いのが異なる。復元口径382mmを測る。54は円筒形の台状をなすもので器壁厚く無施釉。底径134mmを測る。

・窯道具 (53・55・58～63)

53は内湾気味に外反する搗鉢と思われる口縁部片である。内外面にはクシ様のもので調整している。内面にはモミ殻が円形に付着（アミ部分）している。また54も瓦片かと思われるもので、凹面と凸面を有している。厚さは10mm強と薄い。左側面と前面及び凹・凸面はナデ調整。この凹面にもモミ殻の付着（アミ部分）が看取されている。両資料共、ハマと同様の機能を有していたものと考えられる。58は長さ286mm、幅80～95mmを測る四角柱でトンパイである。正面はトンパイの上に粘土を塗り付け上下にハケで調整する。温床の分格柱に使用されたものである。59・60はトチンで円柱に上下に円盤を付けたような恰好をしている。59は手捏ねによっており柱状部に指の跡が残る。上面にはモミ殻の付着が認められる。60は下部を欠損しており、上盤径119mmと大形品である。全体的に高温のため亀裂が走る。また上面にはモミ殻が顯著に付着している。61・62はハマで、トチンと同粘土を使用して円盤状に作ったものである。上面にはモミ殻の付着が多く認められ、62の上面には陶器の高台片が接着している。今回の調査では破片で5個体分位しか出土していない。63は胎土目である。大形のものは搗鉢等の重ね焼きに、小形のものは皿類の重ね焼きの際に使用するもので、ほぼ同巧である。約210個ほど出土している。

第3表 出土遺物一覧表

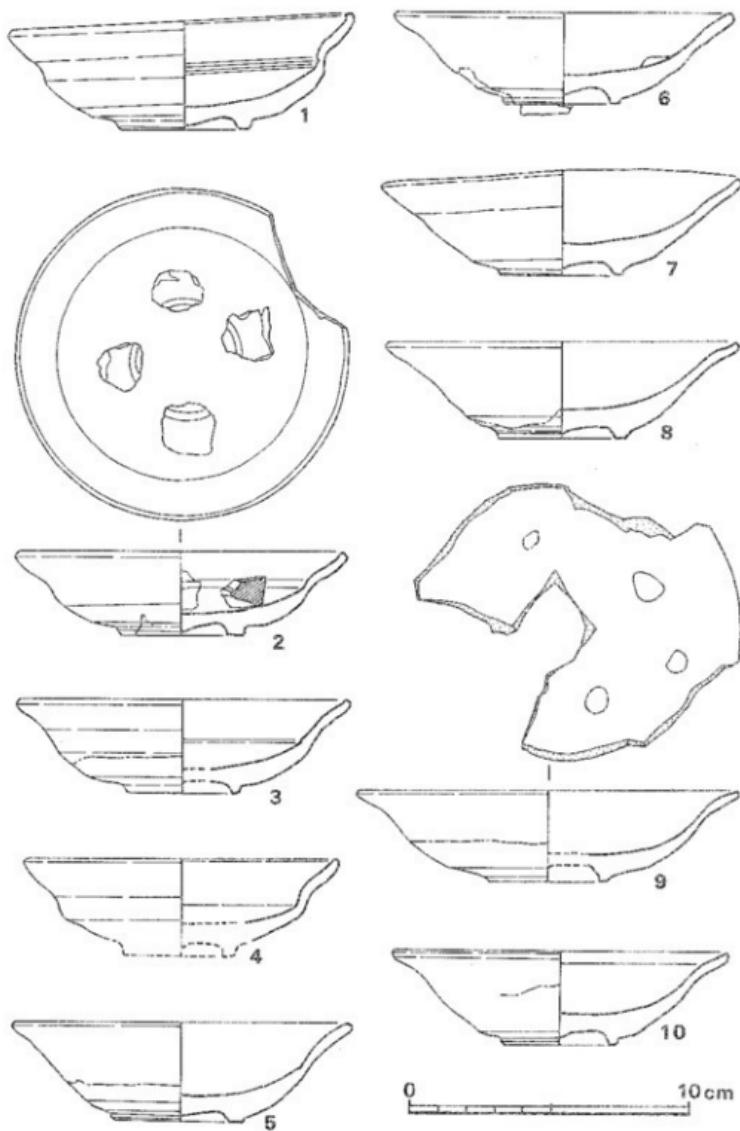
| 番号 | 部類・分類 | 法尺 (mm) | 口 径 高さ 底高さ | 特 徴 | 色調・釉面 | ロ クロ 回 転 方 向 | 焼 因 目 考 |
|----|-------|------------|---------------------|---|--------------------------------|-----------------------------|------------------|
| 1 | 皿 I-a | 124 | 39 | 割り出し高台で兜形あり。底部は2回のヘラケグリで高台作成。明瞭な段をもつて口縁部に移る。口唇はつまみ上げて、立縁模をなす。内面にかすかな日輪4ヶ所残り。 | 淡赤色を呈し強烈の青黒小火 | 反時計回り | 13-1 16 |
| 2 | 皿 I-b | 118 | 30 | 水滴き成型。直面部は2回のヘラケグリで高台作成。器台内に兜形あり。高台内の割りで三日月形を呈す。内面に4箇の施上跡を残す。蓋入は頗る。 | 全体的に均色不良、青白毫、灰釉 | 反時計回り | 13-2 16 |
| 3 | 皿 I-c | 118 | 34 | 水滴き成型。直面部は2回のヘラケグリで高台作成。器台内に兜形あり。内面によって段をつける。日輪1ヶ所残す。 | 全体的に均色不良、青白毫、灰釉 | 反時計回り | 13-3 |
| 4 | 皿 I-d | 112 | — | 水滴き成型で、器壁が厚い。底盤から直立する段をなして口縁部へと続く。体側的側に明顯な擦りを有している。胎壁一面源風化している。 | 淡青色 灰釉 | | 13-4 |
| 5 | 皿 I-b | 121 | 35 | 分厚い胎壁から段をなすまで口縁部へ移る。2回のヘラケグリで高台作成。高台内に兜形あり。日輪4ヶ所残す。 | 均色不良で青白色、灰釉 | 反時計回り | 13-5 16 |
| 6 | 皿 I-b | 121 | 35.5 | 全体的に分厚い胎壁を見させ2回のヘラケグリで高台を作成している。胎部外側に手触りによって段をなす。高台内には深く突起の兜形あり。内面に日輪2ヶ所あり、両面に施上跡を残す。 | 均色不良で青白色、灰釉 | 反時計回り | 13-6 16 |
| 7 | 皿 I-b | 120~128 | 38 | 水滴き成型で、1回のヘラケグリで高台作成。高台内は高く押り込み直口縁部。とどうと似通う。嘴は垂れ込みあり。胎壁は強烈である。内面は灰被りの状態。またの外見は垂れ込みである。日輪3ヶ所あり。 | 外面-強烈青色 内面-強烈青白毫、灰釉 | 反時計回り | 13-7 16 |
| 8 | 皿 I-b | 126 | 35 | 内溝窓様の体側に外反する口縁が付き、口唇はつまみ気味におきめる。2回のヘラケグリで高台を作成している。胎壁は凸凹際で説かれている。内面に日輪2ヶ所あり。 | 施上付近は青白色、他の部分は強烈青色、灰釉 | 反時計回り | 13-8 |
| 9 | 皿 I-b | 136 | 32.5 | 内溝窓形で盛る体側に、崩落までやや崩くなってしまったような口縁部が付く。2回のヘラケグリで高台作成。高台内の折りも深く。内面に施上跡4ヶ所がある。 | 淡青色を呈すが 部周部で不必要な 隙もある。灰釉 | 反時計回り | 13-9 16 |
| 10 | 皿 I-b | 120 | 33.5 | 内溝窓様の体側にはほぼ同じの厚さでくるく外反する1回頭6付く。1回頭部は僅かに内面に埋むようにしている。2回のヘラケグリで高台を作成し、高台内は強く突起り兜形がある。両面に2ヶ所残す。 | 釉が全くかけず 青白色を呈す。 灰釉 | 反時計回り | 13-10 |
| 11 | 皿 I-b | 120 | 37 | 底盤から内溝窓形に延びらる底部に、さほど外反しない1回頭6付く。1回のヘラケグリで高台を作成。高台内の折りも深く。内面に1回頭4ヶ所残す。 | 青色 灰釉 | 反時計回り | 14-11 |
| 12 | 皿 I-b | 116 | 33 | 内溝窓様の体側に、少し顎張びしたような感じの口縁部が付く。手振よく施上されたものである。1回のヘラケグリで底盤を作成し、高台内は強く突起り兜形を残す。 | 釉が全くかけず 青白色を呈す。 灰釉 | 反時計回り | 14-12 |
| 13 | 皿 I-b | 118 | 34 | 内溝窓様の体側に、ためらかにやや内側する口縁部が付く。高台内の折りは深く兜形がある。 | 釉が全くかけず 青白色を呈す。 灰釉 | 反時計回り | 14-13 |
| 14 | 皿 I-c | 120 | — | 身が薄くなるもので、体側から非常に薄く水滴して口唇部となる。口縁部は外側を内側させて、内溝窓様に外反させている。内面に強烈な折り。蓋入は頗る。 | 強烈に飛白。 灰釉 | 時計回り | 14-14 |
| 15 | 皿 I-c | 129 | 37 | やや溝窓様に外反する口縁部が付く。口縁はユビでより廣く投き、内面外側に強烈な折りを施している。1回のヘラケグリで高台を作成せず、内面に2回頭4ヶ所残す。 | 釉が全くかけず 青灰色を呈す。 灰釉 | 反時計回り | 14-15 |
| 16 | 皿 I-c | 122 | — | 内溝する体側にやや深い溝窓の口縁部が付く。口縁部の量は六六で内面に強烈を残す。この口縁を指して3回内溝へ引込込んで豊かなぶりを認める。 | 強烈-青色 灰釉 | | 14-16 |
| 17 | 皿 I-c | 126 | 42 | やや溝窓様の体側に底立気味に口縁部が付く。が強めに外反させている。口唇部は少しがれ気味におきめる。口縁のヘラケグリで高台を作成せず、高台内は多く3回頭が付いている。僅かに児のあり。内面に日輪4ヶ所残す。 | 釉が全くかけず 青白色を呈す。 灰釉 | 時計回り | 14-17 16 |
| 18 | 皿 I-d | 136 | — | 非常に薄手の作りで一気に口縁部まで飛脱している。口縁外面は内側に凹ませて、現豆板に近い作りをなす。強烈真白いから皿I-cとした。 | 薄青色 灰釉 | | 14-18 |
| 19 | 皿 I-e | 124 | — | 深い彫形をなすもので、ほぼ均一の胎壁をもち口唇は丸くおきめる。 | 深青色 灰釉 | | 14-19 |
| 20 | 皿 I-f | 118 | — | 底部を欠欠する。裏面的に斜め外方に施す胎壁を底立する口縁部が付く。口縁部はやや内溝窓様にしており、口唇は強烈が見解におきめる。ヘラケグリの様子から豊富だと思われる。 | 釉がかけず口 唇を呈す。 灰釉 | 反時計回り | 14-20 |
| 21 | 皿 II | — | 46 | 口縁部を欠欠する。分厚い胎壁をなすが、口縁部に近くにぼって芯に隠れる。内面する体側に外反する口縁部が付くようである。2回のヘラケグリで高台を作成する。I類に比してややテラつきの多い胎壁を使っている。 | 深青色 灰釉 | 反時計回り | 14-21 |

第4表 出土遺物一覧表

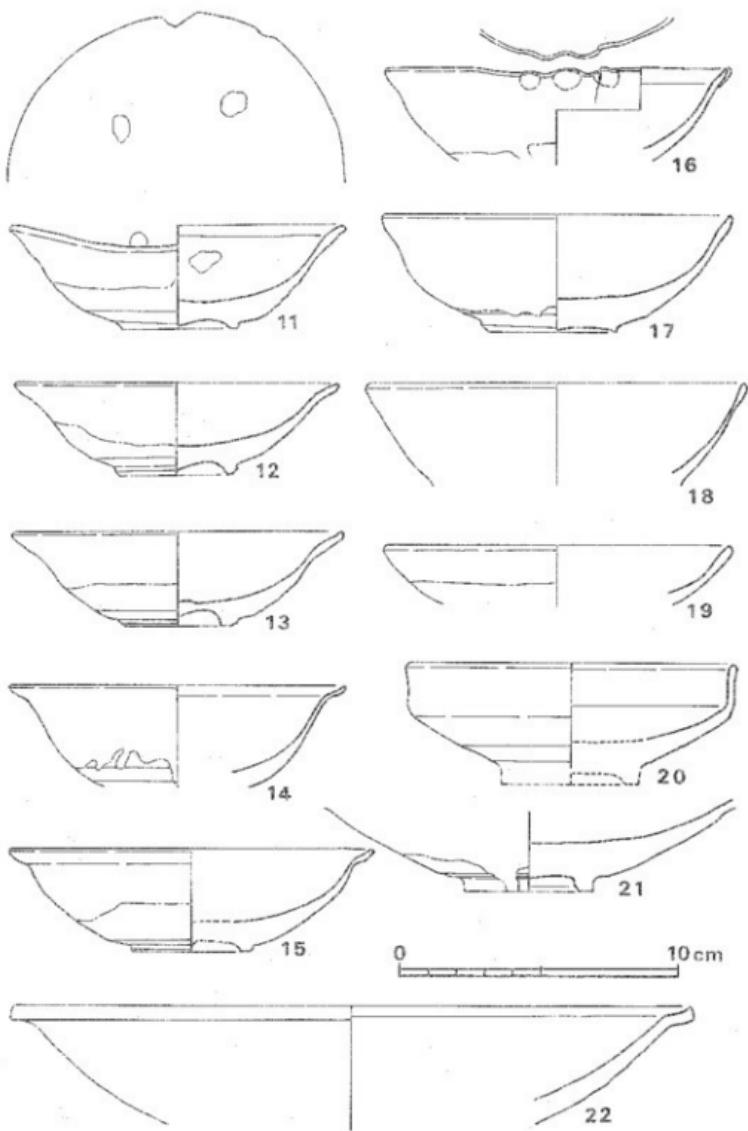
| 番号 | 部類・分類 | 通数 (個) | 性別 年齢・性別 | 特徴 | 色調・状態 | ロ・クロ 面版方向 | 種別・同種 号 |
|----|-------|---------------------------|-------------|---|---------------|--------------|-------------|
| 22 | 頭 | 240 — | — | 内窓気泡に斜め上方に延びる部分に、溝端の口縁部が付く。口唇部は上方につまみ上げている。 | 褐色 灰釉 | | 14-22 |
| 23 | 頭 | II — | — | 重ね積みの状態の資料で4~5枚の紺土目を残す。高台内に現れたり。 | 褐色 灰釉 | 時計回り | 15-23 |
| 24 | 頭 | III — — 36 | — | 窓け亞みのが大きい。内窓気泡以外上方へ延びる部分に外反する口縁部が付く。内窓口縫下部を削り出し風呂底とするが、口縁の折り返しはその上方で行う。削り出し竹節の高台の高台の折りしにくく、直線的な腰付となる。 | 黄褐色~灰褐色 灰釉 | 反時計回り | 15-24 36 |
| 25 | 頭 | I — — | — | 天井形をなすので、折れ上方に窓けらる間に窓け気泡の口縁部が付く。口縁部が付く。口縫の外縫を持つ資料ではないが、作行は似通う。神海に挽き上げられた体部に凹凸の細部と口縁部が付く。 | 褐色 灰釉 | | 16-25 |
| 26 | 頭 | I — — | — | 25のように側縫外縫を持つ資料ではないが、作行は似通う。神海に挽き上げられた体部に凹凸の細部と口縁部が付く。 | 褐色 灰釉 | | 16-26 |
| 27 | 頭 | II — — | — | 高く立ち上がる体部は凹凸を見せ、口唇部は尖り窓けをおさめる。 | 褐色 | | 16-27 |
| 28 | 頭 | II — — 48 | — | 窓け窓けがなく、側縫している。底部から窓けたる体部に断続的二角形の口縁部付く。窓けは窓けと氣泡部がある。2回窓けたる窓けで窓け作行。高台は窓けがあり。神海窓け等が付く。また腰けに窓け行。窓けに窓け付ける。 | 褐色 灰釉 | 反時計回り | 16-28 48 |
| 29 | 頭 | II — — 47 | — | やや高い高台で下さんなりと伸びる体部が付く。窓けの外縫部が窓け気泡部が大きい。口縫部は肥厚させた二角形を作り、口縫は窓け気泡部をおさめる。高台の外縫部は3回の窓けで窓けで窓けが凹凸を見せる。窓けに窓けり窓けが窓け。 | 灰褐色 灰釉 | 反時計回り | 16-29 47 |
| 30 | 頭 | III — — 46 44 | — | 底部から直縫部に外上方へ延びる体部は、中程で窓けに窓けをなして立ち上がり窓け部は尖り窓け部をおさめる。底部は尖り窓けで窓けをなしている。底部に尖り窓け部がよく窓けられる。 | 褐色 灰釉 | 時計回り | 16-30 47 |
| 31 | 頭 | III — — | — | ほぼ均一の帶縫で体部より口縫部まで挽き上げる。口唇部は尖り窓け部をなす。 | 灰褐色 灰釉 | | 16-31 |
| 32 | 頭 | II — — | — | 底部から窓け下上方へ延びる体部に、やや肥厚して直立する口縁部が付く。ロクロ目が明瞭に窓け。 | 灰褐色 灰釉 | | 16-32 |
| 33 | 頭 | I — — 56 | — | 細かい凹凸。窓けをなす高台で下さんなりと伸びる体部が付く。口縫部は窓けに外縫部をもつて立ち上がる様子を見せ。高台は窓けと窓け。窓けに窓け部。 | 褐色 灰釉 | 反時計回り | 16-33 56 |
| 34 | 頭 | III — — 53 52 | — | 毛皮手袋みがあり口縫、窓け不確定。体部は内窓気泡に窓け立ち上がり、口縫部は窓けおさめる。外縫に窓け付ける。2回のヘラケズリで高台作行。竹節状をなし。 | 褐色~灰褐色 灰釉 | 反時計回り | 16-34 |
| 35 | 高台 | — — 42 | — | 窓けの高台で底部より窓けたる体部がかなり窓け上げられる。1回のヘラケズリで窓け作行。窓けは竹節状をなし紙、削りされている。窓け内は三日月形が付く。火点があり窓けに窓けの付ける認められる。 | 褐色 灰釉 | | 17-35 42 |
| 36 | 高台 | — — 50 | — | 窓けの窓けである。口縫部の形が不規則。2回のヘラケズリで窓け作行。竹節状をなし。内窓の折りは窓けのあり。また三日月形をなす。 | 褐色~灰褐色 灰釉 | 反時計回り | 17-36 |
| 37 | 高台 | — — 45 | — | 小ぶりの窓けである。分厚い底部から強く立ち上がる様子を見せる。2回のヘラケズリで窓け作行。窓け内は丸く抉れる。西面に窓け付ける。また量付ける窓け内に窓け付ける。 | 褐色 灰釉 | 反時計回り | 17-37 |
| 38 | 高台 | — — 44 | — | 窓けの高台である。体部は分厚く、口縫の形状不明。削り出し窓け高台で竹節状をなす。窓け内は窓けが浅い。窓け部を見せる。 | 褐色~灰褐色 灰釉 | | 17-38 |
| 39 | 高台 | — — 45 | — | 窓けの高台で底部から窓けたる体部で立ち上がるが、口縫部の形状不明。削り出し窓け内に窓けがある。窓け内は窓けが二日月形をなす。 | 褐色 灰釉 | 時計回り | 17-39 |
| 40 | 高台 | — — 58 | — | 窓けの窓けで分厚く大きい。窓け内はヘラケズリによって行い、その外縫部ナメを行う。窓けに窓けり窓けが窓け。 | 褐色 灰釉 | 反時計回り | 17-40 |
| 41 | 片口 | 152 — — | — | 頭部の口縫部をなすので断面分厚く窓け感がある。口縫下5cmの所で最大幅となる。内窓部に窓けたるハゼが窓けられる。窓けは内窓及び外窓部下部に窓け。 | 褐色 灰釉 | | 17-41 |
| 42 | 片口 | 166 — — | — | 窓け部突出している。体部から窓け挽き上げて削り出しの口縫をなす。口縫部は中空となる。内窓と内窓に縦下まで窓け。 | 褐色 灰釉 | | 17-42 |

第5表 出土遺物一覧表

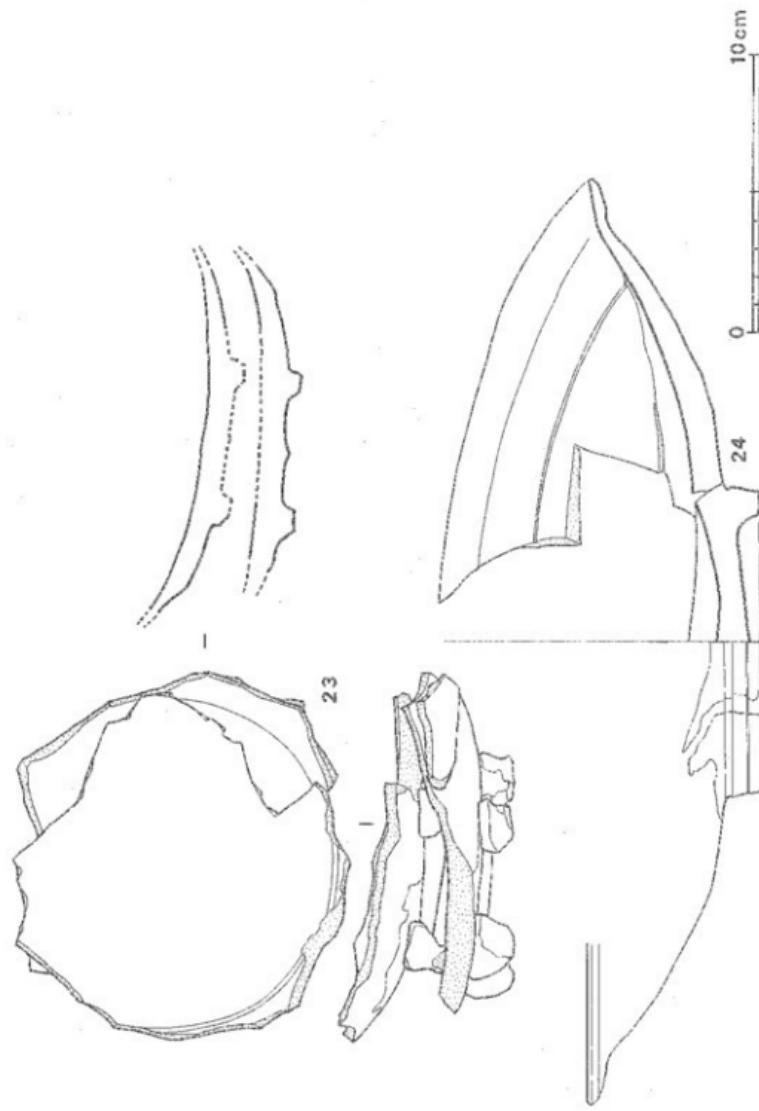
| 番号 | 部品・分類 | 法規 登録 番号 | 後 高さ | 特 徴 | 色調・釉色 | ローテ 開拓方角 | 施区・国保 番号 |
|----|----------|--------------------------------|---|--|------------|-------------|-------------|
| 43 | 片口部 | — | — | 片口の口部端に手捏ねである。長さ35mm、幅50mmほどを測る。正面に瘤狀。 | 新色 灰釉 | | 17-43 |
| 44 | 片口 | 169 — — | — | 馬頭部の体部をなす頃であろう。背部は延ばし方に後引上げられ、口端部は弧状外反させる。内部に未焼成の際のヘリ痕が残る。口部下5cmで最大径190mmとなる。 | 青色 灰釉 | | 17-44 |
| 45 | 虹鉢 | 45 13 | — | 手捏ねで八種形に成形。表面によつてつまんでいる。表面膜が明瞭である。内部膜と見られるが、多く剥かれている。鉢の多い粘土を揉っていいる所の外側に落としている。 | 新色 灰釉 | | 17-45 17 |
| 46 | 壺鉢 | 230 | — | 水走き成形で輪郭から一度外反させ口縁部と別離させている。口部端は四稜的に内上向外へ延び、口縁は内側へ偏かず変形させる。手奉一事例のタシで粘土に瘤狀目をつける。施釉は内側器皿口縁部付近のみ。 | 新色 灰釉 | | 18-46 |
| 47 | 壺鉢 | 246 — — | — | 水走き成形で輪郭から一度外反させ口縁部と別離させている。口部端は四稜的に内上向外へ延び、口縁は内側へ偏かず変形させる。手奉一事例のタシで粘土に瘤狀目をつける。施釉は内側器皿口縁部付近のみ。 | 灰綠～銀 灰釉 | | 18-47 17 |
| 48 | 壺鉢 | 276 118 100 | — | 水走き成形で輪郭から一度外反させ口縁部と別離させている。口部端は四稜的に内上向外へ延び、口縁は内側へ偏かず変形させる。手奉一事例のタシで粘土に瘤狀目をつける。施釉は内側器皿口縁部付近のみ。 | 新色 灰釉 | 次時計四 り | 18-48 17 |
| 49 | 不規 | 304 | — | 生焼けの頃で全体を成形する。芯焼で立ち上がり胚体に手捏ねする口部端が付く。門面口縁下にハケによって横穴に施釉を入れる。 | 新色 | 斜計四回り | 18-49 |
| 50 | 火舟 | 272 | — | A型の者である。出筋は欠失している。外上方に垂りた付口に内側へ落す。表面は付口。外側に斜面に凹凸があり、内側に突起を有する。表面は灰釉である。内側に直線状の凹みがある。内側に直線状の凹みがある。内側に直線状の凹みがある。 | 米白～灰青色 | | 19-50 18 |
| 51 | 火舟片 | ? | — | 小破片で底部・焼成は50%前後。外側に本の葉のスクランプが認められる、内側は50%程度焼成なさずから手捏ね上げ | 赤玉色 | | 19-51 |
| 52 | 火舟脚 | 脚窓38 298 | — | 瓦質の脚部である。耳状に形成し、調達は底面下部がハケによる追加すべりサテラウチのナギ上に。脚窓に7本の継糸直認のられる。 | 新褐色 | | 19-52 18 |
| 53 | 調達具 | — | 瓦質の調達具と思われる。表面は平時に焼き、内側は丁度オクタゴンの形で調達。内側はハサウエ型を調達につけている。表面は火付の跡を有する。内側に直線状に凹みを伴つてある。 | 灰黒色 | | 19-53 18 | |
| 54 | 不規 | — 134 | — | 生焼けのもので、四脚状をなすものの、表面下端へケズリ。上端ヨコナギ、内部へナギスのまま。焼成時の窯業具。 | 灰褐色 | 次時計四 り | 19-54 |
| 55 | 窯窓具 | — | 瓦質で丸筒のものか。凹面と凸面を有し西面の腹壁からみると窓向外へ延びて成形したものと見られる。凹面にセミ窓の付着が認められ53回目の機能を持つものであろう。 | 灰黒色 | | 19-55 18 | |
| 56 | 不規 | 382 | — | 生焼けで表面黄色を呈し、調盪である。49と口縁部のが焼かれており。内外窓井にヨコナギ(上)上げ。水滴式点火である。 | 赤褐色 | | 20-56 18 |
| 57 | 皿 | 320 | — | 六角の底で内側の腹壁から、短く強く外反する口縁部が付く。口縁部外端ヨコナギ、外縁下部は不規則なナギ付。内縁も。自然焼成。 | 素～灰褐色 | | 20-57 |
| 58 | トタン イ | 長さ260 幅60-95 | — | 断面方形をなす。肚口付と調盪の柄を留めている。通路の分岐部のあと使用する。表面は窯業器の粘土を盛り付け上下方向にハケ調整した柄が見られる。他の部分はナギ仕上げ。 | 新色及び青色 | | 20-58 18 |
| 59 | トタン | 長さ93 上部幅25 下部幅43 往復43 | — | 小柄のトタンで左方に傾く。手足などによって作成されヨコハケが残る。下縫に砂呑の跡、上縫にモモ根付跡とする。 | 青色 | | 21-59 18 |
| 60 | トタン | 上盤径119 下盤径66 | — | 最大型のトタンで下盤を欠失する。柱部はユビ成形。軽分の多い粘土で企棒に茶色の焼けがあり。下縫にモモ根付跡。 | 米色 | | 21-60 18 |
| 61 | ハサ | 進退136 厚27 | — | 上下面の形が異なる約半分を欠失するが、おおよその形態はわかる。被盪のため竪窓が生じる。上面にセミ窓及びグラ様の付窓が認められる。下面は焼成化により系糸。 | 新素～灰色 | | 21-61 |
| 62 | ハサ | 1復元690 厚29 | — | や小形のハサで瓶と両立である。上面には横盪があり、主窓の付窓も青色で施される。また窓内が施窓している。 | 赤茶色 | | 21-62 |
| 63 | 脚土目 | 上窓透43 高さ43 窓面透13 | — | 手捏ねであり。上縫には高台のスタンプを残す。 | 赤色 | | 21-63 |



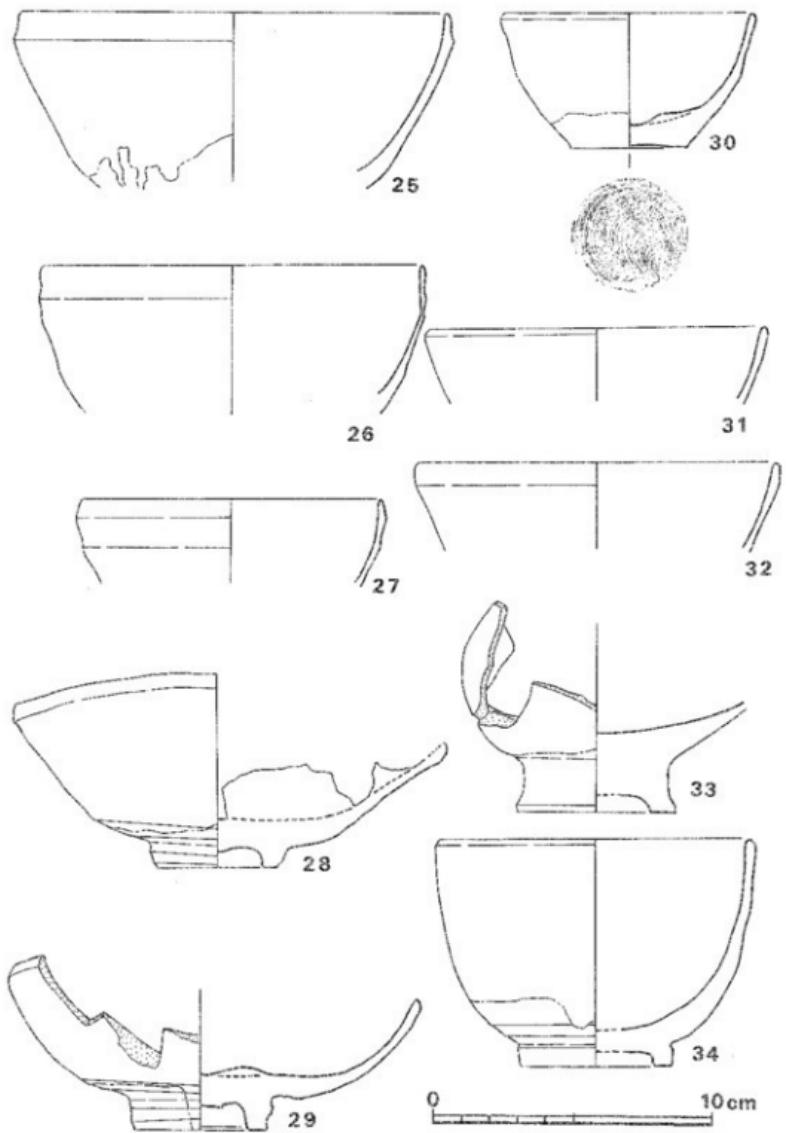
第13図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



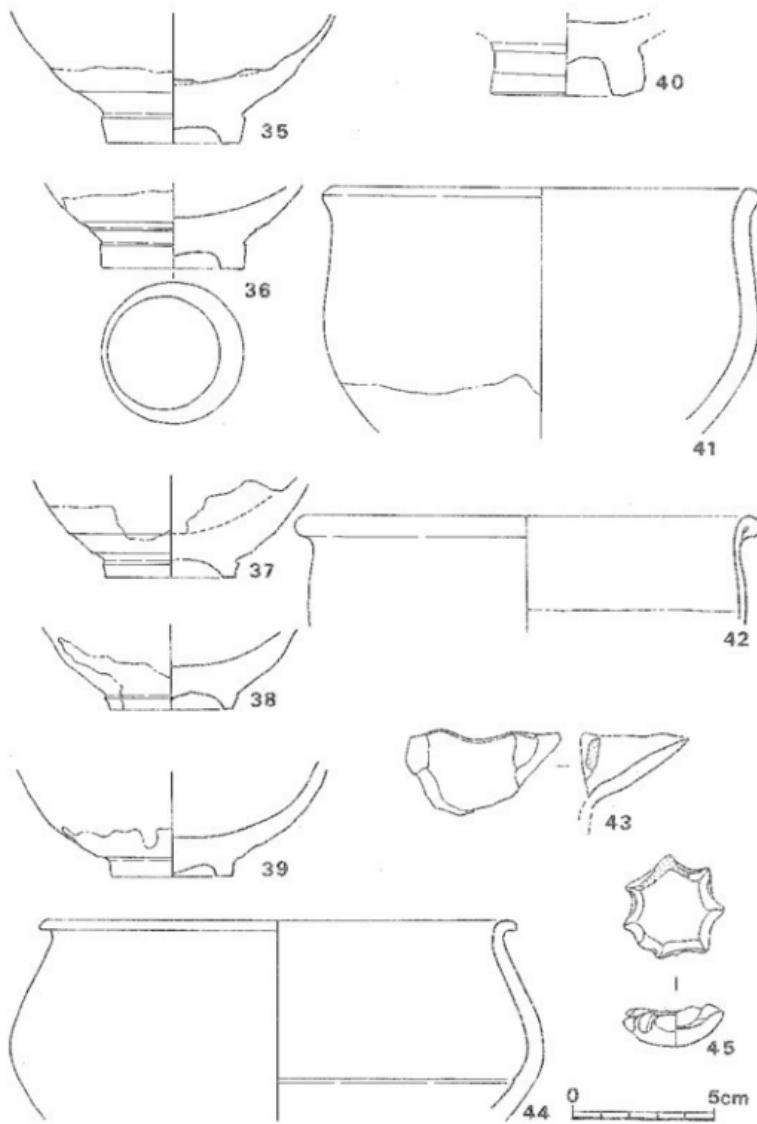
第14図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



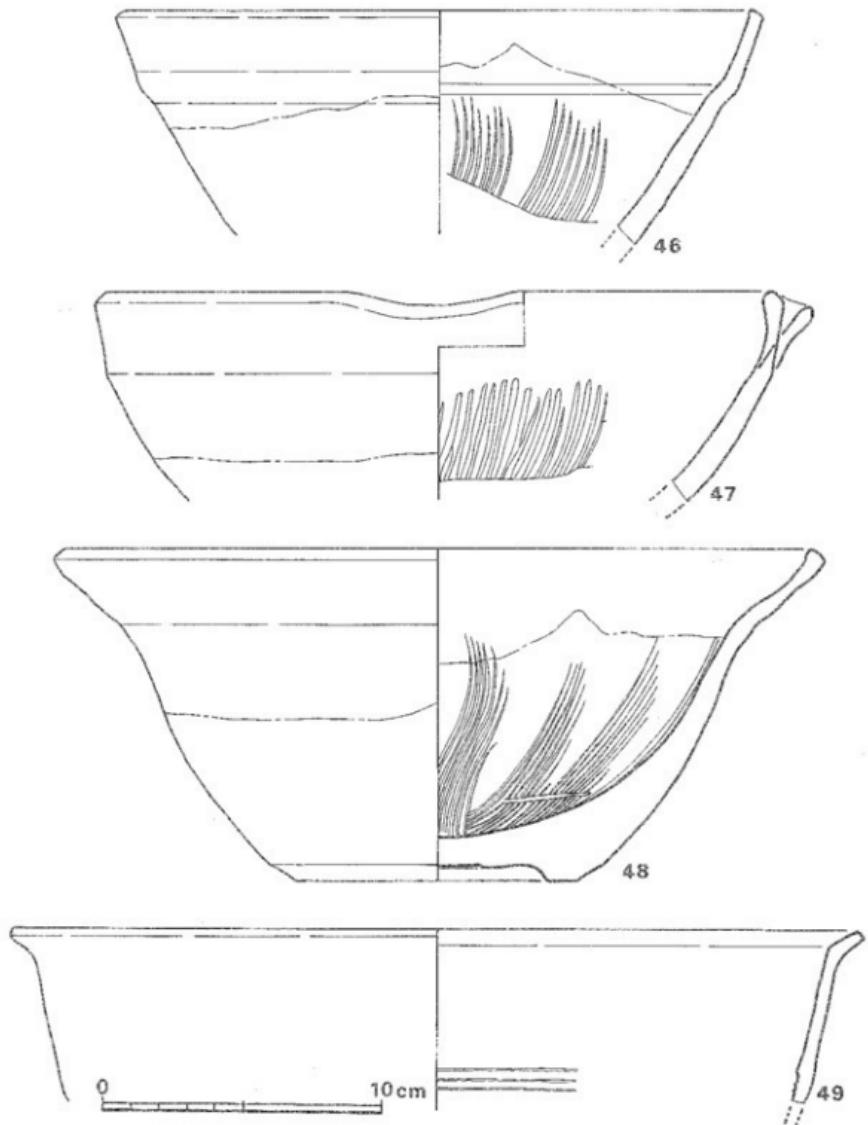
第15図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



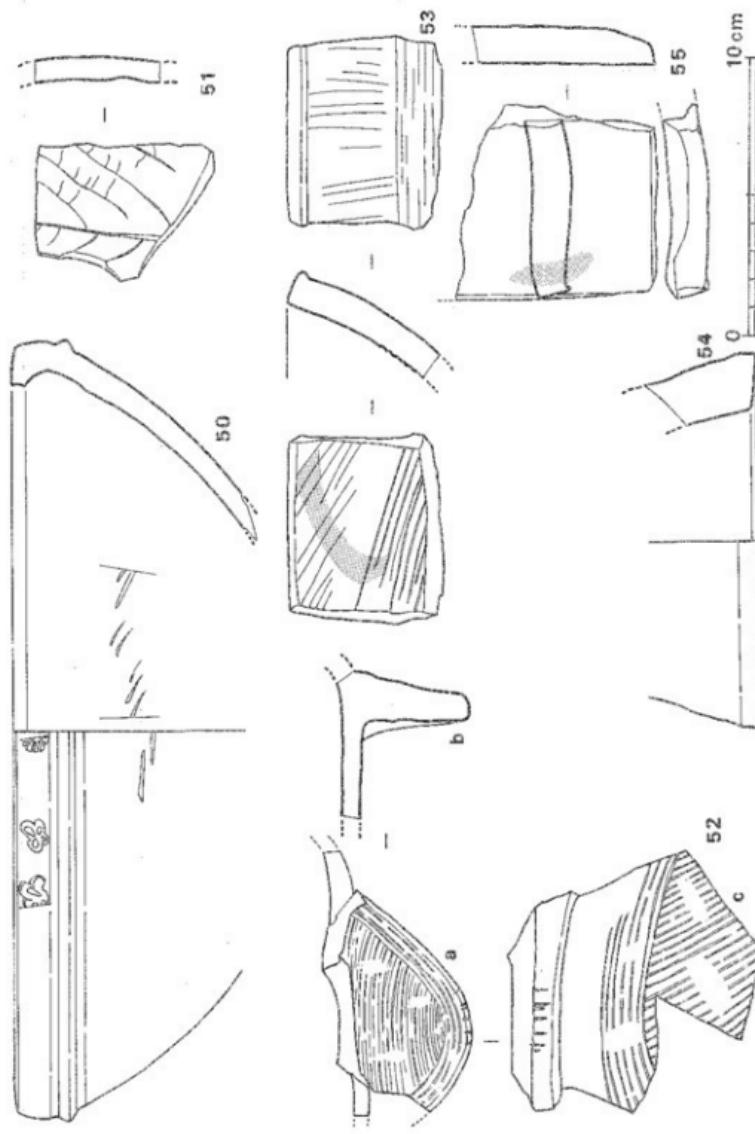
第16図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



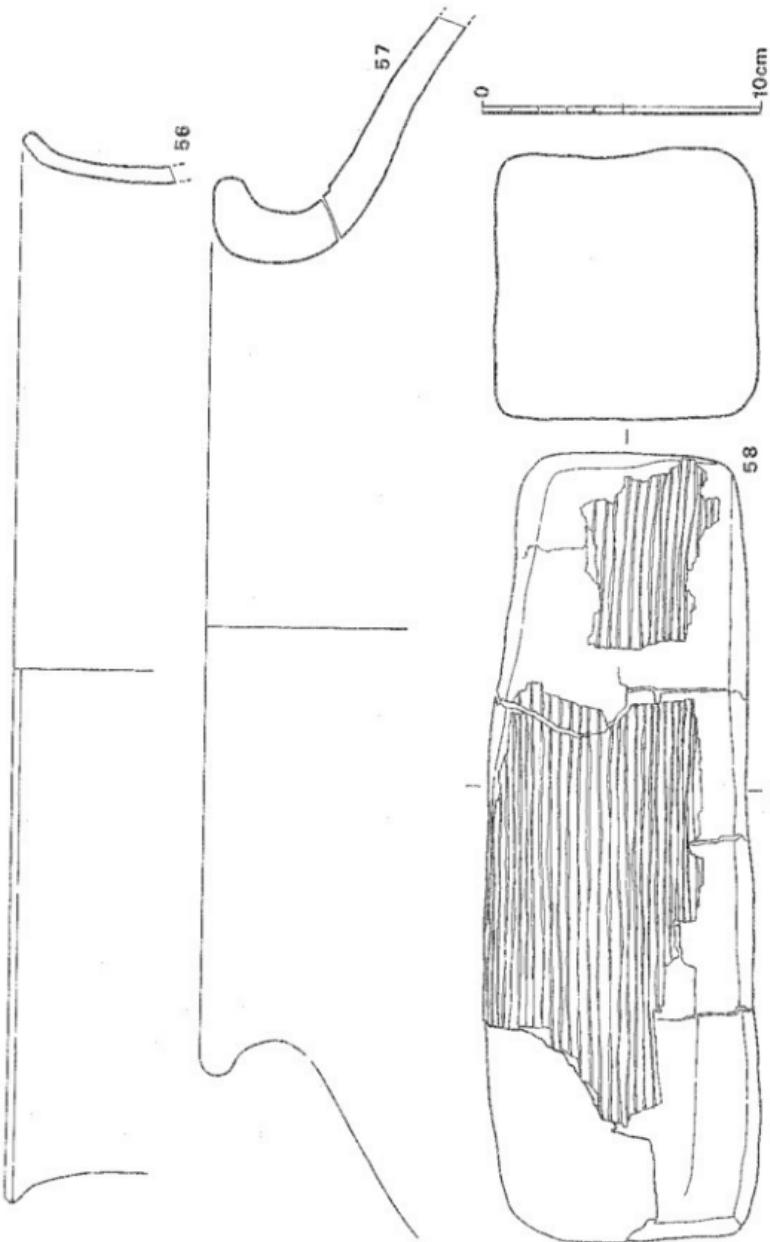
第17図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



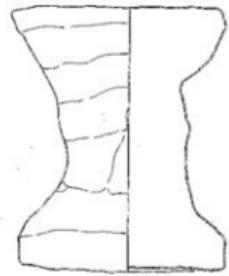
第18圖 中道古窯跡出土遺物實測圖 (1/2)



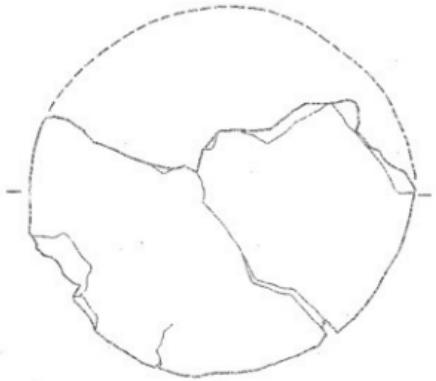
第19圖 中道古蒸跡出土遺物實測圖 (1/2)



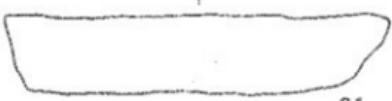
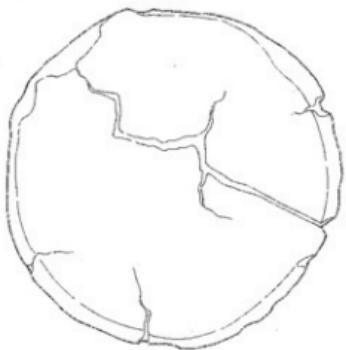
第20図 中蒙古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



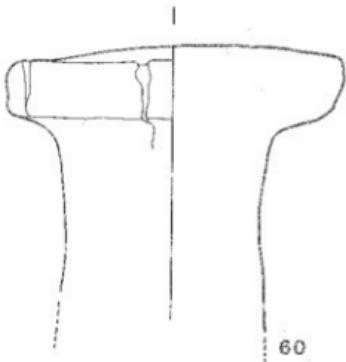
59



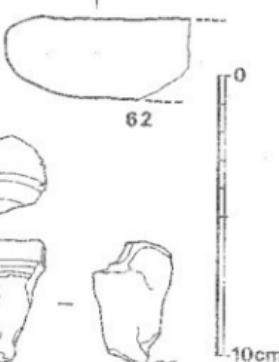
I



61



60



62



—



63



第21圖 中道吉窯跡出土遺物實測圖 (1/2)

4. 小 結

本古窯跡は前節において述べたように、その出土品等からいわゆる日常雑器を焼造する窯である。また、窯体についても前章に挙げたハラタラ古窯跡と異なり、半地下式の階段状連房式登窯である。

窯体は縦長の窯室を連接させており、従来管見において知る限り類似は多くない。窯体自体は小規模であるが、側溝、落ち込み部(煙出し外施設)、火床、砂床、温座の巣、焚口と全てを備える。窯室が小規模であることにより、温座の幅は狭く、狭間穴も5か所見られるのみである。この狭間穴(通焰孔)は火の回り具合を良くするため、両端を広く、中央を狭くしてあり、技術的侧面が十分に窺われる。築窯に際しては、分焰柱のみにトンパイを使用し、他は粘土を塗り込めて作る。窯壁を築く際は、部分的に石材を裏込めとして使っている外は、地山を掘り込んだ面に粘土を貼付している。天井部は崩壊しているため不分明であるが、竹を組んで粘土を塗り込めてカマボコ形に築いたと推される。天井内部の高さは、煙出し及び第1室の状況から高くて80~90cm程度と推量される。また焚口部は高さは不明であるが開口50~60cmと考えられる。

遺物については、物原が第3室脇より下位に拡がっており、その多くが道路によって破壊されている。そのため、遺物量は少なかった。

皿・碗・擂鉢などの日常雑器の出土が、数量的に少ない遺物の中でも主体を占めている。皿類は大・中・小と認められ、また種類も形態的に8分類が可能でバリエーションに富んでいる。また碗も3分類が可能で、I類とした天目形碗が特記される。高台の作行きは不明であるが、形態的に腹の本古窯跡3号窯の天目形茶碗より、口縁部の作りが未発達段階のものであり先行するタイプと言えよう。

本古窯跡出土上遺物には大別して2つの粘土が使用されている。一つは小皿類に多用される肌目細かで緻密な粘土、他は砂質気味の粘土で胎土中に微小な黒色鉱物を含み、ケズリによって縮緬じわが看取されるものである。窯跡近隣より採取したと考えられ、鉄分に富んでいる。無施釉部分は茶色の滑沢を呈している。また釉薬は灰釉のみで淡緑~茶色に発色している。この器面への彩絵の技法は取り入れられていない。

窯道具は築窯材としてトンパイ、窯詰め材としてトチン・ハマ・胎土目がある。その他ハマの代用品と見られる資料も存在する。窯詰めには碗等にはトチン・ハマを使ったと見られ、モミ殻を併用する。小・中皿、擂鉢は胎土目積みしている。碗は重ね焼きすることなく焼造し、中には砂床直置の資料も見受けられる。

なお、出土遺物のうち50~55は物原を中心に出土したものであるが、本古窯跡で焼造されたものかどうか、今後類例の増加をまって更に検討する要がある。

V 土師野尾古窯跡の残留磁気測定

伊藤晴明（島根大学理学部）
時枝克安（　　〃　　）

はじめに

地磁気は時代とともにその方向と強さを変化してきている。これが地磁気永年変化である。しかし、同じ時代であっても地磁気は場所により異なった方向を示す。方向は偏角(D)と伏角(I)で表わされる。

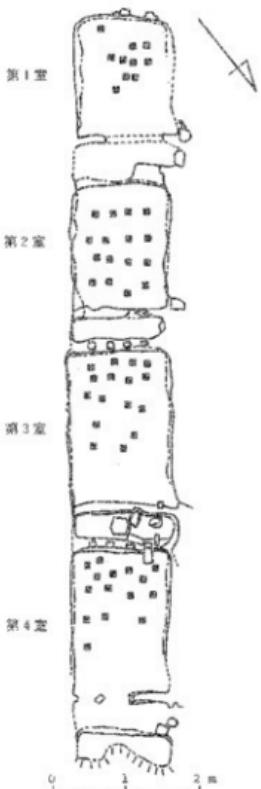
他方、粘土中には磁石になる強磁性鉱物（主にMagnetite）が数パーセント程度含まれている場合が多い。Magnetite粒子は粘土が焼かれ、キュリー温度(578°C)以上に熱せられると磁性を失うが、キュリー温度以下に冷却するとその時の地磁気の方向に磁化して再び磁石となり、地磁気の方向をしっかりと記憶することになる。このようにして焼土に固着された熱残留磁気は再度キュリー温度以上に加熱されない限り、その方向を頑固に保持し続ける。考古地磁気法はこのようにして焼土に固着された熱残留磁気方向を測定し、焼土が焼かれた時の地磁気の方向を求め、焼成年代を推定する方法である。

試料採取

土師野尾古窯跡(32°49'N, 136°02'E)は諫早市土師野町にあり、中道古窯跡とハラタラ古窯跡の2基が発掘・調査されている。考古地磁気試料は昭和59年9月29日小雨の中で採取した。

中道古窯跡は勾配が10'～12'の山の斜面に構築されており、第1室、第2室、第3室、第4室の床面がきれいに発掘されていた。試料は第1室の床面で10個、第2室で16個、第3室で16個、第4室で15個、総計で57個採集した。

ハラタラ古窯跡は第1室、第2室、第3室及び煙出し部分が不完全ながらも残存していた。この窯跡の床面の勾配は急で平均して25'位であった。しかも床面はもうく



第22図 中道古窯跡試料採取場所

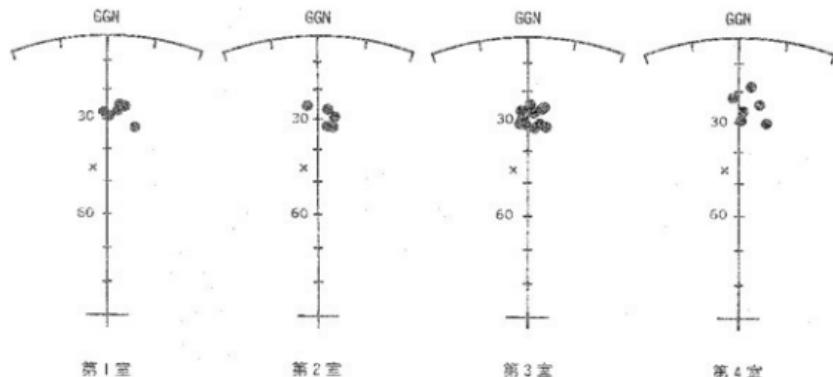
にくずれ易く、固く焼きしめられた焼土部分は少なかった。試料は第1室、第3室及び煙出し地点から計39個採取したが、第2室は焼結部分が少なく試料の採取はできなかった。

中道古窯跡の試料採取地所は第22図に示す通りである。

残留磁気測定

焼土試料は実験室内で一辺ほぼ3cmの立方体に整形し、残留磁気方向は無定位磁力計ですべて測定した。一部試料の安定性は交流消磁によりチェックした。その結果、中道古窯跡の焼土試料は安定な残留磁気方向を示すものが多く、信頼できるものであった。第23図は中道古窯跡から得られた残留磁気方向である。

一方、ハラカラ古窯跡の焼土試料は方向のバラツキが大きく、信頼できる方向が得られなかつた。第24図はハラカラ古窯跡の残留磁気方向である。

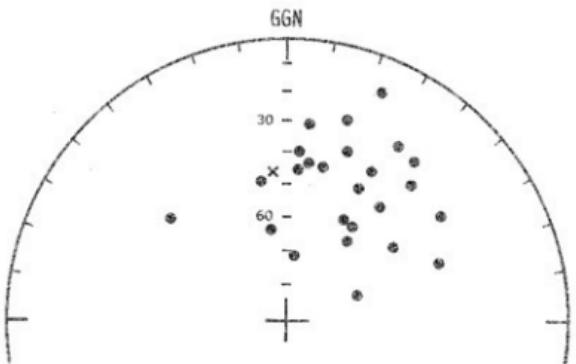


第23図 中道古窯跡残留磁気方向

中道古窯跡の残留磁気測定結果は次の通りである。

ただし、Nは測定試料数、Dは偏角、Iは伏角、Kは信頼度係数、 θ_{95} は誤差角である。

| 採取場所 | N | D | I | K | θ_{95} |
|------|----|-----|------|-------|---------------|
| 第1室 | 6 | 3.2 | 28.5 | 420.2 | 3.2 |
| 第2室 | 5 | 2.5 | 29.9 | 373.2 | 4.0 |
| 第3室 | 11 | 1.5 | 29.6 | 467.3 | 2.1 |
| 第4室 | 6 | 2.6 | 25.3 | 195.3 | 4.8 |
| 平均 | 28 | 2.3 | 28.9 | 277.1 | 1.6 |



第24図 ハラクラ古窯跡残留磁気方向

各室から求めた残留磁気の方向はよく一致しており、それらの間に有意の差は認められない。従って、全測定試料の平均値をとりこの窯跡の残留磁気方向とする。

推定年代

測定した残留磁気方向を広岡（1977）の地磁気永年変化図にプロットしたのが第25図である。測定値は伏角が浅く、変化曲線から少し離れているのが気にかかるが、測定値から曲線に垂線を下し年代を求めてみると、

A. D. 1530±30

の値が得られる。この推定年代は16世紀前半を示唆しているが、一般には16世紀末の操業が考えられているようである。

考 察

長崎県の平戸（ $33^{\circ}30'N$, $129^{\circ}20'E$ ）や五島列島沖（ $33^{\circ}00'N$, $128^{\circ}30'E$ ）では、17世紀初頭ヨーロッパによる偏角の観測値が報告されている（Imamiti, 1956）。それによると、A. D. 1613～1615年頃、平戸や五島列島沖での偏角は約 2.5° 東にずれていたことになる。ただし、伏角の観測値はなく不明である。

この偏角の観測値が正しいものとして、広岡の変化曲線を 5° 西にずらし、曲線の補正をしながら、改めて年代を求めてみると、

A. D. 1570±30

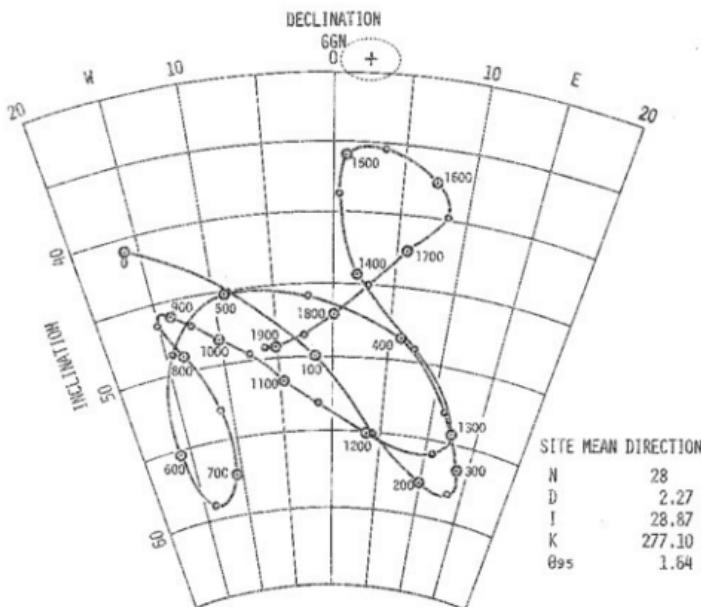
という値が得られる。これに従えば、中道古窯の操業年代は16世紀後半ということになる。九

州地方では、広岡（1977）の永年変化曲線は少し補正が必要であろうという報告もあり（広岡、1978；伊藤・時枝、1982），より精度の高いデータの蓄積が必要であろう。

終りに、考古地磁気試料採取の機会をえていただき、試料採取時には種々御世話になり御協力いただいた諫早市教育委員会の方々、特に秀島貞康氏に心からの謝意を表したい。

参考文献

- 広岡公夫（1977） 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15巻、209～203。
 広岡公夫（1978） 考古地磁気法による年代決定、「自然科学の手法による遺跡の古文化財等の研究」、昭和52年次報告書、53～65。
 Imamiti, S. (1966) Secular variation of the magnetic declination in Japan. Mem. Kakioka Mag. Obs., 7, 49～55.
 伊藤晴明・時枝克安（1982） 内ヶ城窯跡の科学的な年代測定について、「内ヶ城窯跡」、直方市文化財調査報告書 第4集、直方市教育委員会、145～155。



第25図 地磁気永年変化図（広岡、1977）と中道古窯跡の測定値（+印）

VI 結論

各章において今次発掘調査を実施した2古窯跡についてその概要を記したが、本章ではその総括を行い結論としたい。

先ず窯体についてであるが、築窯については両窯とともに半地下式となっており地山掘壁を行い、窯室を連接させている。ハラタラ古窯跡は胴木間以下数室を破損しているが、残存窯室の観察からすると焼成室床面は傾斜角を変えており、また奥壁も急角度で登らせ次室へ連接させる築き方をしている。次室へ移る部分、つまり奥壁上位の温座の巣の存在は現状では把握できないが、存在したと見るのが妥当であろう。それは火床及び焚口を右側に備えていることによる。築窯はすべて粘土を塗り込めて造作しており、調査時点では僅かに側壁にその残存が見られた。地形の傾斜に沿う塗りバケの状態が看取され、また壁には竹様の痕跡が残り、天井部は竹様の材を骨組みにして築いたことが知られる。

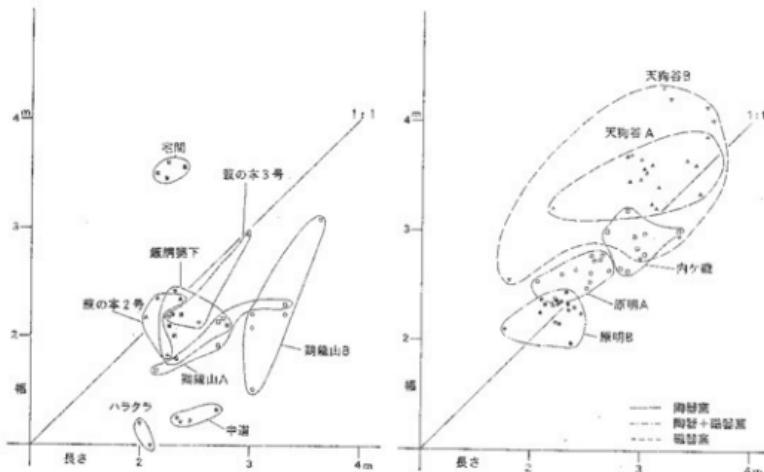
中道古窯跡の場合は、緩傾斜面にハラタラ古窯跡同様の築窯を行っているが、緩傾斜であるためその遺存度は良好であった。各室とも奥壁に向って漸次高くなる砂床を作り、奥壁は急角度で立ち上がる。壁部分は僅か30cmほどの立ち上がりを有し、上位はトンパイを縦位に4本使用して5ヶ所の通焰孔を作っている。この通焰孔上位に奥壁が続くのであるが、その高さがどれ位のものであったか現状では分からぬ。しかし、第1室及び煙出し部分の状況からすると高くて80~90cmの低い天井であったろうと見られる。この低い天井部は現存の側壁及び奥壁の状況からするとカマボコ形を呈するように、つまり竹を2つに割って伏せたような割竹型を示していたと推定される。このような窯室が何室連接していたか不明であるが、窯体を切断する道路下に砂床が看取される処よりすれば最低8室は存在したであろうと推定される。この窯体の南眼は落ち込みによって割されている。地山を切断したもので、煙出し外部の施設である。このような施設は他窯跡においてもしばしば見られるものである。

さて、上記2古窯跡のうちハラタラ古窯跡は割竹型登窯と称すべき構造を示すが、細部において独自の築窯の方法を見い出すことができる。また、中道古窯跡もハラタラ古窯跡同様のプランを示し、割竹型の段階状連房式登窯である。両窯構造的に異なっているが、築窯意識は同一軌道上にあると見られる。それはハラタラ古窯跡が叢類の大形品を焼造し、中道古窯跡は皿・碗等小形品を焼造した窯と考えられ、このことが窯窓法、立地及び窯道具の相異に起因したと推考されるからである。よって両古窯が新旧関係にあるものと見ると、同時期に操業されたと考える方が適当であろうと思われる。

以上述べた両古窯の窯体構造について、その類例を国内に求めるのは難かしい状況である。両古窯跡ともに縦長プランを示す窯室が連接する形態を示し、その類例に乏しいことによる。近世の肥前における窯型式の系譜について三上次男氏は中国との関係よりも朝鮮との関係を重視

されている。そこで過去調査が実施された李朝初期の鶴峯里第一陶窯址（鶴龍山麓陶窯址）²²⁴ の A・B 窯を見てみたい。窯体の規模は A 窯 19.6m、窯室平均長 2.74m、同平均幅 1.27m、B 窯全長 18.8m、窯室平均長 3.1m、同平均幅 1.33m を測り、A 窯は胴大間を含めて 7 室で構成され、各室は障壁によって区画されているものの奥壁部分に階段状の立ち上がりを有さない。B 窯は胴木間を含めて 6 室で各窯室ともに僅かながら立ち上がる奥壁を有し、次室と連接している。両窯とも縦長プランの窯室が連接して割竹型登窯をなすもので、各窯室の主軸は各々ズレ込んで蛇窯の形態を示している。この窯址からは刷毛目、絵三島、黒釉、白磁などが焼造されており、出土陶磁器及び墓誌板等から 15 世紀前半から 16 世紀半ば頃までの操業と位置付けられている。この鶴龍山陶窯址群と本古窯跡群との窯体構造における類似点が指摘される。

次に窯室のプランについて本古窯跡群では縦長を示していることは既述した。多くの古窯跡が陶器窯、磁器窯を問わず横長プランを示すのに比し対照的である。そこで各古窯跡窯室の奥行き（ここでは火床まで含めた）と幅を図化して纏めたのが下図である。陶器窯は純体的に小規模であり、縦長或いは正方形に近いプランを示している。ただ宅間窯跡のみは窯室幅が広く横長プランを呈している。この窯は割竹式登窯の地上式で李朝中期の築窯方法を直接導入したとされるものである。岸嶽 7 古窯中最古と言われる飯胴窯下窯はほぼ正方形に近いプランを示している。また陶器窯で磁器窯をも焼造した原明 A・B 窯は正方形プランを呈するもので 17 世紀初頭に位置付けられている。磁器窯では天狗谷 A・B 窯を取り上げたが窯室幅が長さを遙かに凌駕しており、同時に坪数も大きくなっている。また火床面積も増大する傾向を示している。このように見てくると陶器窯から磁器窯への移行に伴い、縦長プランから正方形プランを経て



横長プランの窯室へと変遷していくのが理解されるのである。また、同時に規模の拡大化、火床の増大が伴っており、多量焼成を可能にする窯体構造の変化、窯道具の多様化が指摘される。割竹型登窓から階段状運房式登窓への変換は、安定した焼成温度を得ることや燃焼効率を高めることと多量生産を可能とする両相を止揚する形でもたらされたと評価されよう。

本古窯跡群で焼成された陶器群はすべて灰釉を施釉したものである。鉄分の多寡及び窯変によって淡緑色、茶色の釉の如く発色したもの、黒色を呈するものなどの釉調が認められる。しかし、絵唐津と言われる彩絵した例は一点も検出されていない。本古窯跡出土陶器群は各器種の形態等から絵唐津発生期以前に位置付けがなされよう。

この絵唐津と言われる彩絵技法が何時頃から導入されたかについては、未だ明確な論証がなされていない。昭和57年度調査が実施された蔭の本古窯の成績によると3号窯は土灰釉溝縁皿を主体とする絵唐津以前の所産である。^{註10}後続する2号窯では片口に単純な草文を表わし、1号窯では絵唐津の主体が直類に移り、同時に器種の増加が指摘されている。操業年代は慶長～寛永年間とされており、中でも絵唐津以前の3号窯はその最初期となろう。この蔭の本古窯の調査によって絵唐津に先行する陶器群の存在が明確となった。

さて、溝縁皿については大橋康二氏によって検討が加えられている。これによれば溝縁皿の紀年銘初出資料が川古窯の谷窯出土の元和4年銘大皿であること、その下限が遺跡出土陶の検討により寛永後半期にあらうことが提示された。また窯詰技法について言及され胎土目積が砂目積に先行する技法であること、砂目積技法と溝縁皿が密接な関連性が認められることを指摘され、「文様・慶長の役に連れ帰られ藤ノ川内に来住した朝鮮人陶工集団が焼造、あるいは日本人に教えた技術、それは砂目積の陶磁器や砂敷の磁器だったと想像されるのである。」と述べられている。

次に遺跡出土の唐津陶としては天正元年織田信長によって滅ぼされた朝倉氏の本貫地一乗谷朝倉氏遺跡^{註11}を挙げることができる。また大阪・京都近傍の諸遺跡に関しては鈴木重治氏によつて纏められており、天正10年代にはかなりの唐津陶が京都に搬入されていた事を示された。

また天正20年銘庵岐聖母神社の「唐津叩き三ツ耳付茶壺」、天正19年没した利久所持「ねのこもち」などの存在により唐津焼の起源が天正期以前に位置付けられることを示している。

以上、本古窯跡の窯体構造及び出土品等について概略を記し、関連事項について触れてきた。本古窯跡群の操業期については、窯体構造が李朝期の鶴龍山陶窯址と類似点が指摘されること、法量団から規模が極めて小さく横長プランを示す窯室は陶器窯でも古期に位置付けられること、胎土目積技法のみが看取され、かつ溝縁皿の出現が見られないこと等により、1560～70年代に推定することができる。この推定期は出土陶器群、瓦器類との年代的な齟齬を来すものではないと考えられる。また、Vで詳述してある残留磁気測定の推定期とは若干ズレているものの、補正值とは一致しており妥当な年代であろうと考えられる。

本古窯跡の操業期は、諫早地方の西郷氏治世の時代に相当する。從来伝伝されてきた龍造寺家晴

帶同説は今回の調査で改められることになった。西郷氏についてはその史料が僅少で多くを知ることはできない。しかし山部涼氏が取り上げられた『実隆公記』、『再昌草』等の検討により、西郷尚善が京の文化摂取に努力したことが窺える。この尚善の上京等京文化の摂取と古窯成立との関連は現状では認め難いが、西郷氏関連史料の発見とともに、本古窯跡成立の背景も次第に闡明されるであろう。

註1. 水町和三郎・金原京一

『肥前古窯址めぐり』田中平安堂 京都市 昭和10年

註2. 補原佑介・壽手理太郎

『地名用語源辞典』東京堂出版 昭和58年

註3. 三上次男

「九州陶磁と国際性—日本陶磁史上におけるその位置づけについて—」

『九州の絵画と陶芸 九州文化論集 5』平凡社 昭和59年

註4. 野守健・神田悠蔵

『鶴見山裏陶窯址調査報告』

『昭和二年度古窯調査報告 第一回』朝鮮総督府 昭和2年

鄭良謙・香本不苦治

『奉朝陶磁の窯跡と出土品』

『世界陶磁全集19 李朝』小学館 昭和55年

註5. 岸島邦弘

『古高取 永満寺宅間窯跡』直方市教育委員会 昭和58年

註6. 北波多村史編纂委員会

『北波多村史 上・下巻』昭和36・38年

註7. 高島忠平外

『原明古窯跡』西有田町教育委員会 昭和56年

註8. 三上次男外

『有田天狗谷古窯』有田町教育委員会 昭和47年

註9. 久村貞男外

『鹿の木窯跡発掘確認調査報告書』佐世保市教育委員会 昭和58年

註10. 大槻廣二

『伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について—窯跡技法よりみた—』

『佐久間重男教授追憶記念 中国史・陶磁史論集』昭和58年

註11. 佐賀県立博物館『古唐津』昭和53年に依った。

註12. 鈴木慶治

『生活遺跡出土の唐津陶』

『島根県立博物館調査報告 第3回』島根県立博物館 昭和57年

同

『唐津陶出現についての一考察』

『同志社構内 地下鉄島丸線今出川駅地点の発掘調査』昭和55年

註13. 山部淳

『西郷尚善と東山文化』

『諫早史談』第14号 諫早史談会 昭和57年

VII 唐津系陶器の中における土師野尾窯について

1. 唐津系陶器の流れ

日本近世陶磁器の発展にあたって重要な役割を果たしてきたのが、16世紀に西北九州を拠点として始まった唐津系陶器である。その起源については朝鮮の陶技を受けて出発したと言われるが、時期については多分に推測的な部分が多い。これまで岸嶽系の一群を最古の様式とするところでは大方の意見が一致するところだが、その創窯の時期については16世紀の前半とするにとどまり、この一群の終焉を16世紀末の文禄3年（1594）に波多氏が所領を没収された時としている。なおこの間の年代を示す資料として昭和31年に発掘調査が行われた飯脇窯下窯の熱残留磁気測定によると、1570年～1600年の閉窯年代が算出されているが、この一群の窯跡調査はほとんど行われておらず、わずかに階段式連房登窯の構造から叩きの技法を用いた壺・甕、水挽き法での碗・鉢・皿類が施釉されて焼成されていたことが判る。

伝世品及び生活史での出土資料に含まれるものでは、志岐島聖母神社の叩き黒唐津天正20年銘耳付茶壺と、天正元年（1573）に焼亡した福井県の一乗谷朝倉遺跡、大阪府堺環濠都市遺跡SKT19での天正13年（1585）銘の木簡資料との共伴出土、あるいは天正15年（1578）焼失庵寺の京都南禅寺などからも年代を推すことができる。このように1570年～80年頃にはすでに唐津系陶器は京阪地方までに販路が拡大していることからすると、創窯を16世紀前半頃とするには妥当なところであるが、その要因についてはこれらの地域での唐津系陶器出現以前の実態が不明であることが大きな支障となっている。即ち九州一円において古墳時代以降の中世陶器窯の発見がほとんど無いことが挙げられてきたが、この点では多くの研究者が大陸系陶磁器が入手しやすい環境にあったことを指摘して解答している。確かに中世の遺跡発掘では多くの舶載陶磁器の出土を見るが、同時に土師系陶器の出土もあり、これらの産地について言及した例は少ないのである。

岸嶽系以降では前代の技術的な継承は見られるが、ここに秀吉の朝鮮出兵を機会として製品の多様化がある。慶長2年（1597）寺沢忠摩守の招へいで古田織部と懇意であった美濃陶工の加藤景正がやってきて、新興の窯地で織部好みと呼ばれる茶陶類が焼成されている。内田訓屋、藤の川内の窯などでは一般的の食器類と共に志野、織部に似かよった製品類が物原発見資料の中に認められる。九州のほとんどの近世陶器の出発点はいずれもこの時期に創窯されたと言われるのが通説であるが、必ずしも茶陶そのものがこれらの窯を起させたものでないことは多くの窯の焼成資料から読み取ることができる。特に17世紀に入ってからは次第に磁器とのかかわり合いを強くして行き、有田天狗谷窯に代表されるように白磁焼成へ転化したわけである。なお一部では引き続いて陶器焼成が行われた窯もあるが、製品は日常の雑器類が主体となっている。

このような唐津系陶器の変遷史の中にあって、最古の様式に位置するものは岸窯を中心とする狭い地域に限られ、ここを唐津系陶器の発生の地として捉えてきた。今回の土師野尾窯については、それ以後の慶長の役後渡來した陶工によって始まったとされてきたが、これまで製品の検討は全然行われないままで、創窯時についても文献史料はなくて口伝のみであった。

2. 唐津系陶器における土師野尾窯の位置

土師野尾窯（中道窯）の発見は、昭和2年に金原京一によってなされているが、その後長い間にわたってこの窯が唐津焼研究の中で注目されてこなかったのは、当時から特徴あるものとしてもてはやされてきた絵唐津や茶陶類の製品が認められないこと、この窯が唐津系陶器窯の一群に含められてはいるが、分布の上で遠く孤立化していることにもよる。のために一応は平戸古唐津と称するものに統轄されているが、ほとんど今日まで製品の特徴に触れられたものではなく、わずかに紹介を試みた文献の中では黄・青唐津、絵唐津が挙がるが、採集資料に認められない絵唐津製品が加えられているなどあいまいである。

その後、昭和40年頃に中道窯は道路改修工事によって、調査が行われないで洞木間から数室が寸断・破壊されている。この折にかなりの陶片が出土したと聞くが、極く一部の資料を除いて保管されていないため実態は不明のままであった。しかし昭和54年には中道窯の西方約500mに登窯1基が確認され（ハラタラ窯）、また「古唐津一肥前陶器の歴史と美を探るー」（佐賀県立博物館1978）の展覧会では初めて土師野尾窯製品として、伝世品の黒唐津三耳付葉茶壺（図26-3）が展示されるなど土師野尾窯に対する関心は次第に高まってきつつあった。加えて昭和57年の長崎大水害では一部に土師野尾窯の陶片を受継いだのではないかと言われる同じ諫早領内の現川窯（元禄4年（1691）創始）鬼木上窯の窯跡が発見され、やがて確認調査が行われたところから土師野尾の2つの窯の実態を把握する必要に迫られることとなったのである。

調査結果の詳細については秀島報文で触れているが、発掘した窯跡は2基である。そのためこれまで土師野尾窯と総称していたが、それぞれ中道窯、ハラタラ窯と名づけた。両窯とも単独窯で、いずれも洞木間から数室を消失しているが、推定ではおよそ全長15m、幅1.2mの7～8室程度の同様な規模をもつものである。窯室の広さは中道窯では約2.5m×1.2mであるが、ハラタラ窯の場合は保存状態が著しく悪いために明確に奥壁を捉えることはできなかった。床面は手前から奥壁に向って次第に上がっており、その角度は窯場の地形と併せてハラタラ窯ではかなり急傾斜をもっている。資料では窯窓の主体となる製品が異なる様相を示しているが、検討の結果では同時に使い分けて用いられたものとして把握した。

ではこの両古窯の年代であるが、一応島根大学が実施した残留磁気測定では中道窯の終焉は1570年±30年となっている。この年代値を単純にとりあげるならば、これまでの唐津系陶器窯の中で最も古い一群に属し、換言すれば唐津系陶器の起源について一考を要する窯として注目

されるべきものである。仮に30年の誤差を新しく加えてみても1600年となって飯洞臺下窯の歴史と同様であることは、岸嶽系古窯跡群とほぼ同時代であることはまちがいないだろう。

窯の構造・規模及び出土資料からは割竹型の階段式登窯であり、個々の窯室の規模はこれまで調査が行われている前記の飯洞臺下窯、武雄北部系古窯の中で最も古く開窯されたと言われる黒牟田銹谷窯や、平戸系の佐世保窯の本1～3号窯などいずれも1辺2～3m程度の正方形もしくは長方形を形作っているが、当窯跡もほぼその範疇に含まれるものである。しかしその中でも小形に属し、その後の磁器焼成を行った登窯が窯室数及び窯室の1つの広さが拡大し、それが横長の状態で縦に連なって行くのに対して、当古窯では縦長で連なる特徴を有している。もちろんこの変遷だけでは決定的な要因となり得ないが、その後にこの型式に属するものが姿を見せなくなると言うことは、唐津系陶器の初期の段階における現象として捉えてよいものと思われる。また窯室数が7～8室程度の規模という点でも飯洞臺下窯と一致するところである。

次に資料からは、ここで焼成されたものは一般的な壺・甕・皿などの雑陶類であり、いわゆる唐津焼を代表する茶陶類はなく、わずかに碗類で天目形の器形、高台が腹形に頗る一部の資料で推測されるにとどまる。原料の胎土はあまり火度に強くない鉄分が濃く混ったもので、原料選択にさほど配慮が施されていないことが製品の中での石はぜなどに認めることができる。鉄分の濃い土を用いる唐津系陶器には武雄系唐津があるが、これらの窯場ではこの鉄分の濃さを消すために刷毛目や象嵌技術など装飾技法が発達しているわけであるが、ここではこれらの装飾技法はもちろん前述したように絵唐津類も全くなく、その点では非常に素朴なものである。釉薬でも本灰に鉄分が入ったものを基調としており、そのことがわずかに黒唐津、青唐津の製品として生み出されている。

成形では壺・甕類が輪積みから叩き締めの技法を用い、皿・碗類に水洗きの技法が行われていることは他窯製品と異なるところはない。しかし詳細に眺めると内外叩きの後でなで消すような手法を用いたものがあり、なかには外側よりも内面に多く行ったものもある。叩詰めは上製のはま、支柱台（とちん）それに陶片を使用しているが、これらの中には粗穂や繊維質のものが付着した痕跡を示すものがあるところから、釉薬の流れ過ぎによる失敗を防ぐために意識的に粗痕、繊維質等のものが利用されたことが碗類の高台疊付部にも認められることから断言できる。出土資料からは碗類には内面に重ね焼きの痕跡を残すものではなく、皿・平鉢・鉢類に胎上目の痕跡を残している。また壺では図4-2の口唇部にタール状のものの付着が認められることは、口幅の広い壺や甕類に伏せ焼きや口と口を合わせた重ね焼きの方法が行われていることが判る。

最後にこれらの特徴をもつ土師野尾窯（中道・ハラタラ）の唐津系陶器群の中での系統と編年的な位置づけに触れてみよう。まず唐津系陶器の研究は古くに組み立てられた一本の流れが今日まで多少の修正はあったにしても踏襲されていると言っても過言ではない。それはもちろん文献資料の乏しさもあるが、多くは科学的な方法が用いられなかった研究初期の段階に確立

されたものであり、その目安となった根拠もあいまいである。たとえば古窯跡の分布を基盤とした分類も一部では納得できるところもあるが、平戸古唐津系に至っては佐賀県西松浦郡から長崎県のほぼ北から南までが含まれるという事実は全く無謀と言えることである。また愛玩される製品を焼いた窯のみが強く前面に押し出され、しかもその窯においても全体的な映像からではなく、特徴ある製品とともにどのようなものが焼成されたかについては深く言及していないこともあげられる。これは物原の層位的な発掘調査が行われた窯跡が少ないと起因しており、結果として編年作業を行う上で大きな支障となっているのである。そのために本古窯の位置づけについても困難な様相を示しているが、さいわいなことに窯の構造・規模と科学的な方法による年代算出の方法がとられたことは評価できる。ただ物原の調査において豊富な出土品に恵まれず、層位的な把握ができなかったことは問題を残している。

結論を言えば本古窯はこれまで言われてきたような慶長の役（1597～1598）以降に開かれた窯ではなく、少なくとも岸嶽系古唐津とほぼ並行期に位置づけることができる。即ち古唐津の系譜を大きく雜陶焼成期、茶陶招来期、磁器焼成の3期にわけて考えるならば、ここでは茶陶製品はなく、また装飾的な技法が見られない庶民生活具が主である点でも肯定される。それに加えて資料の観察から成形、施釉、作調とともにこれまで言われてきた朝鮮の高麗末から李朝初期の陶技の影響を強く受けており、中にはそのものを伝承している気配すらある。また窯の構造・規模ともに同様なことが言えるであろう。

註 筆者は、絵唐津以前に埴輪のみの陶器焼成を行った時期があるとし、岸嶽系古窯での絵唐津陶片の出土はもう一度窯及び焼成品について検討する必要があると考へる。

即ち、陶片の出土はそれが絵唐津の発生期を示しているのか、あるいは物原の分層発掘が行われなかつたことに起因しているかである。

3. 土師野尾窯の伝世品について（第26・27図、図版19）

今回の調査では発掘調査と並行して、伝世資料の調査を地元で実施し、その結果3点の資料を見い出すことができた。

この資料調査にあたっては、諫早市文化財保護審議会委員植村富士男氏に担当して頂いた。また資料の掲載に際し、ご快諾頂いた所蔵者各位に深甚の謝意を表するものである。

さて、土師野尾窯の伝世品については、これまで出土陶片も少なく目安となるものに欠けていたが、それでも数点の資料が確認されていた。これは諫早市在住のつかさコレクション代表植村富士男氏の長年に亘る探索が進められ、まず愛陶家の眼に最初に触れたのが「黒唐津三耳付葉茶壺」である。輪積みを経て叩き締めによって完成されたやや胴長の壺は、口縁部の形成は天正20年在銘の壺と類似する古式の様相を示すものである。内外の叩き（内側は青海波叩き

痕)はその後になでて消されて釉薬がかけられているが、施釉されない胴部の鱗痕はきめの細かな鉄分の濃い上であることを示している。釉薬は鉄分を含む木灰釉で火表は酸化炎による黒色、火裏は還元によって緑色を呈しているが、第26図2の「黒唐津壺」も同じ釉薬を用いて、同様な現象をおこしている。こちらは前者が口縁部のみ内側に施釉しているのに対して比較的内部までかかっているし、成形も明らかに異なる水挽きによる輪郭目を顯著に残している。次にその詳細を述べる。

1は中道古窯跡北側の田んぼから出土した資料である。口径130mm、器高79mm、高台径56mmを測るやや大ぶりの壺である。体部は内湾気味に立ち上がるもので、外面に凹凸の水挽き痕を明瞭に残す。口唇部はやや尖り気味におさめている。底部は1回のヘラケズリを施し、高台部を作出している。高台は竹箇に近い形をなし、重厚である。高台内は深く抉り兜巾を見せる。また墨付に糸切り痕が残る。灰釉は胴下半を上見せとして残す外は全面に掛ける。内面淡緑茶～淡黄緑色、外面淡緑茶～緑黄色を呈し、外面に一部発色不良が認められる。

2は黒唐津壺で重量感がある。水挽き成形でロクロ目が残る。基底から立ち上がる器壁は厚く、底部から%位のところで最大径163mmを測る。肩部はすんなりと内傾して口縁部にいたり直口する。また口縁部は丸く玉縁状に作り出す。口径120mm、器高155mm、底径84mmを測る。底部は糸切り痕が残り、約4cm位まで手持ちのヘラケズリが看取される。釉薬は鉄分の多い灰釉で黒色に発色し、部分的に緑色を呈するように窯変している。また所々に釉を弾いて茶褐色の鉄分の多い器表を見せている。内部はべっ甲様に黒と茶に発色している。

3は「黒唐津三耳付葵茶壺」である。144mmの安定性の良い底部からすんなりと延び上がる体部を示し、胴中位よりやや上で最大径をとりゆっくりと内湾して肩部をなしている。口縁部は直立して口縁部は逆L字状に折り曲げている。成形は底部板おこし、13段の紐造りで外面胴下半に左上がりの叩き痕、内面全面に青海波の当て板痕を留めている。叩きの後内外共にナデて仕上げる。また肩部内面にはユビ押えの痕が顕著に残っている。肩部には1条のヘラ描沈線をつけ、その上に3個の耳を貼り付ける。釉薬は口縁内面から外面胴下半まで流し掛けおり火前で天目色、火裏で濃緑色に窯変している。全体に恒って石ハゼがまばらに認められる。重厚な壺であるが実に軽く仕上がっている。

(つかさコレクション蔵)

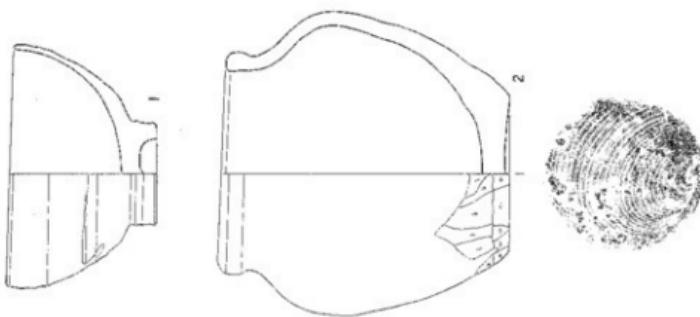
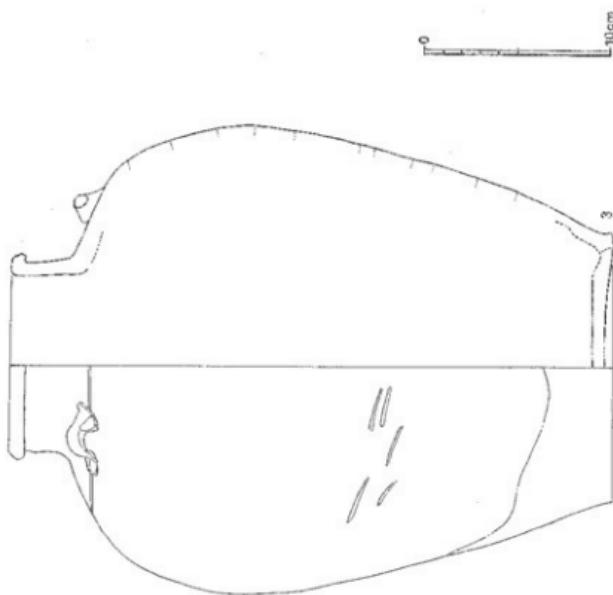
4は叩き黒唐津壺で焼け壺んでいる。口径184mm、器高456mm、底径200mmを測る。安定感のある底部に胴艮の体部をなし、口縁部は短く外傾し口唇部はT字状に作り出す。底部板おこし、11段の紐造りで、内面円弧状の連続した当て板痕を残す。後ハケ仕上げか。外面は胴下半にタテに残る叩き痕があり、その多くをナデ及びヨコナデ消去している。器壁厚く、かつ重い重厚な壺である。全体的に大きな火ぶくれが認められる。釉薬は鉄分の多い灰釉を口縁部内面から外面にムラなく掛けおり茶～黒色に窯変している。現在も茶壺として使用されている。

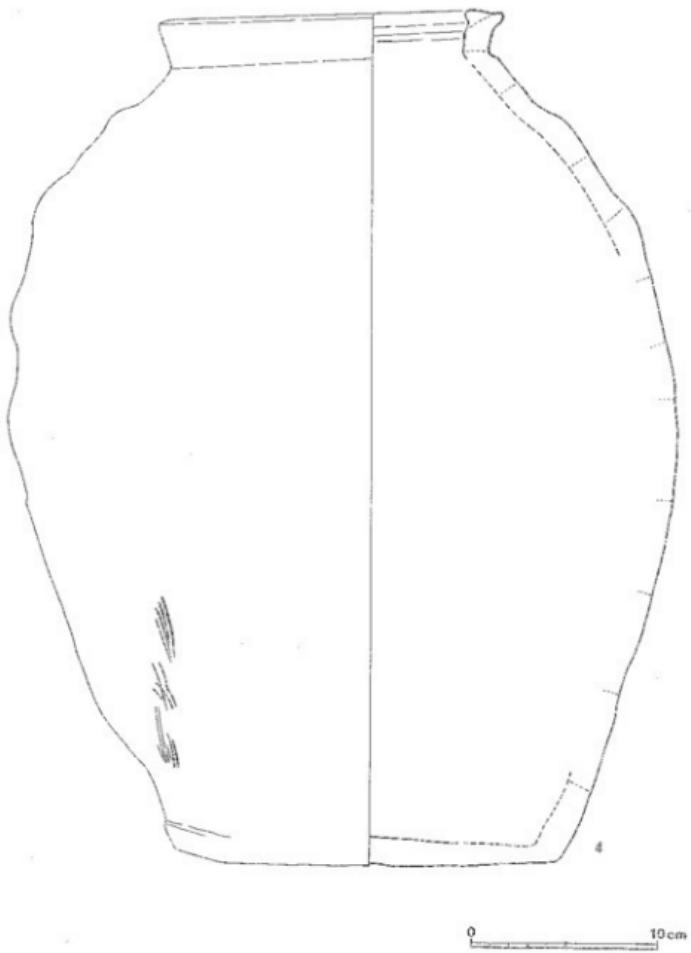
(田中重秋氏蔵)

以上が、調査前あるいは調査後に発見した土師野尾焼伝世品であるが、これらが全て土師野

尾巻の特徴を網羅しているものとは断言できない。しかし今回の調査成果に照らしあわせると製作技法や施釉技法がよく合致しており、その点では当窯焼成品の特徴をそなえた代表的資料と言える。なお数年にわたる伝世品確認調査でもその発見数は少なく、今後新たな資料が発見される機会は非常に離しい。

第26图 土印野屋燒瓦世器 (1/3)





第27図 土師野鷹焼伝世品 (1/3)

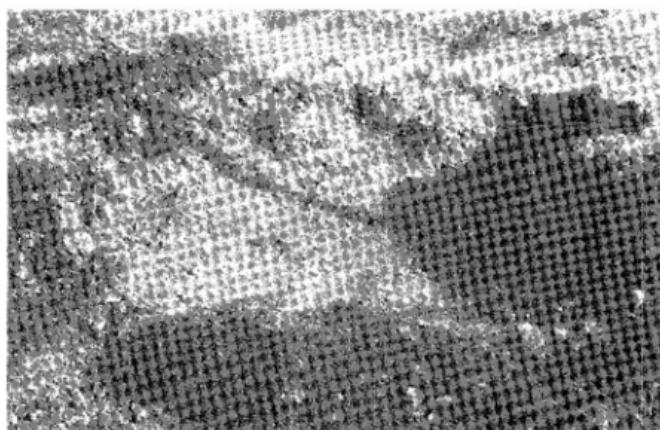
図版



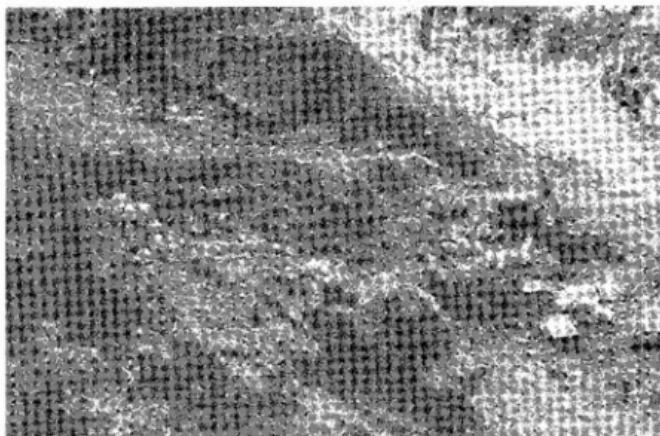
ハラタラ古窯跡全景（西より）



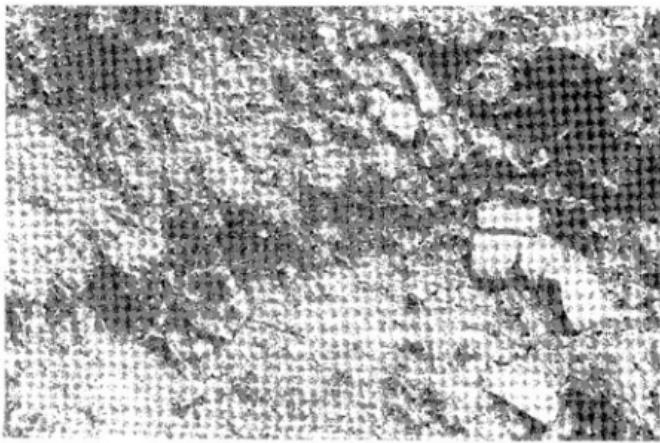
窯跡全景（西より）



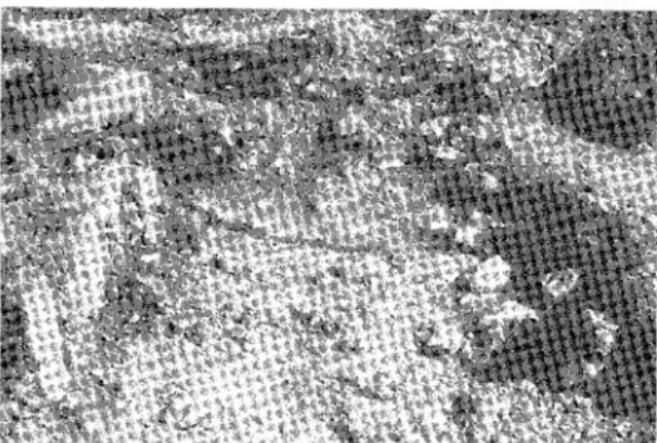
第3室の状況



第3室遺物出土状況



第3室遺物出土状況



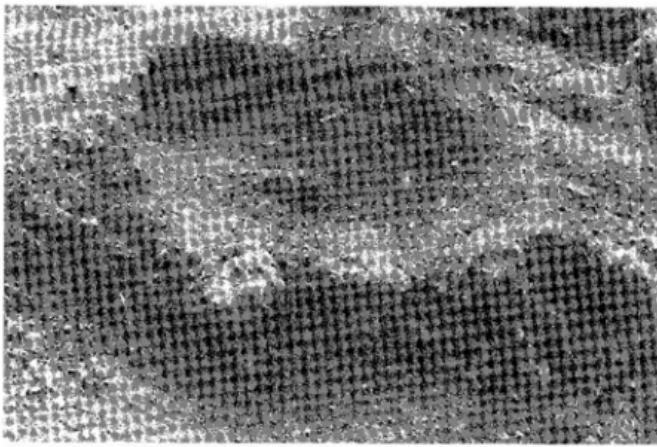
第Ⅰ室から煙出し



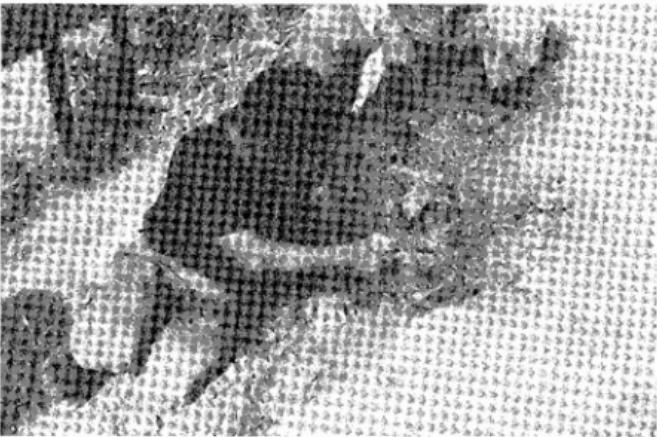
第Ⅰ室から煙出し



第Ⅰ室東壁残存状況



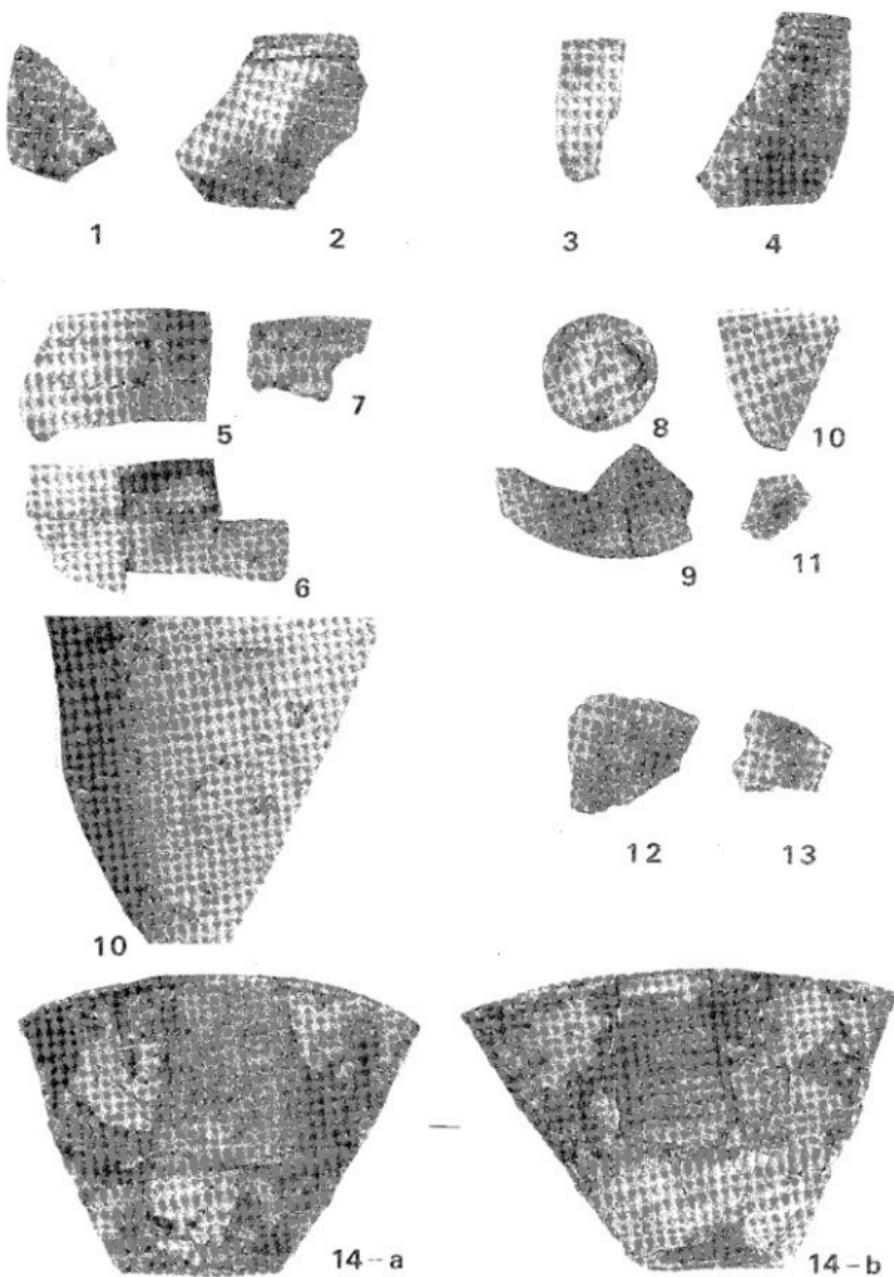
第1室焚口状況

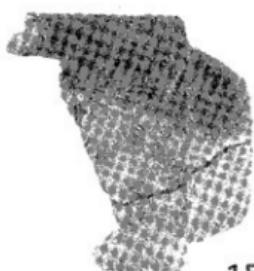


調査風景

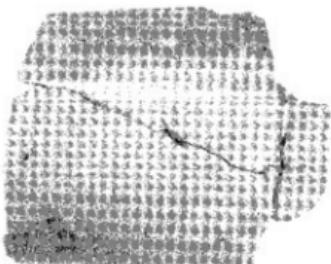


調査風景

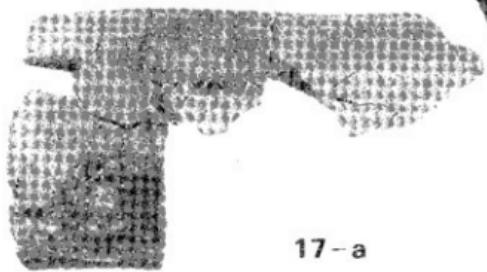




15



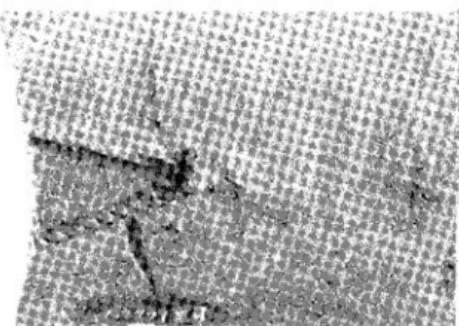
16



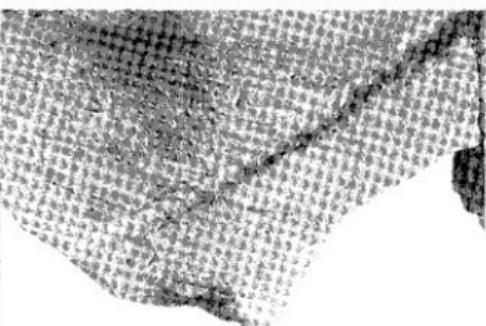
17-a



17-b



16



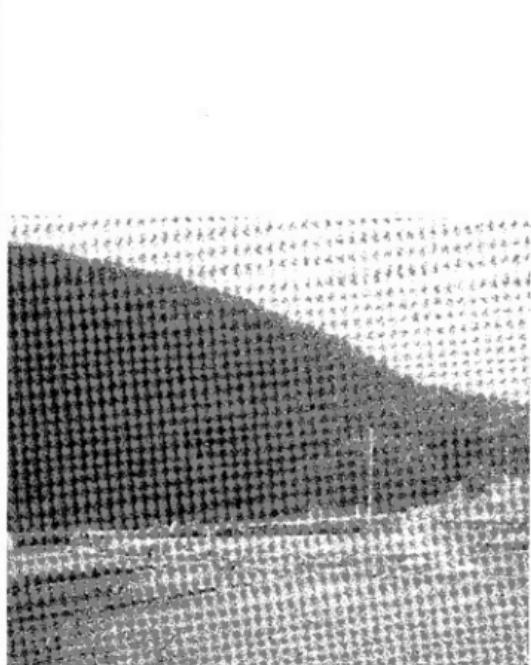
17



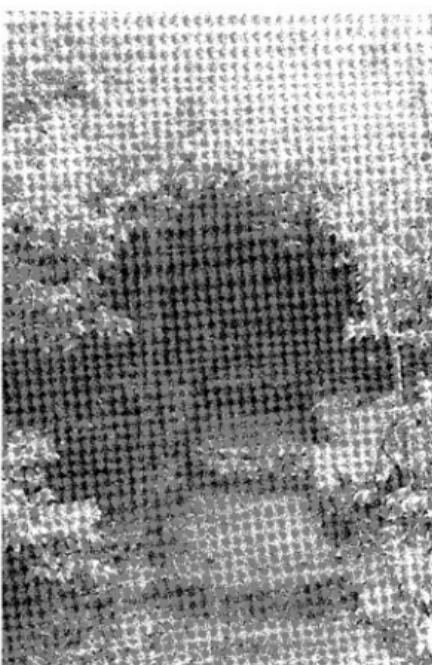
18-a



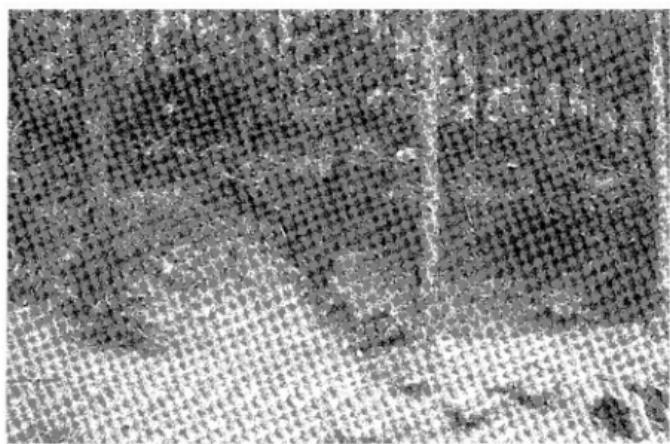
18-b



中道古窯跡全景（西より）



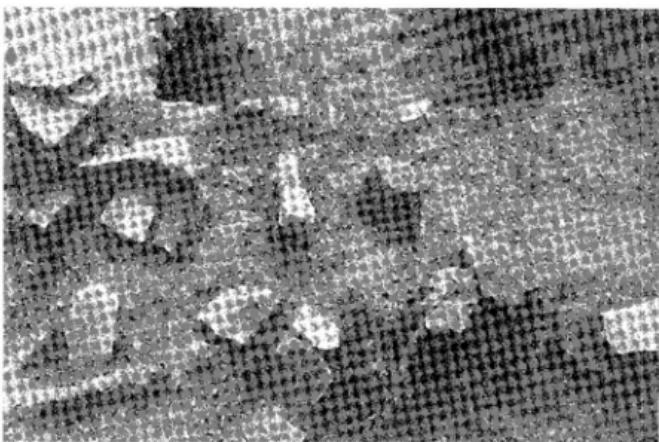
窯跡全景



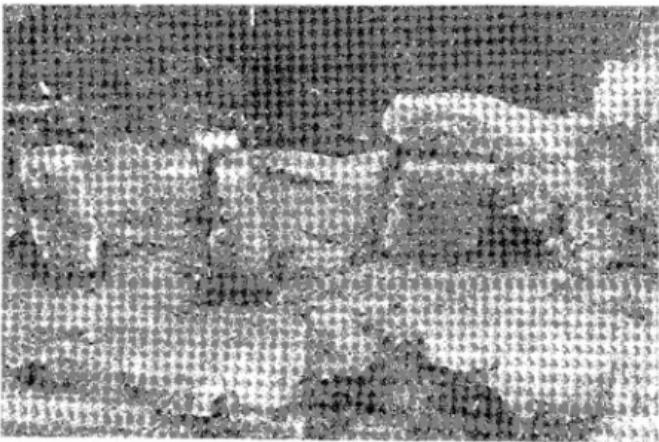
落ち込み部全景



煙出し状況



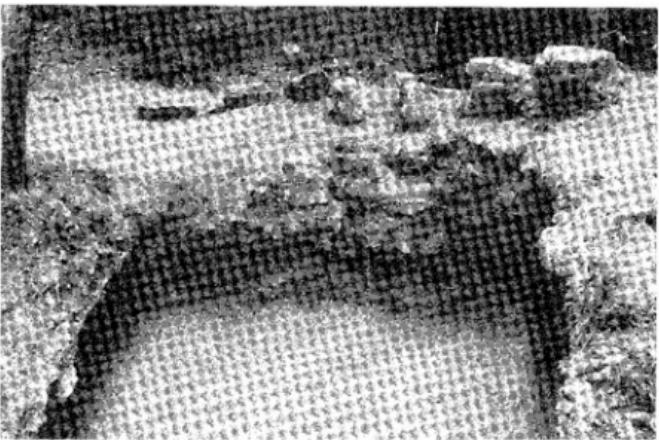
煙出し状況



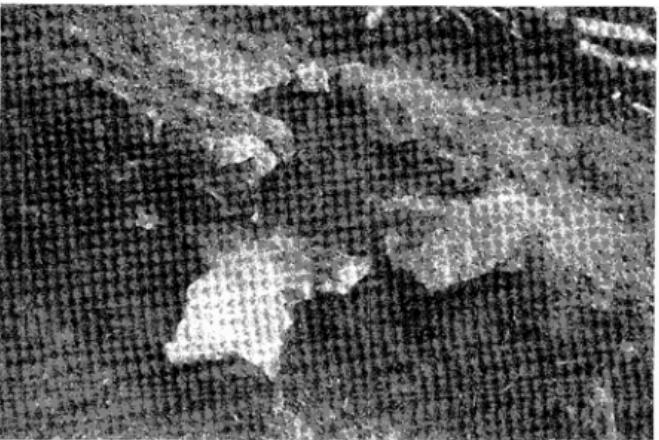
煙出し細部



第1室から第2室の状況



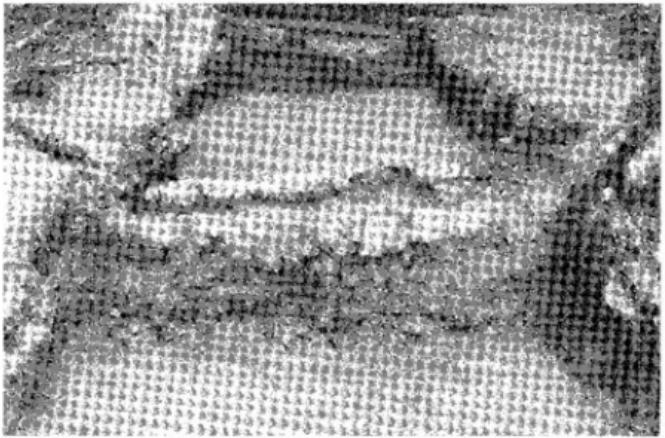
第1室奥壁状況



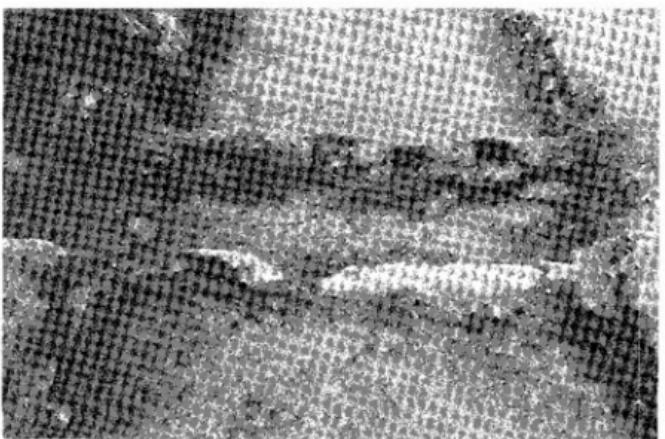
第1室焚口部状況



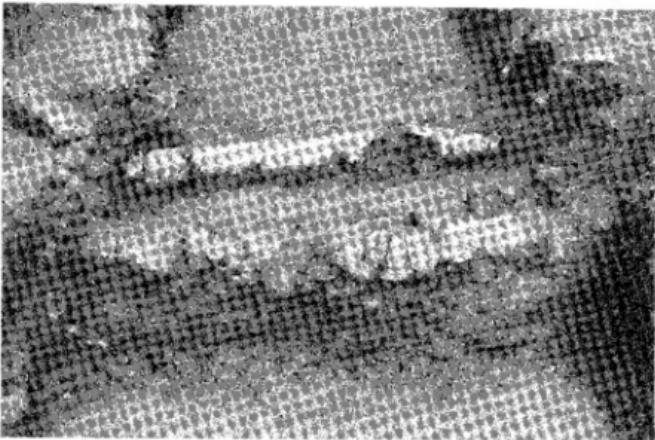
第2室左隅の状況



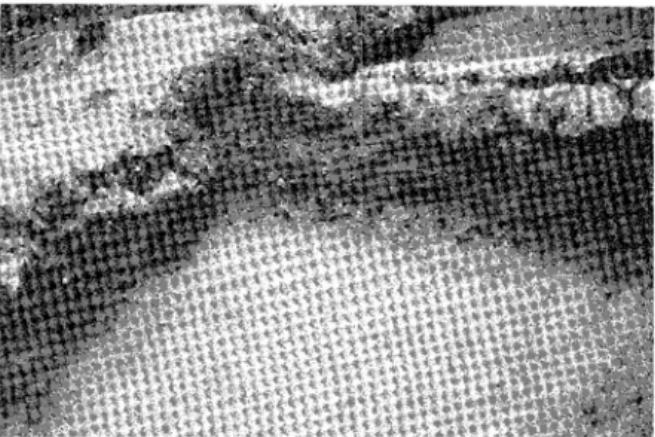
第2室全景



第2室火床状況



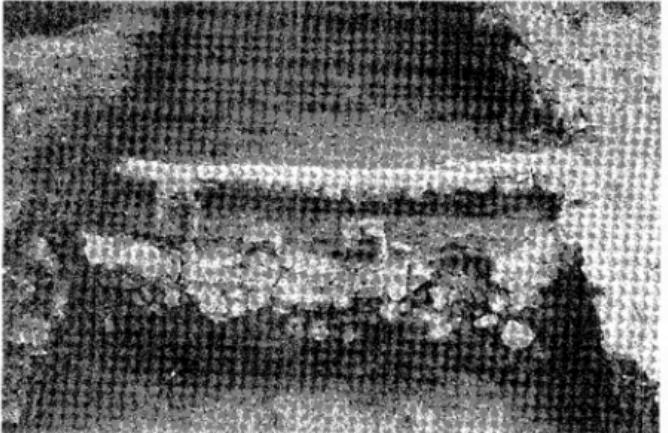
第3室奥壁状況



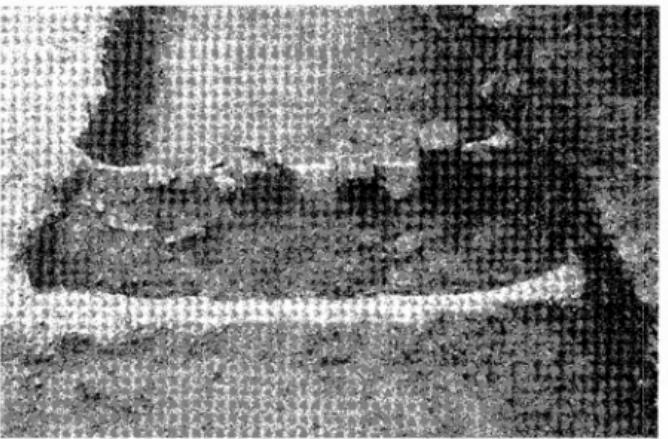
第3室左隅の状況



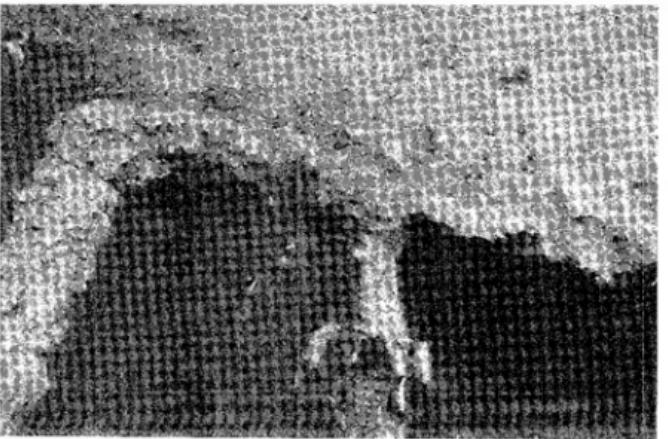
第4室奥壁状況



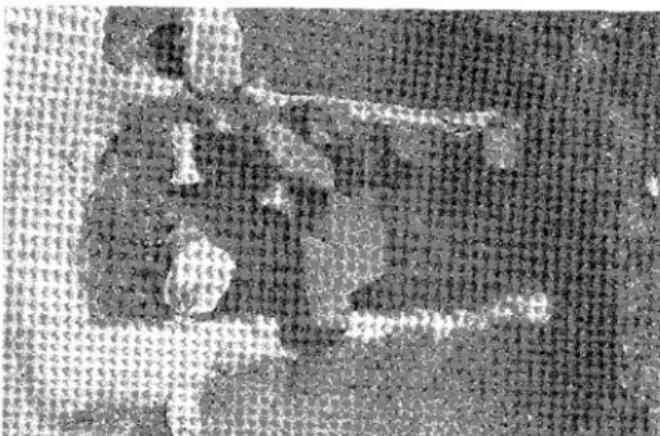
第3室火床状况



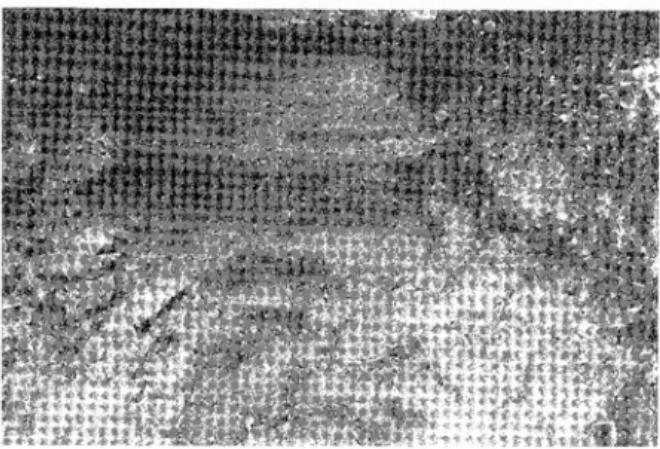
第3室火床状况



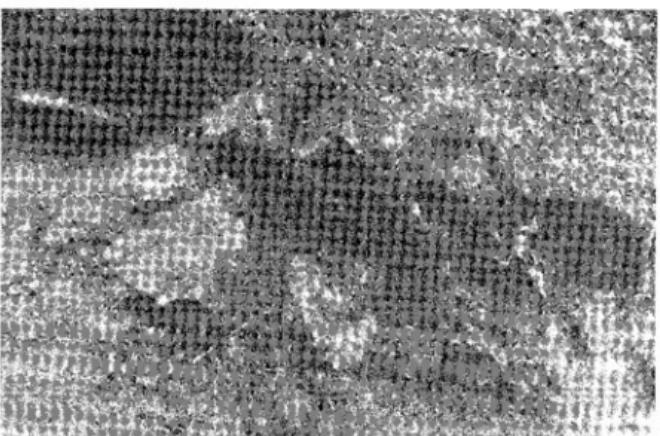
第3室焚口部状况



第3室火床状況



第4室・第5室全景



第4室焚口部及び第5室右側壁状況



遺物出土狀況（第3室）



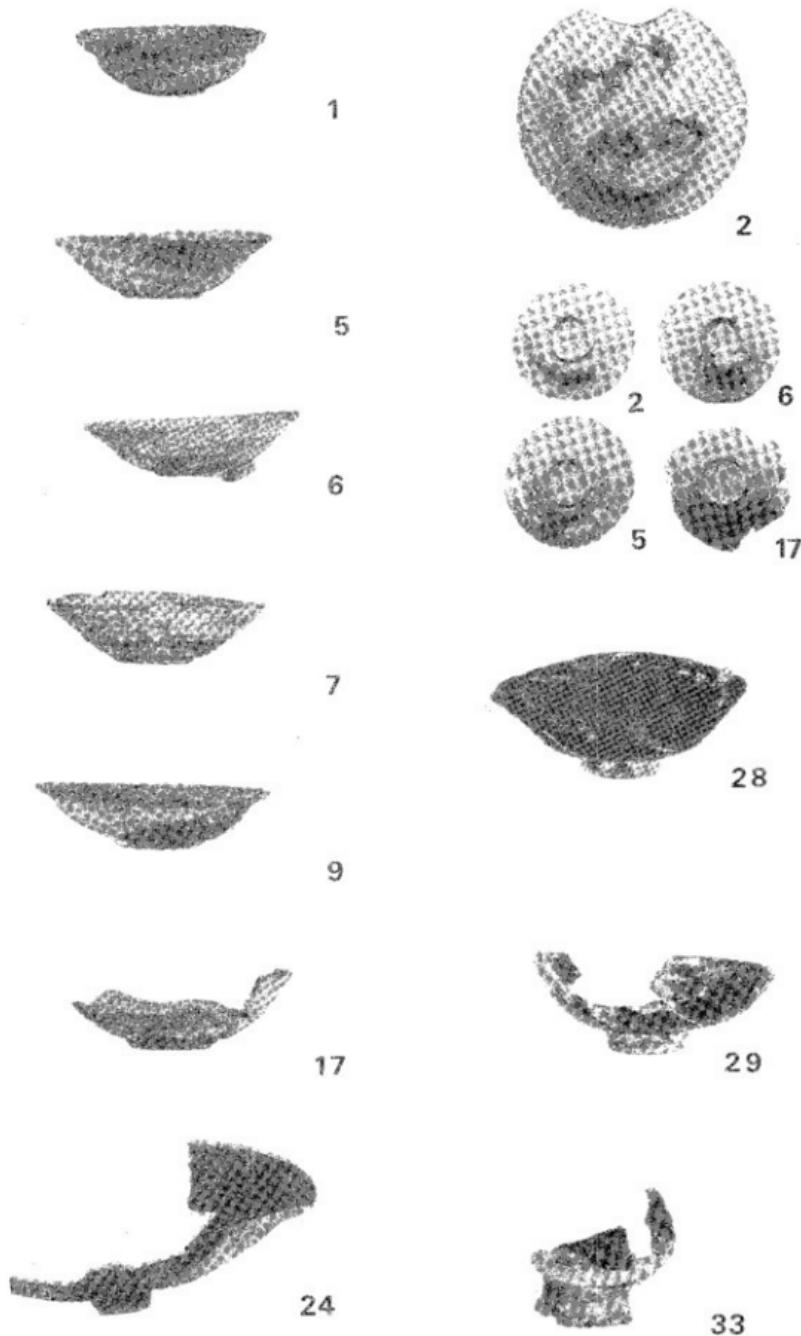
遺物出土狀況（物原）

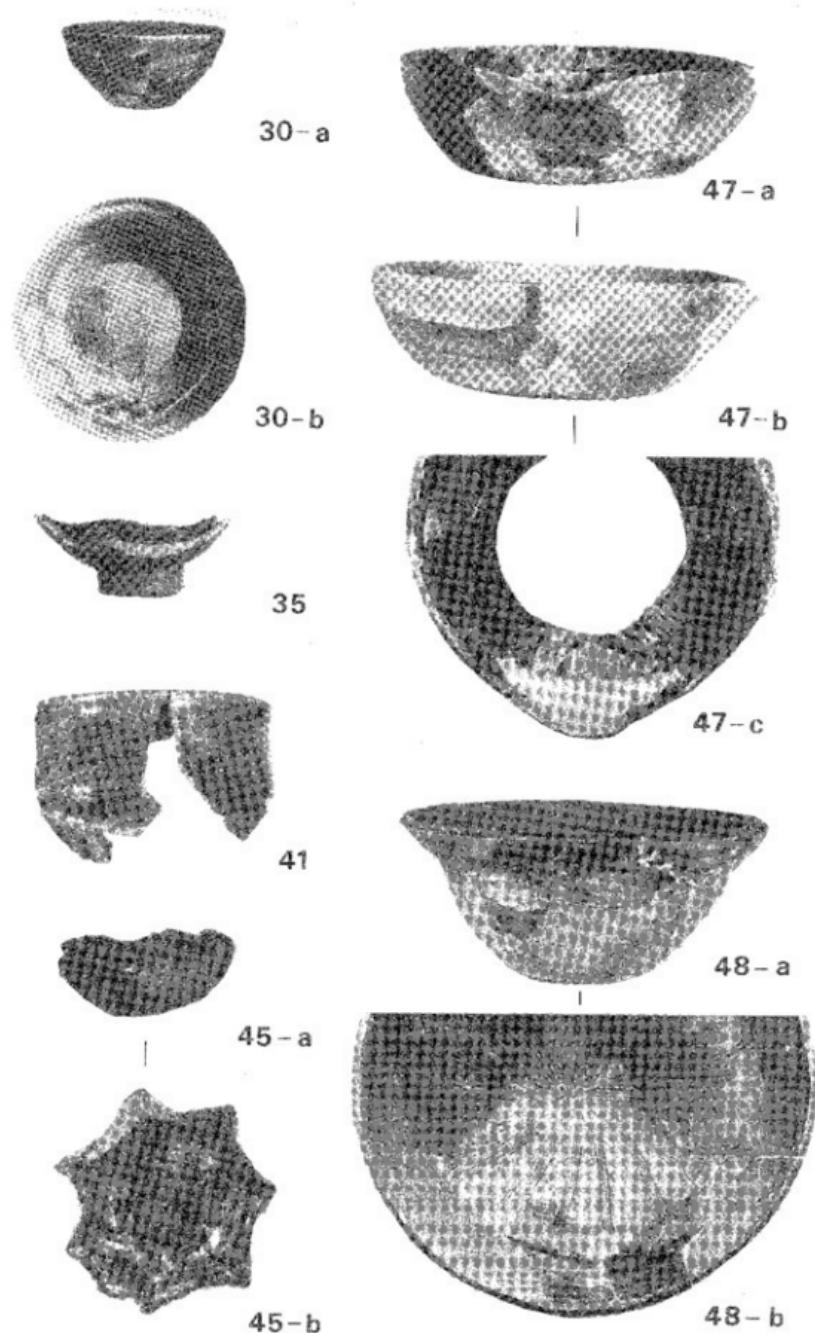


土層断面（側溝）

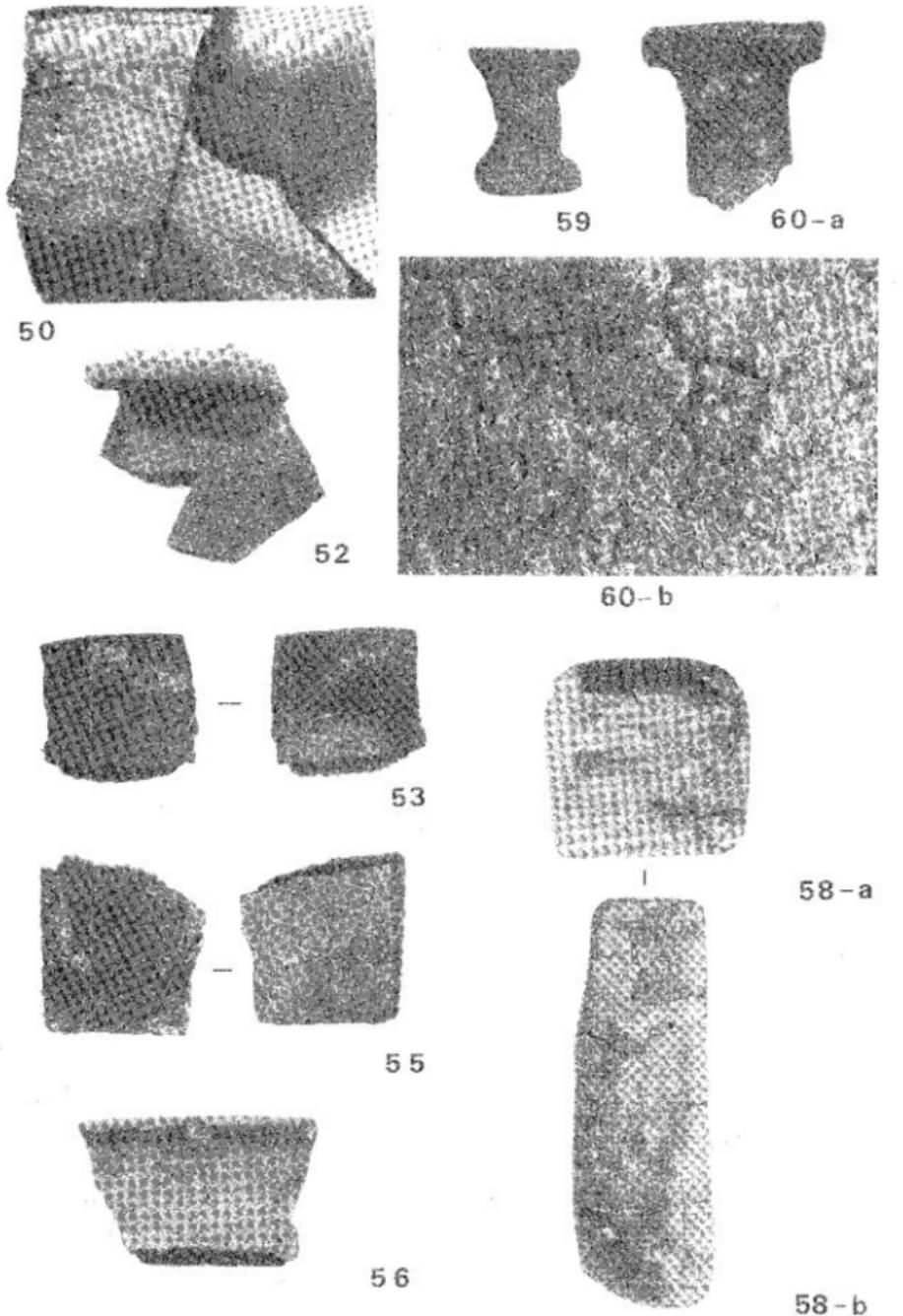


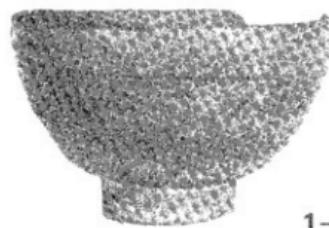
図版16 出土遺物



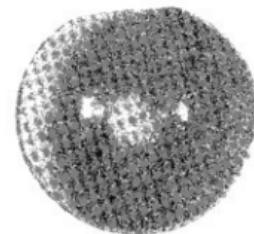


図版18 出土遺物

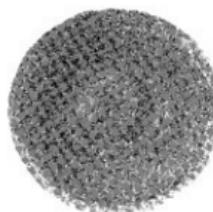




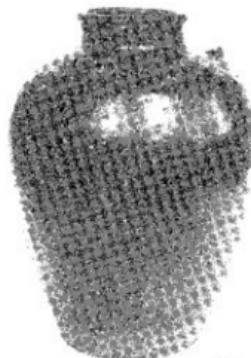
1-a



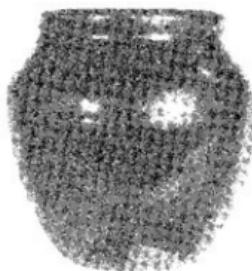
1-b



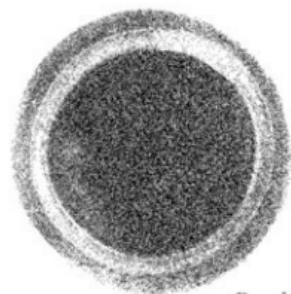
1-c



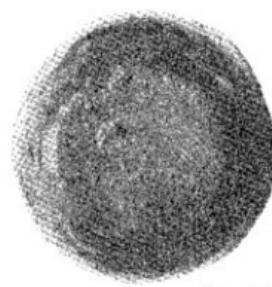
3



2-a



2-b



2-c



4

文化遺典譜

諫早市文化財調査報告書第6集

土師野尾古窯跡群

第1版 昭和60年3月31日

第2版 昭和61年7月10日

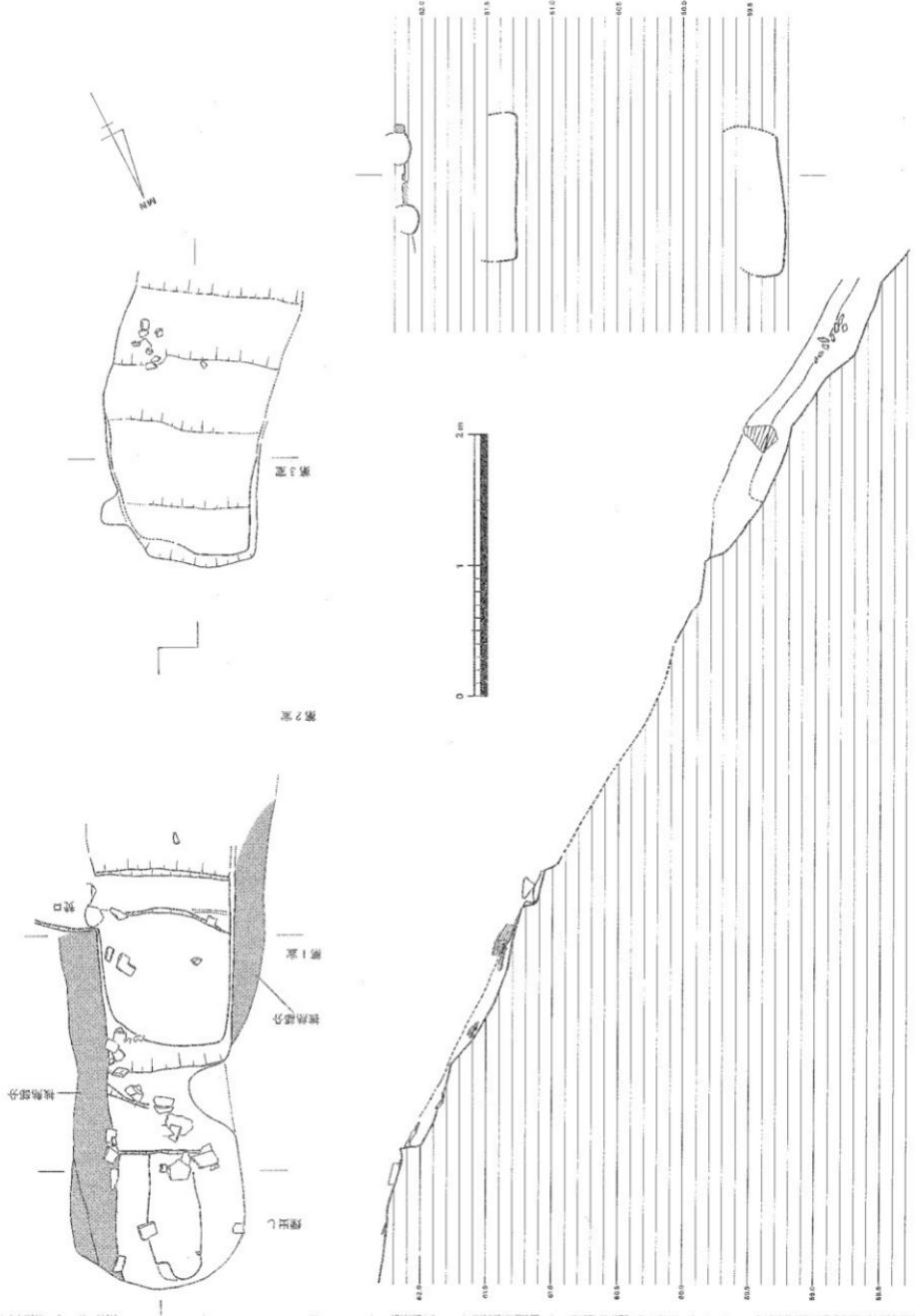
発行所 謹早市教育委員会

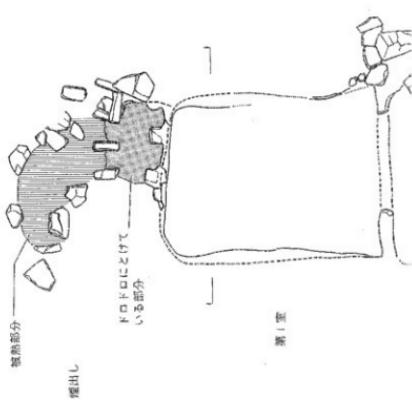
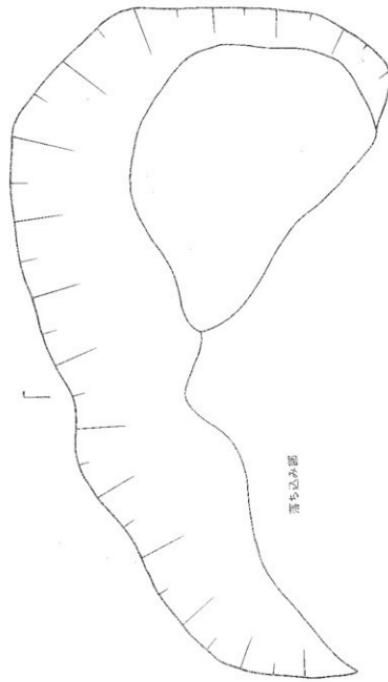
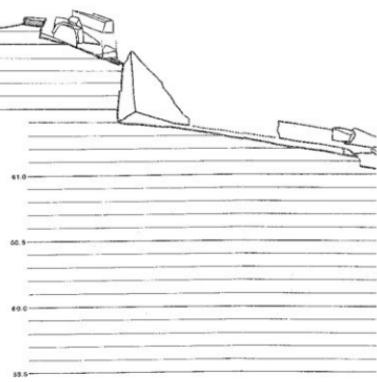
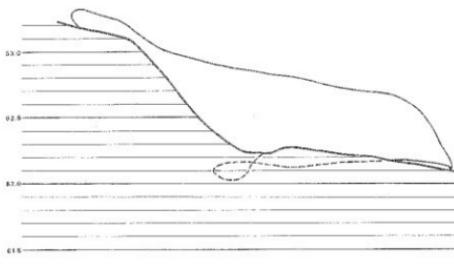
諫早市東小路町1番地

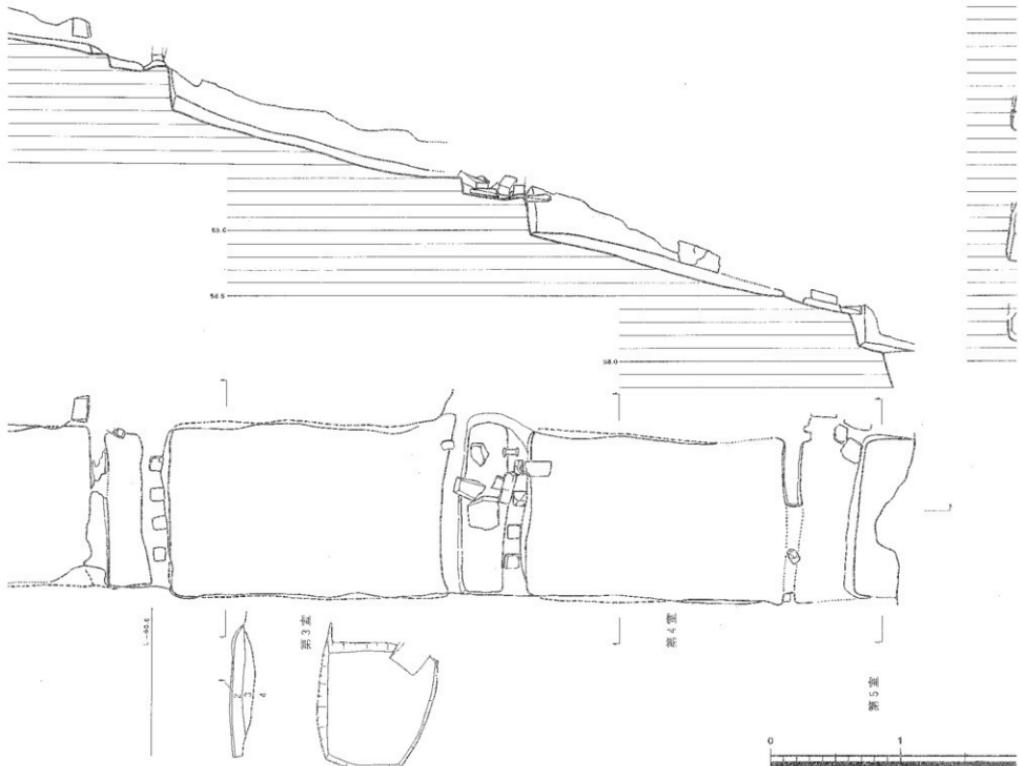
印刷所 昭和堂印刷

諫早市長野町1007

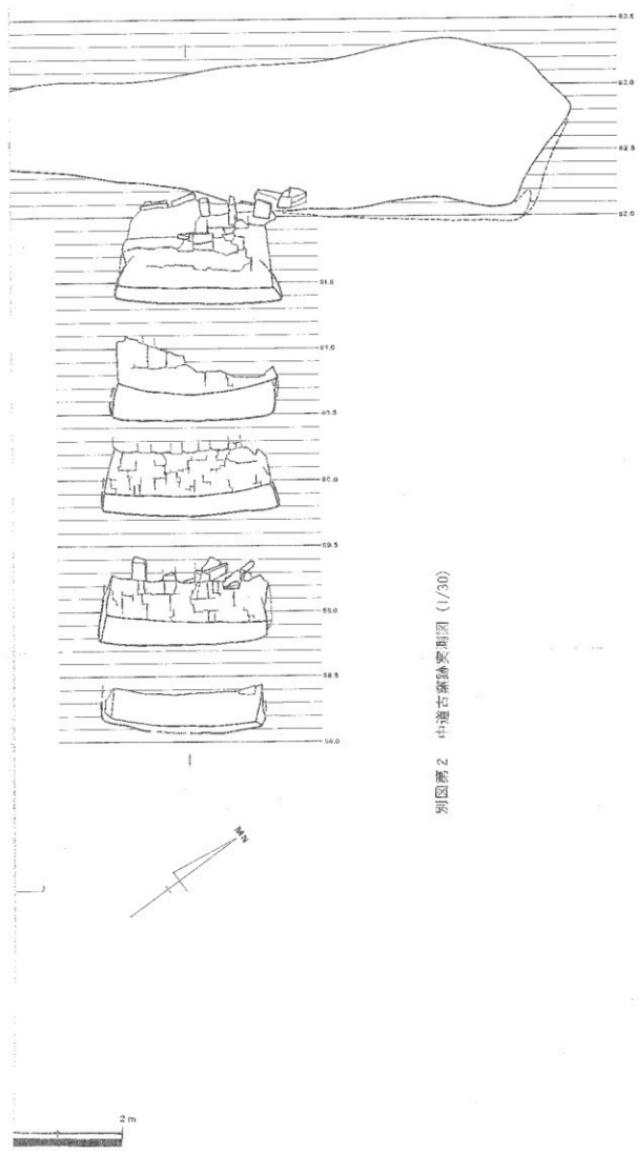
图例第1—15号古建筑实测图(1/30)



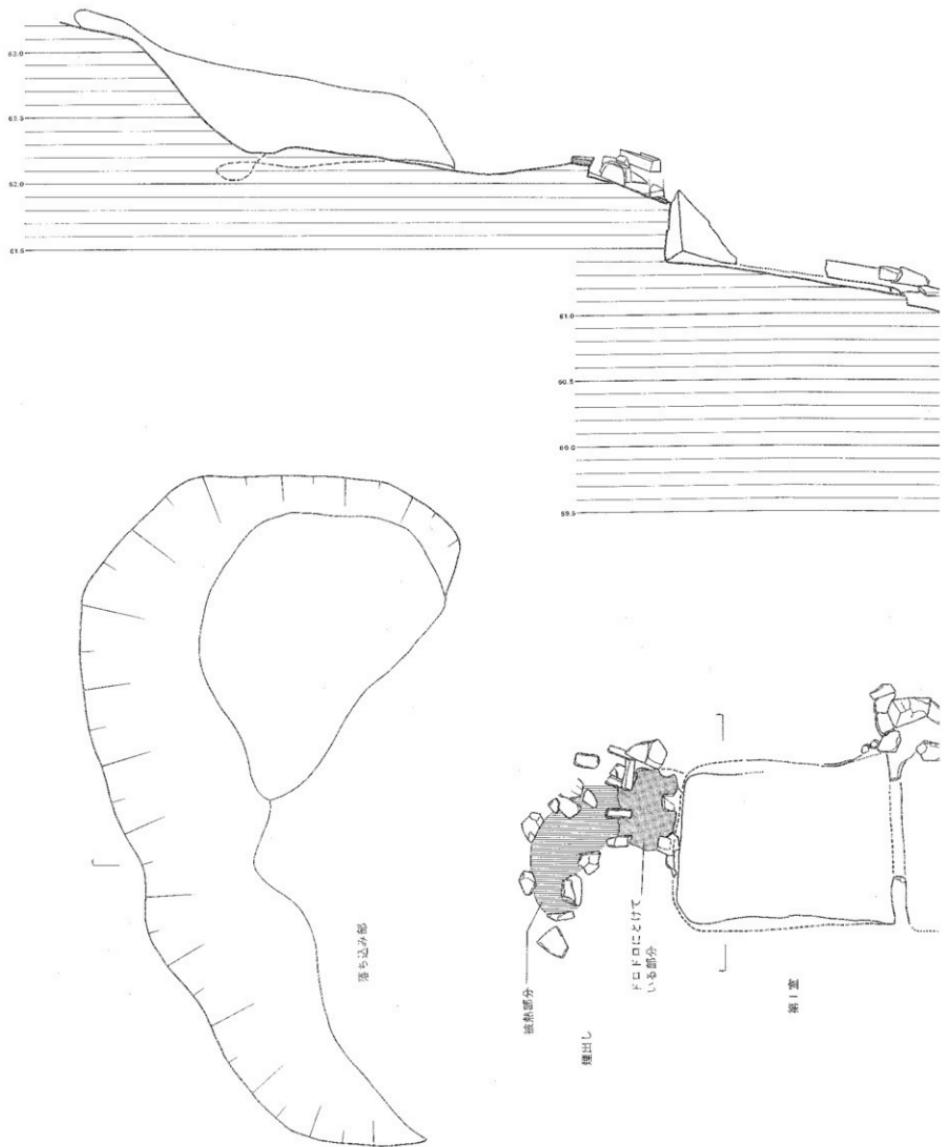


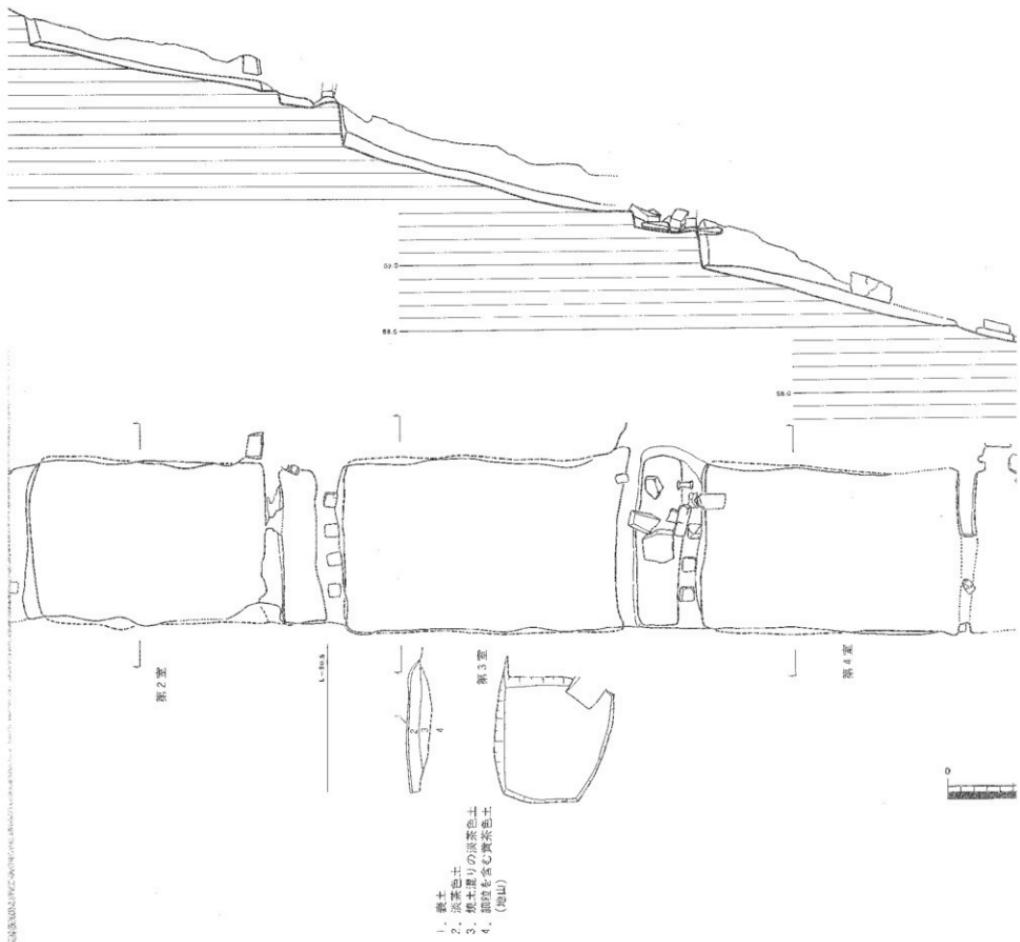


1. 砂土
2. 淡茶色土
3. 黒木炭の灰茶色土
4. 鉛白を含む黄茶色土
(廻山)



別圖第2 中海古麻跡剖面圖 (1/30)





別圖第2 中海古原遺跡剖面圖 (1/30)

